
新たなる戦い～第1章～

龍嵐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新たなる戦い〜第1章〜

【Nコード】

N7574J

【作者名】

龍嵐

【あらすじ】

第1章：フィルムレファミリー編

未来から無事に帰還した10代目ボンゴレファミリー、これはその後
の物語・・・・・・・・・・

時期：未来編終了後から継承式編開始までの間

標的0 ～序章編～

10代目ボンゴレファミリーは無事10年後の未来から帰還し、それぞれが各々の生活を送っていた。

しかし、そんな彼らに平和はそう簡単に訪れることはない。

マフィアである以上常に死と隣り合わせである。もちろん・・・その仲間も・・・

ツナ達はこれから来る戦いを終わらせることができるのか・・・

信じあう仲間と共に・・・

未来で手に入れた新たな仲間たちと共に・・・

愛する者のために・・・

次に現れる敵の正体とは？

開幕！！

標的 1 動き出す運命

イタリアのどことも知れぬ場所で2人の対談があった・・・

「情報は確かなのか？」 白銀の髪に冷たい視線を持った男が言った。

「ああ、間違いない」

そう答えたのは男にしてはやや長い金色の髪を持ち、こちらも冷たい視線を持った男だった。

「しっかしあんたもよくやるよな、あんな状態から解放されたばっかだろ？」

「ふふ、恨みは強くなる一方だよジェラート」

その言葉に強い力を感じたジェラートは一瞬不意をつかれた。

「さあ行け、ジェラート」

白銀の男はそう言うつと部屋の奥に消えていった。

ジェラートは部屋を出てこう言った。

「アイツは強いぜ、おそろくあんたが思ってる以上にな、しっかしよく似てんなー、ボンゴレ？世・沢田綱吉」

ジェラートは手に写真を見ながらそつつぶやいた。

その声を聞いたこのようにツナは振り向いた。

「えっ？今誰か・・・」

背後には誰もいない。

「気のせい、か」

ツナは歩き出した。

そして運命は動き出した、誰も知りえない新たなる未来に。

標的 2 電話

10年後の未来から帰還したボンゴレ10代目とその仲間達。

戦いから1週間ほど過ぎていた。

（また、いつもの平和な並盛に戻ってきたんだ、もうあんな思いはヤダな〜）

ツナ常々思っていた。

「もうみんなを危険な目には逢わせたくない、獄寺君も山本もラッポも、クローム、雲雀さん、ハル、そして京子ちゃん」

しかし……………

「おい、ツナ」

ドゴッ！…！

「いで〜、な、何すんだよりボーン」

ツナの足元には黄色いおしゃぶりを持つアルコバレーノで世界最強のヒットマン・リボーンが立っていた。

どつやらツナがポーッと立っていたので蹴っ飛ばしたのである。

「ディーノから電話が来てるぞ」

「えっ？ディーノさんから？」

電話の相手はツナの兄弟子で、キャバッローネファミリー10代目ボス・ディーノだった。

「どうしたんです？ディーノさん」

「実はな、9代目からの伝言があるんだ。明日ボンゴレファミリーと昔から絡みのあるリースファミリーってやつらが日本に来日するらしくてな、空港まで出迎えてほしいんだ。」

「んなつ、マフィアを出迎えるんですか？そんなの絶対嫌です」
ツナの心からの叫びに

「行けばいいじゃねえか、お前は次期ボンゴレ10代目ボスなんだ、こういう場も慣れとかねえとな」

「リ、リボーン。で、でも」

リボーンはツナに銃口を向けた。

「ひいつ、行くよ、行けばいいんでしょ」

「ってわけでよろしくな」

デイーノはそう言って電話を切った。

「とりあえず獄寺と山本にはお前から言っとけ」

「う、うん、あとは京子ちゃんのお兄さんとクローム、雲雀さんは来るかな？あとランボ」

「ランボはいい、今のあいつは役に立たないからな」

.....

「てわけなんだ」

「もちろん行きますよ、昔からボンゴレと絡みのあるマフィアなら交流を深めるチャンスじゃないっすか」

「まっ、どうせ暇だしな、行こうぜツナ」

(やっぱり獄寺君も山本も相変わらずだな)

「でもオレはあんまり行く気しないんだよね、ハア」

「まあまあ、いいじゃねえか」

ため息をつくツナに山本は言った。

「行きましょう10代目」

一方獄寺は張り切って言った。

(マフィアを出迎えるなんてヤダよ、どうせヤバイやつらなんだろう、それに……)

ツナはボンゴレ血族のみ持つことのできる特有の直感である「超直感」で何かを感じ取っていた。

標的3 フィオラとレイア

ツナ達は空港へ向かう車に乗って会場に着いたところだった。

「確かこの空港で間違いないはず」

しかし群れるのを嫌う雲の守護者・雲雀恭弥も来ていたことにツナは驚いていた。

「そう緊張するなよツナ」

沢田綱吉の父である沢田家光も同行していた。
みんなはイタリアから来た飛行機の客が出入りするところまで行った。

（っていつてもどの人がそのリースファミリーの人達かわかんないよ）

とても大勢の人が降りて来たが会ったことのないツナ達にはリースファミリーの人間なんか検討もつかなかった。

「しっかしイタリア人ばっかだな、どれがリースファミリーのやつらかわかんねえのな」

山本が笑いながら言った。

「私達がリースファミリーだよ」

山本の言葉に答えるように後ろから声がした。

そこにはと一人の老人とたくさんの男達が立っていた。

「はじめまして、君が沢田綱吉君だね、私はフィオラ、ボンゴレ？
世と家光から話は聞いているよ」

老人・フィオラはツナの手を握って言った。

「そ、それはどうも」

老人とはいえ相手はマフィア、ツナは少し固くなっていた。

「やはり聞いていた通りだよ、とても真っ直ぐで澄んだ目をしてい
る」

「えっ、オレがですか？」

少しあわてるツナからようやく手が離れた。

そしてフィオラは……

「そうだ、私の孫娘を紹介しよう」

フィオラの部下から一人の少女が現れた。

「おじいさま、お呼びですか？」

そこにいたのは長くて黒い髪をした美しい少女が立っていた。

「紹介しよう、私の孫娘のレイアだ」

フィオラはうれしそうに言った。

「はじめましてボンゴレのみなさん、レイアです」

レイアは優しく微笑んでいた。

「あの、えっと、オレは、じゃなくって僕は沢田綱吉です」

思いがけない美少女登場で緊張しまくってしまった。

「知ってます、ボンゴレ9代目からお聞きになっています」

「実は私達リースファミリーは日本に滞在することになったのだよ」

「なぜ日本に？」 ツナは聞いた。

「実はあるマフィアのことを調べたくて、ボンゴレのみなさんにもできたら手伝ってほしいの」

レイアの言葉にも驚いたツナ達だった。

「じゃあオレはフィオラと部下達と向こうに行ってるからレイア嬢を並盛でも案内してやんな」

「ちよっ、父さん」

こんなダメ親父だけ一緒にいてくれた方が心強かった。

しかしそんなことはお構いなしに、レイアは話かけてきた。

「ねえ、沢田君のことや並盛って町のこと教えてよ」

「う、うん」

ツナはぎこちながらもレイアの質問に答えた。

ツナ達はリースファミリーの用意した車の所に向かって空港内を歩いていった。

ツナはレイアに一通り教え、ふと顔を上げるとある男と目があつた。

標的 4 ウィンディ

ふと目が合った男。少し長めの白銀に染まった髪をしていて顔に少し傷があり、それを隠すかのような髪だった。

「貴方が沢田綱吉さんですね、私の名はウィンディ、どうぞよろしく」

「えっ、どうしてオレのことを？それにあなたは？」

「貴方様のお父上・家光殿からお聞きしたのです」

にっこりと優しい口調で話しているウィンディだったがツナはこの人に対して油断を見せてはいけない、と感じていた。

（それに、この人の顔の傷、どこかで見たとような）

ウィンディはツナの耳元でこうつぶやいた。

「貴方とはこれから長い付き合いになりそうですからね」

えっ、どうしてと聞こうとしたら彼はすぐさまどこかへ行ってしまうった。

「いったいなんだったんスかね？」

獄寺は不思議そうに言った

「う、うん、なんだったんだろ？」

その時レイアが、

「あの人、前に家に来てたことがある」

レイアは困った顔をして

「やっぱりわからない」

結局みんなはウィンディという男のことを気にしないことにした。

(あれが……次期ボンゴレ10代目?)

ウィンディは失望していた。

あんな内気な少年が9代目を選び、ボンゴレ最強を誇る特殊暗殺部隊ヴァリアーのボス・XANXUSを打ち破ったのか、と。

(確かに「彼」にはよく似ているが)

「しかし・・・」

ウィンディもまた沢田綱吉に対して何かを感じていた。

彼はそのまま空港を後にした。

この出会いが沢田綱吉とウィンディの運命は動かせたのだった。

標的5 フィルマーレファミリー

「はじめまして、レイアです」

(って、なんで並盛中学に転校してきてんの・・・)

ツナは心の中で叫んだ。

クラス中の男子達はは当然彼女にメロメロだった。

「あつ、沢田君、獄寺君、山本君」

レイアは3人に手を振った。

その瞬間・・・男子達は3人を睨んだ。

なんで普段からダメツナと言われてるやつや、女子に囲まれてるやつが知り合いなんだ・・・と。

「ねえねえ、レイアさんてイタリアのどこに住んでたの?」

「日本語上手だよね」

当然の如くレイアの周りに人がたかった。

「すごい人だからだよね」

避難してきた京子がツナのところへ来て言った。

「レイアさん、美人だから当たり前なのかな」

「う、うん、そうだね」

ぎこちながらも頷くツナ。

「しっかしスゲーっスよね、オレン時もそうだった」

「あはは、そついや獄寺も転校生だったな」

獄寺と山本がツナと京子のところへ来て言った。

「別に転校生が珍しいってわけじゃねーってのに」

「確かにそうだな」

「でも外国人の転校生ってそうそうあるもんじゃないんじゃないかな」

「10代目の言う通りっすよ」

相変わらずだがツナの意見にはすぐに同調する獄寺だった。

そして昼休み

ツナ、獄寺、山本の3人は屋上で昼ご飯を食べていた。

「そういえばレイアさん達どこかのファミリーについて調べるって
言ってたよね、一体どこのファミリーなんだろ」

「ボンゴレにも手伝ってほしいって言っていましたよね」

レイアが昨日言っていたことを思い出した。

「結局何をすればいいのかわかんねえな」

そこにちょうどレイアが来た。

「実はね、調べたいファミリーっていうのは最近力をつけてきたフ
ァミリーのことなの」

レイアは1枚の紙を取り出した。

「うわ、イタリア語で書いてある」

「見せてください10代目、えつとなになに、（古きもの、新しきものに喰われよ）って書いてありますね」

獄寺はツナにそう伝えた。

「意味わかんないや」

「実はリースファミリーやボンゴレファミリーの幹部クラスの人達が何人が暗殺されたの、それで」

「なんでリースファミリーとボンゴレファミリーが狙われてるんだ？」

「一体誰が」

獄寺と山本が言った。

「それが、まったく情報が入らないファミリーなの、わかっているのは名前と沢田君、貴方を狙っているらしいのよ」

「んなつ、なんでオレが」

ツナは青ざめた。

（せっかく平和な並盛に帰ってきたのに）

「らしい？」

山本がレイアに尋ねた。

「はっきりとした証拠はないんだけどね」

レイアは困った顔で言った。

「大丈夫？」

レイアは心配そうにツナに話しかけた。

「ハア」

いつにま増してすごいため息である。

「GAO」

「んっ？ナッツ、お前慰めてくれるのか？」

突然声を発したのは、10年後の未来で手に入れた仲間・天空ライオン（レオネ・デイ・チエーリ）のナッツだった。

本来はツナの心と同調するはずなのだが今回は違ったようだ。

「それなあに？」

レイアは不思議そうに尋ねた。

「ああ、これはね」ツナは自分達が10年後の未来での出来事をレイアに話した。未来での戦い、死ぬ気の炎、そして匣・・

「そんなことがあったんだ、ねえ見せて見せて」

話を聞いたレイアの目はキラキラしていた。

そしてツナはナッツのリングに炎を灯し、出現させた。

「GAO」

「わあかわいい、よろしくねナッツ」

「とじろでそのファミリィ名っていつのは？」

「ああ、フィルマーレファミリィっていつの？」

「フィルマーレ？知らないや、獄寺君知ってる？」

「いえ、自分は知りませんね」

「まあこれから手伝ってもらおうからよろしくね」

キーンコーンカーンコーン

「あ、チャイムが鳴ったから私教室に戻るね」

そう言うとレイアは教室へ戻っていった。

ツナは前途多難な運命に困り果てていた。

標的6 迫り来る影

結局なんのあてもないまま自分の家へ帰宅したツナだったが・・・

「ただいまー、ん？」

靴がいつもより多いことに気がついた。

「おかえりツー君」

沢田綱吉の母である沢田奈々が出迎えてくれた。

「誰かお客さん？」

「ええ、ツー君のお友達が来てるわよ」

自分の部屋に入ると・・・

「ちゃおつす、ツナ」

「おう、極限に元気か沢田？」

「うるさいよ、もう少し静かにできないの？」

ツナの部屋にいたのは家庭教師リボンとツナの守護者達だった。

「なっ、お兄さん、雲雀さん、それになんでみんないるの？」

ツナは慌てながらリボーンにヒソヒソ言った。

「な、なんでこの2人もいるんだよ」

リボーンはいつも通り無表情で言った。

「レイアから話があったんだろ？雲雀と了平にも聞いてもらった方がいいかと思っただけ」

「ん？お前、レイアさんのこと知ってたのか？」

「ああ、何度か会ったことがある、そんなことより」

リボーンがツナに銃口を向ける。

「さっさと話しやがれ」

「全世界を支配を支配するにはどうすればいいかな、ジェラート
よ」

ウィンディは静かに言った。

「あ、あんた沢田綱吉を殺すんじゃないのかい？」

ウィンディの発言にジェラートは驚いた。

「ああ、確かにそうだ、だが最近思うんだが沢田綱吉を倒したところでこの恨みが晴れるとは思えなくなってきたな、それに本当に奴の子孫なのか、ヴァリアーを倒した男とは到底思えない」

一体この男は何を考えているのだとジェラートは思った。

「まっ、なにせよオレらはあんたに従っただけだけだな」

「そうか、だが狙う理由がわかんねえうえに名前だけじゃな」

リボーンがため息をつく。

「僕は帰るよ、沢田綱吉がどうなるうと関係ないからな」

雲雀はそう言いつと帰って行った。

そして了平はといこと

「とにかく極限にそいつらを倒せばいいのだな、よし、極限に修行だああああ」

そう言つと了平も帰ってしまった。

「ど、どうすんだよりボーン」

ツナが焦つて言う。

「さあな、だが甘いことは言つてられねーぞ」

それから3日後・・・何も起こらないでいる。

ツナは学校が終わって一人で帰っていた。

その時・・・

「ツーナさーん」

並盛神社から聞き慣れた声がした。

「ツナくーん」

ふと見上げると

「京子ちゃん、ハル」

そこにはツナの想い人の笹川京子と友達の三浦ハルがいた。

「二人ともここでなにを？」

「はい、平和を願ってたんです」

「もうみんなが危険な目に逢うのは嫌だと思って」

しかし、その願いを打ち破るかの如く、謎の気配がする……

「そいつらはお友達かい、沢田綱吉」

突然ツナが歩いて来た方向から一人の男がやってきた。 やや長い
金髪にとてつもなく冷たい目をした男。

「ツナ君の知り合い？」

キョトンとした顔で京子が聞いてきた。

その瞬間ツナの超直感が何かを感じた。

「逃げて二人とも」

「ツナさん？」

「早く!!」

前を見ると男はいなかった。

「他人の心配してる場合か？」

後ろから声がした。

ツナが振り向くと強烈な一撃がツナを襲った。

ド
ド
ッ

標的7 沢田綱吉 VS ジェラート

突然の襲撃にツナ対応する術もなく塀に叩きつけられた。衝撃で塀が砕けた。

「ツナ君」

「ツナさん、な、なんですかこのデンジャラスな人は？」

二人はツナが襲われたところを見て動けなくなっていた。

「いちいち騒ぐな、めんどくせえから二人ともここで始末してやるよ」

ツナを叩きつけた二振りの剣で二人を襲おうとした瞬間

ガラッ

ビュオオオオオ

「ちっ」

塀のガレキが男めがけて飛んできた。

ポウツと額に炎を灯したツナの攻撃だった。

「やっぱあれくらいじゃやられねえか、さすがだな」

「その二人は関係ない、お前の狙いはオレだろ？掛かってこいよ」

「ツ、ツナ君？」

二人はツナの無事にホツとした。

余裕をかますツナだが男もまた余裕だった。

「じゃあ遠慮なく」

それと同時に男の刀に赤い死ぬ気の炎が灯った。

「な、なに？死ぬ気の炎だと」

この時代ではまだ発見されたばかりであり、それを知る者自体そんなにいないはずなのに。

「お前、一体？」

「そついや自己紹介がまだだったな、オレはフィルマーレファミリ
ー最高幹部『真6神官』の一人、ジェラートってんだ、お前のとこ
でいう『嵐の守護者』ってとこだな、よろしくなボンゴレ10代目、
お前の実力、見せてみな」

ツナに嵐の炎を纏った刀が襲い掛かってくる。

「・・・・・・・・・・」

ツナは刀を手で受け止めた、迫りくるもう一つの刀も受け止めた。
そしてそのまま反撃しようとするが・・・

「!?!」

(動かない)

ツナが全力を出してもジェラートどころか刀すら微動だにしない。

「この程度か」

ツナは刀を手放し、すかさずジェラートの懐に入り、強烈なパンチ
を放った。

いきなり刀を離されたジェラートは体勢を崩し、ツナの攻撃のお腹
に炸裂する。

「うぐっ、痛ってー」

しかし、ジエラートは不敵な笑みを浮かべた。

「そうでなくちゃおもしろくねえ、どんどん来い」

「ハア」

さらに大きい炎が灯った刀を振り回し、攻撃をしかけるジエラート。そのままでは確実に攻撃を受ける位置にいたが、ツナはそこを動かなかった。

「もらった」

ドカツ！

二振りの刀がツナを直撃し、大きな衝撃と煙りが立ち上がった。

キュアアアアア

謎の音と共に煙りと刀に纏った炎が消えた。

「なっ、炎が吸収された」

「零地点突破・改 白刃取り!!」

驚いてジェラートに隙が生まれた瞬間をツナは見逃さなかった。

「次はオレの番だ」

大炎を放つツナの反撃。

バキッ!

その攻撃をなんとか刀でガードしたジェラートだったが、パワーアップしたツナの拳は刀を払い追撃がジェラートを襲う。

バキッ!

「ぐああああああ」

ドゴオオオオオオン!!

ジェラートはコンクリートに勢いよくぶっ飛ばされた。

標的 8 真実

「ツナ君」

「ツナさんすごいです」

二人がツナに駆け寄ってきた。

「いやまだだ、来るな」

2人を避けると、ツナは構えをとった。

「いてて、今のは効いたぜ、それが噂に聞いていた死ぬ気の零地点突破・改か」

壁にたたき付けられたにもかかわらず、ジェラートは余裕で立ち上がった。

「お前の目的は何なんだ？」

一瞬沈黙が走ったが・・・

「いいぜ、あんたは十分だ、話してやるよ」

ジェラートは刀を収め、話した。

「あなた、フィルマーレファミリーの仲間になれよ」

「!？」

あまりに突然で言葉が出ない。

「実はオレ達がボンゴレや同盟ファミリー、ボンゴレに関わったマフィアを次々襲っていたのはウチのボスの案でな」

「なんのためにだ？」

「信じられないかもしれんがウチのボスは最近まで眠っていたんだよ……約1世紀という期間の間、ずっとな」

突然のことにツナは驚きを隠せない。しかし、今のジェラートの言葉に思い当たるふしがあった。

(1世紀?)

ツナはふと思った。昔リボンに出会った時に言われたことをのりとを。

『お前はれつきとしたボス候補なんだ、約1世紀のボンゴレの歴史を築いたのはお前の先祖、初代ボンゴレだ』

「まさか!？」

「その通り、ウチのボスは約1世紀前、9代前のボンゴレボス・ボンゴレ一世と戦ったんだよ、そして戦いの末ボンゴレに伝わる奥義・死ぬ気の零地点突破で凍らされて今まで封印されていたってわけだ」

それは約1世紀前、ボンゴレファミリーが創造されてから少し月日が経ったところの話である。

標的9 1世紀前の決闘

1世紀前のイタリアにて

それはボンゴレファミリー初代ボスがボンゴレを創造し、守護者や仲間を集め、徐々に巨大化していた頃……そしてボンゴレ一世が修業の末仲間の研究者に作らせた体のリミッターを解除し、潜在能力を目覚めさせる死ぬ気弾。

初代はいつでもその負担に耐えられるように修業し、死ぬ気の炎をボンゴレのものとした。

そしてボンゴレファミリーが正式に確立して間もない頃、マフィア間で噂になっていたフィルムレファミリーというマフィアが動き出したということだ。

さまざまなマフィアがフィルムレファミリーのやつらに襲われ、世界は混沌の渦に巻き込まれていた。

そこで立ち上がったのは初代ボンゴレファミリー達だった。

彼等は正面から正々堂々とぶつかっていった。

対決はほぼ互角。

抗争は三日三晩続き、最後まで立っていたのはボンゴレ一世とウィンディだけだった。

そして最後には自力で勝るボンゴレ？世が勝利した。

ボンゴレ一世は殺すことはせず、後に伝説として語り継がれるボンゴレの奥義・死ぬ気の零地点突破・初代エディションファーストで永遠の眠りにつかせた。

1世紀後の現代まで死ぬ気の炎はボンゴレファミリーの象徴とも呼ばれ、ボンゴレの血を継ぐ者以外には使用できないと伝えられていたため、当時は絶対にこの氷が溶けることはない^と誰もが確認していた。

しかし、1世紀後の未来、リングを通して死ぬ気の炎は「覚悟」さえあれば誰にでも扱えるものとなっていた。

ウィンディはそれによって氷が溶かされ復活に至った。

「これが真実だよ、ボンゴレ？世」デーチモ

「だから同盟やリースファミリイなどボンゴレと繋がりのあるものにも手を出していたということか」

ツナの瞳と拳が強くなる。

「ああ、だが最近ボンゴレに対してはどうでもよくなってるらしくてな、いきなり世界滅亡させるにはどうしたらいいとかわけのわからんことまで言い出してな、まあ心当たりがないわけじゃねえが」

その言葉にツナの瞳がいつそう鋭くなる。

「オレは……オレはお前らの仲間にはならない。オレは今の現状に満足している。認めてくれる仲間がいて……だからお前らのように簡単に人を殺すようなやつらなんかと」

ジェラートは馬鹿にしたように笑っている。しかしツナは真っ直ぐジェラートを見ている。京子とハルも真剣にツナを見ている。

「断つたら殺していいって言われてからな」

そう言うとジェラートは再び嵐の炎を纏わせ襲い掛かろうとしたてきた。

しかしジェラートはツナに向かわず、京子とハルに襲い掛かった。突然の標的変更にツナは遅れをとった。

「やめろー」

ツナが超高速でジェラートを追う。しかし・・・

(ダメだ、間に合わない)

ジェラートの刀が京子とハルを切り裂く。

標的10 沢田綱吉・クローム調護 VS ジェラート

標的を変えたジェラートは京子とハルに襲い掛かった。

「残念だったな、間に合わないぜ」

ズバツ!!!

何の躊躇もなく、二人は勢いよく切り裂かれた。

しかし、斬ったジェラートの表情から笑みは消えた。

(手応えが・・・ねえ)

「ん？」

斬り裂かれた二人の体が霧状になっていく。

「これは霧の幻術!？」

ツナがそう言った矢先、再びその霧が人間の形になってゆく。

「この二人には手出しさせない」

「ク、クローム」

姿を現したのはツナの霧の守護者・クローム髑髏だった。

「へえ、あんたがボンゴレの霧の守護者かい？おもしれえ」

再びジェラートは刀に炎を灯し、クロームに襲い掛かる。

ズバツ！！

「!？」

(また幻覚か)

「私はここ」

「私はここ」

「私はここ」

「私はここ」

「私は……」

いろいろな所からクロームの姿が現れた。

ボゴッ

ジェラートの足元の地面に亀裂が入る。

ドオオオオオオオオオン！！！！

そこからは巨大な火柱が現れた。

「霧の幻覚を見破れないあなたに、この攻撃は防げない」

「くくく、確かにまだ完全に幻覚は見破れねえが攻撃自体を防ぐことはできる」

ジェラートは火柱の中で嵐の炎のバリアを張っていた。

「あんとオレの炎、どっちがもつかな？」

余裕のジェラートに対し、クロームは・・・

「私はもつ必要がないの、時間稼ぎだから」

「ゲージシンメトリー、発射スタンバイ」

そう、クロームはツナにX BURNERを放させるべく時間稼ぎをしていた。

「くっ、やられた」

「X BURNER!!」

空中から放たれたX BURNERは火柱ごと嵐のバリアを貫いた。

「ぐああああああ」

(や、やったか)

空中に投げ出されたジェラートの体が霧状になった。

「なに!?!」

「霧の幻覚を使えるのがお前らだけじゃねえってこつた、なあケルベロス」

ジェラートがそう言うのと辺りに霧が発生し、その中からフードを被った男が現れた。

「こいつの名はケルベロス、フィルマーレファミリー『6神官』の一人さ」

ツナとクロームにはその顔に覚えがあった。

「ト、トリカブト!?!」

ツナはその名をとっさに口にした。

「トリカブト? 誰だそりゃ、お前の知り合いかケルベロス」

「ええ、トリカブトは私の兄、なぜそなた達が知っている？」

ツナとクロームは黙ったままだった。

「まあよからう、ジェラート様、抹殺してよいので？」

「ああ、行くか」

ズガンッ！！！！

ジェラートとケルベロスの前に銃弾が叩き込まれた。

「そこまでだ」

現れたのは漆黒の髪的美少女と鳶色の瞳と金髪を兼ね備えた青年、
レイアとディーノだった。

標的11 真実？

「ディーノさん、レイアさん」

2人のやってきた方向をにらむジェラート。

「リースファミリーの姫にキャバツローネの跳ね馬か」

「あんた達がフィルマーレファミリーなの？」

「ああ、そうだぜリースの姫、オレはフィルマーレファミリー最高幹部『真6神官』のジェラート、こいつは『6神官』のケルベロスだ」

(真?)

ディーノとツナは今の言葉に疑念を抱いていた。しかし、そんなことはどうでもいいのか、レイアは無視して話しを続ける。

「あんた達がうちの幹部を、いつたいなんでなの？」

「そのことか、詳しくはボンゴレ？世に聞いてくれ、それにいくらオレ達でもこの4人と相手をするにはキツイ」

そう言うとジェラートとケルベロスを霧が包み込んでいく。

「じゃあな」

2人は霧の中に姿を消した。

「去ったか、ツナ、京子、ハル、クローム大丈夫か？」

ディーノがツナ達に駆け寄った。

「私達は大丈夫です、でもツナ君とクロームちゃんが」

京子が2人を心配そうに言った。

「オレなら大丈夫だよ」

「私も」

その言葉にみなホツとした。

「沢田君、やつらのこと詳しく教えて」

レイアは躊躇なく聞いてきた。

ツナはそれに対し黙ったまま頷く。

「……………てわけらしいんだよ」

「なるほどね、それで無関係なリースファミリーも狙われたってわけね」

「まさか1世紀の間も眠っていたとはな」

少し信じられないという表情のレイアとディーノだったが、理解はした。

「レイアさん、前に空港で会った男を覚えてる？」

「ええ、確かウィンディだったわね」

「あいつがおそらくフィルムレファミリーのボスだよ」

「「!!」「」」

「わかるのか、ツナ」

「はい、奴は初代の零地点突破で眠らされていた、前に見た顔の傷は零地点突破を喰らった傷だったんだ、XANXUSと同じ傷だったから」

それを聞いてディーノは納得した。

「そうか、XANXUSと同じ傷なら零地点突破で眠らされた証拠だからな」

ツナは顔を京子とハルに向けて言った。

「巻き込んでごめんね、それとこのことは誰にも言わないでほしいんだ」

京子とハルは顔を見合わせ、黙って頷いた。

「とりあえず帰りましょう」

レイアの言葉で皆はそれぞれの家に帰った。

標的12 新たなる敵

「交渉決裂ですね」

「!・・・ディアナか」

ジェラートとケルベロスはビルの屋上にいた。その後ろにいたのは長い金髪で空色の瞳をもつかわいらしい少女がいた。

「あいつら、けっこうやるぜ」

ジェラートはうれしそうに言った話した。

「わかっております、ジェラート様と互角に戦ったのですから」

その言葉にジェラートの表情が変わった。

「ちえっ、相変わらずお前はいてーとこついてくるよな、だがわかってるよな、あれがオレの本気じゃねえってことをよ」

ディアナはひざまずいたまま静かに頷く。

「あいつは他のマフィア共に持ちえない『力』を持っている」

「ええ、彼さえ仲間になってくれたらこの計画に役に立つのですが」

ジェラートは楽しくなってきた、まだ見えないツナの底力に。

「さあ、戦いの火蓋は切って落とされたぜ、どうする沢田綱吉」

ツナは学校で獄寺と山本に昨日の出来事を話した。

「そうだったんスカ、しかし手強いですね、フィルマーレファミリの奴らは」

「うん、それに死ぬ気の炎や常人離れた力も気になるし」

「それでリボーンに相談したら今は相手の出方を待つしかないって、情報もないままで動くのは危険だからって」

「ねえ2人共、二人はオレのこと、その・・・どう思ってる？」

突然の質問に2人は顔を見合わせた。しかし、困ることなくは笑った。

「ツナは・・・オレの大切な親友だぜ」

「オレもっス、10代目は自分の命の恩人ですし、大切なお方です」

「ありがとう2人共」

ツナは2人の言葉がうれしくてたまらなかった。
照れ臭くて少し下を向いてしまった。

(やっぱりオレのいるべき場所はここだ、こんなにいい仲間がいるんだ、奴らの思い通りにさせない)

ツナは心の中で固く決心した。

そして遠方からそれを見ている謎の影――

「あれが噂のボンゴレ？^{デーチモ}世、あんなカワイイ子がマフィアの大將ねえ」

じつと校舎の中を見つめている長い青髪の美女がいた。
その横には青髪に対し、赤髪の青年が立っていた。

「子供だと思つて油断しないことだ、2人がかりだったとはいえあのジェラートを退かせたのだからな」

赤髪の男の鋭い声はその女性をも圧倒する。

「まったくディアナといいお前らといい、オレが負け犬みてえじゃね

えか」

2人の後ろに立っていたのはジェラート。少しご機嫌ナナめだった。

「わかってるわ、そうカリカリしないの」

美女はそんなジェラートに笑みを浮かべた。

「ボンゴレ？世、私の物にしてあげるわ」

標的13 襲撃

そして学校が終わり、ツナ、獄寺、山本、京子、ハルで下校していたところ、校門にオロオロしている少女を発見した。

「ク、クローム？」

それはツナの霧の守護者・クローム髑髏だった。

「クローム、どうしたの？」

「ボス」

クロームはツナ達を見ないなや、駆け寄ってきた。

「実はボスがまた昨日の人達に狙われてるかもって予感がして」

「そ、それでわざわざ来てくれたの？」

クロームはコクツと頷いた。

ツナは内心嬉しかった、たとえ骸の一味でも自分を心配してくれたことに。

「あつ、クロームちゃん、怪我大丈夫？」

今度は京子がクロームに駆け寄った。

「あれからずっと心配したんですよ」

ハルもまた駆け寄った。

「!!!」

その時ツナ、獄寺、山本、クロームは殺気に気づいた。
彼等の後ろにはフードをかぶった数十人ほどの男がいた。

「んだこいつらは」

「フィルマーレの奴らか」

そしてその中から1人フードを被ってない男が現れた。
白髪で顔はまるで悪魔のような少年だった。

「貴方がボンゴレ？世デイチモですね、私はリベル、お見知りおきを、そしてフィルマーレファミリー最高幹部・真6神官の静香様の命により、貴方を抹殺させていただきます」

「なあ——————」

突然の抹殺宣言にツナは叫ぶ。

とっさに死ぬ気丸を取り出したが、周りの状態を見て手を止めた。

(ど、どうする、こんなところで戦ったら皆や京子ちゃんやハルをも巻き込みかねない)

瓜をアニマルリングから出そうとした獄寺だったがツナに止められた。

「どうしたのですか？かかってこないのですか？」

リベルはツナ達を挑発してきた。

「来ないのならばこちらから」

リベルが匣を取り出そうとした瞬間――

ドッカン

ドコッ

バキッ

突然の破壊音が響いた。

リベルがその音の方向を向いた時、フードの男達が全滅していた。

「君達、ここで何してるの？」

血まみれのトンファーを振り回し、ボンゴレ最強の守護者・雲雀恭

弥現る。

低く、不機嫌きわまりない声で現れた。

「ひ、雲雀さん」

「沢田綱吉、これらは一体何なんだい？」

ギロリとこちらを睨む。

（怒ってる、めっちゃくちゃ怒ってる）

「えっと、あの」

ツナが言い訳を考えていると

「ちゃおっす」

ツナの肩にいつのまにかちょこんとリボーンが座っていた。

「リボーン、どうして」

「話は後だ雲雀、そいつらは並盛を襲おうとしてる奴らなんだ」

雲雀の眉がピクツと反応する。

「ふうん、それじゃあ」

雲雀の瞳がいつそう鋭くなり、

「咬み殺さないかね」

「ツナ、ここは雲雀にまかせてとっとと行くぞ」

ツナ達はその場を雲雀に任せて去った。

「さあ、始めようか」

雲雀恭弥VSリベル、戦闘開始！

標的14 雲雀恭弥 VS リベル

ボンゴレとフィルマーレ、両雄相打つ。

「なるほど、貴方がボンゴレ最強の雲の守護者・雲雀恭弥ですか、私はリベルと申しま」君が誰かだなんて関係ないよ、並盛を汚す奴は誰であろうと・・・咬み殺す」

リベルの言葉を遮り、雲雀は紫色の炎をトンファーに纏わせ、リベルに襲い掛かった。

「くくく、威勢がよろしいですね、ではこちらも」

リベルは雷の炎をリングに灯し、匣を開匣した。それから長刀が出現した。

ブウンッ!!

雲雀の一撃が空を切る。

「光速の雷いかすぢ!!」

リベルはなんと目にも見えない光の速さで移動している。

「どうですか雲雀恭弥、まったく見えずに手も足もでないでしょう」

雲雀はトンファーを下ろし、目をつぶった。

そして雲雀の後ろにまわったりリベルが、長刀を振りかざす。

バキッ！！

当たった音は雲雀のトンファーがリベルを打った音だった。

「ぐっ、なぜだ、光の速さをとらえたともいいうのか」

驚いたりリベルは一瞬焦ったが、すぐに冷静になった。

(今のはマグレだ、次はない)

「光速の雷！！」

再び光速で移動し始める。

今度の雲雀は先程の体勢ではなく、トンファーを構えた。

そして雲雀はそのまま1回転して、トンファーを放った。

バキッッ！！

またもやりベルを打ち抜いた。

「がはっ、なぜだ、なぜだああ！！」

雲の炎が灯ったトンファーと雷の炎が灯った長刀が交戦する。

キンツ

ガキン

バキツ

リベルは冷静をすでに失くしていた。

（なせだ、雷の炎の特徴は『硬化』、雲の炎の特徴はたかが『増殖』、それなのになぜこの私が押されているんだ）

そしてリベルの手から長刀が離れる。

「くっ」

リベルはとっさにリングの炎で電磁バリアを張った。

バキツ！！

雲雀の攻撃はそれを貫いた。
もはやリベルに成す術はない。

「覚悟はいいかい？」

その言葉の後、雲雀は超連打トンファー攻撃を放った。
リベルはその攻撃をまともに喰らい、そのまま気を失った。

「つまらない」

そう言っつとどめをさそうとした瞬間

「待ちな」

「!？」

キンッ

突如謎の男が雲雀を襲った。

「君、誰？」

「オレはフィルマーレファミリーのジェラートってもんだ」

そう、それはフィルマーレファミリー最高幹部「真6神官」のジェラートだった。

ジェラートはふうつとため息をついた。

「あーあ、オレの部下をこーんなにぐちゃぐちゃにしてくれちゃって」

「じゃあ次は君が相手をしてくれるの？」

「そう慌てんなよ、てめーとはまた遊んでやるから」

そう言ってジェラートはリベルを連れて去っていった。

標的15 転校生再び

「雲雀さん、大丈夫かな？」

戦いの場から離れたツナ達は1人残した雲雀を心配していた。

「大丈夫だ、あいつはただでさえ強ーんだ、心配いらねえぞ」

まったく心配するそぶりを見せないリボン。

「ていうかなんで雲雀さんだけ置いてきたんだよ」

「別にお前らがいたところでどうにもならなかっただろ、あいつのことだから手を出すとか連帯責任で咬み殺すとか言ってきたりがないだろ」

「そりゃそうだろうけど」

たとえ最強であろうとツナにとっては心配だった。

(早くフィルム・レの連中をなんとかしないとな)

翌日

「今日は先日が続いてまた転校生を紹介する」

「またかよ、なんでこんな頻繁に転校生がいるんだよ」

生徒達がざわめく。

「ディアナです、よろしくお願いします」

「おっ、またかわいい娘じゃん」

ほとんどの男子生徒はレイアが来た時と同じく鼻の下が伸びきっていた。

ツナ、獄寺、山本を除いては・・・

「10代目、あの女の手にあるのは・・・」

「うん、まちがないよ、あのリングは」

「昨日襲ってきた奴のリングと同じだな」

3人は転校生・ディアナをじっと見ていた。そして偶然にもレイアは学校に来ていなかった。

それからというもの、放課や授業中3人は常にディアナを監視していた。フィルマーレファミリーというのは確実だろうが、生徒達に話しても「あんなかわいい娘がマフィアなわけないじゃん」とか言われるのが決まっているからだ。それにそんなことを言っただけで本性を現して生徒達を巻き込むわけにはいかない。

すると突然ディアナが席を立ち、教室を出て行った。

3人はすぐさま彼女を追った。そして着いたのは屋上、だが・・・

「あ、あれ？いない」

ツナ達が辺りを見回すが、ディアナの姿がない。

「ちくしょー、どこ行きやがった、出てきやがれ」

不満爆発で獄寺が叫ぶ。

「も、もしかして何かの罫かもしんねえぞ」

山本の言葉通りでないことを願った。

3人は急いで教室へと戻った。

教室の扉を開けると、そこにはディアナがいた。すると獄寺が

「てんめー、どういっつもりだ」

「いったい何のこと？」

「とぼけんな、てめーさつき屋上に行ったはずだろ？」

突然怒鳴られてディアナは泣きそうになった。

しかし、それに答えたのは京子だった。

「いったいどうしたの？ディアナさんなら教室出てすぐに戻ってきたよ」

そんなはずは・・・しかし教室にいた全生徒が目撃を証言している。確かにディアナは屋上へ向かったはずだった。3人共見ていたはずなのに。

「そつだぞ、ディアナちゃんはすぐに戻ってきたぞ」
「変な言いがかりつけんなよ」

それに対し3人は何も言い返せなかった。

標的16 デイアナ

毎日3人はデイアナの監視を続けていた。だがこれっぽっちも怪しいところは見せていない。

「あの人ホントにフィルマーレファミリーの人間なのかな？」

あまりにそれらしい行動を見せないために、ツナが言い出した。

「何言ってるんですか10代目、あいつの手につけているのは間違いないくフィルマーレファミリーの奴らですよ」

「う、うん」

翌日

ツナが一人で登校中の時。

「おはよう、沢田君」

突然声をかけられた。誰かはわからなかったがとりあえず挨拶を返した。

「おはよ……デイ、デイアナ!？」

驚いたツナはとっさに距離を取ってしまった。

「ねえ、どうして転校してから私を監視したり、今のように避けたりするの？」

ディアナは悲しそうに聞いてきた。

「えっ？だ、だって君フィルム・・・いやなんでもないんだ」

ツナは万が一今までののが演技だったら、ということを考えて探りを入れてみた。

「じ、実はオレが小さい頃誘拐されそうになったんだ。その人が君に似ていたからつい体が反応しちゃって、あははは」

とっさに言い出したのはあまりにもバレやすそうな嘘だった。

「そうなんだ」

しかしディアナは疑いもせずにシユンとなる。

「じ、ごめんね気を悪くさせちゃって」

「ううん大丈夫、じゃあこれからもよろしくね、綱吉君」

ディアナはニッコリして言った。

突然名前で呼ばれてツナの顔は真っ赤になっていた。そしてふと思つた。この娘は本当にマフィアなのだろうか、演技をしているようには見えなかった。それに超直感も彼女を悪い認識としてとらえなかった。

結局そのまま2人で登校した。

「10代目、もうあいつの監視はいいんですか？」

「う、うんもういいんだ、たぶん彼女はウソをついてないって思うんだ」

確信はなかった。しかし、彼女からは悪の波動というものをまったく感じなかった。

「それに今朝1人で登校してる時ディアナに会ったんだ、でも襲つてこなかった、おかしいと思わない？」

「た、確かに、10代目を狙っているなら二人つきりになった時が唯一のチャンスのはずですしね」

少しの沈黙の後、獄寺が口を開いた。

「でもオレは、もう少し様子を見てみます」

そう言っつてツナから離れた。

昼休み、ツナと山本が屋上で休んでいる時

ガシャン!!!!

「キヤアアアア」

突然のガラスの破壊音と聞き覚えのある悲鳴。

「き、京子ちゃんの声だ」

「行こうぜツナ」

二人はすぐに教室へ向かった。

そして着いたとき獄寺が謎の男と対峙していた。

「なんだてめーは」

獄寺が叫んでいた。

そしてツナ、その男を見た瞬間、あの時の記憶がよみがえった。

「ジエ、ジェラート」

ちょうどそこにレイアも来た。

「あんたしょうこりもなく」

「ん？おお、ボンゴレ？世、レイア嬢じゃねーか、だが今はてめーらの相手はしてらんねえ、っーかボンゴレも始末せず、何やってんだ・・・ディアナ」

標的17 ディアナの正体

「デイ・・・ディアナ」

ジェラートが彼女の名前を呼んだとき、ツナの絶望感は頂点に達していた。

「てめー、やっぱりフィルマーレファミリーの奴じゃねえか」

獄寺はディアナをにらんだ。

しかし、ディアナは頭を横にふる。

「し、知らない、私こんな人知らない」

ディアナは必死で否定した。

「ちっ、そっちのディアナか」

「で、でも二人きりになってもツナを襲わなかったって言うじゃねえか」

山本にもとっさにディアナをフォローした。

「いいだろう、証明してやるよ」

そう言ってジェラートは大剣を振りかざし、ディアナの体を切り刻んだ。

「ディアナ」

ディアナの体から血が飛び散る。

「うっ、痛い」

ディアナが苦しそうにつぶやく。

ツナや京子がディアナに寄り添おうとした時

コオオオオオオ バシユッ

ディアナの体からオーラみたいなものが発散されたと思いきや、周りにいるジェラート以外の人間が動けなくなっていた。

「まったく、雨属性が主じゃねえのに相変わらず強力だな、お前の『静止の波動』、また表のディアナになってたぜ」

「申し訳ありません」

動けない状態で口を開いたのはツナだった。

「表ってどういうことだよ、さっきまでのディアナは」

「ああそうだった、知らねえんだっとな、説明してやるよ、さっきまでのディアナはお嬢様として生活をしていた、だがある時目の前で両親を殺された時、ショックで裏の人格が目覚めたってわけよ」

「だ、けどそのリングは父親から譲り受けたものだって、それと同じリングをつけたやつが昨日襲ってきた」

「ああそうだ、こいつの一族はそのリングを代々継承している、しかしこのリングがマフィアに伝わる死ぬ気の炎を灯すことのできるリングだったとしたら」

ジェラートの口元が笑い出した。

「ま、まさか」

「そうだ、こいつと同じリングは7つある、そのうちの1つがこい

つの一族が持っていた、それだけだ」

その話を聞いたツナの脳裏には、最悪のシナリオが浮かんできた。

「まさか、そのリングを奪うために」

「察しの通り、オレ達フィルムメーカーファミリーがこいつの両親を殺した、ちょうどその時このディアナと会ったため、こいつをウチの幹部として受け入れたんだよ」

「そんなことのために・・・ディアナの両親を」

ツナの怒りは頂点に達していた。リング争奪戦の9代目の時を遙かに上回る怒りで・・・

「もうそれくらいいいでしょうジェラート様、ボンゴレを殺します」

先程とはまったくの別人ディアナは冷たく言い放ち、指の先にパワーを集める。

キュアアアアアア

ツナはもちろん獄寺や山本、レイアでさえも動くことはできない。

「死ね、ボンゴレ」

「ツナ」 「10代目」 「沢田君」

ドシユッ

「許さない……お前だけは」

ドオオオオオン!!!!!!

炎の塊はツナに直撃したかに見えた……しかし……

「なっ」

「ばかな、これは」

炎が消し飛んだ。ツナの体からは先程ディアナが発動したと思われるものを纏って……

標的18 フィルマーレの計画

「まさか、私の雲のレーザーを消し飛ばすなんて」

「こ、これは『炎破の波動』、なぜこの力を」

焦るディアナとジェラートの前にはオーラを纏ったツナが立ちはだかる。

「お前ら、許せねえ」

カツ！

「ぐっ、こいつ『畏怖の波動』も使えるのか」

ツナの目が開かないなや、突然の威圧感がディアナとジェラートを襲った。

「さすがはボンゴレのボスといったところか沢田綱吉、今までもにお前の相手をしたらいくらオレでも無傷というわけにはいかねえな、だが我々の計画は順調だ」

そう言い残すとジェラートとディアナは姿を消した。

そしてまもなくしてツナが倒れた。

(まさか炎破と畏怖の波動を使うとはな、ウィンディが仲間にしよ
うとするわけだぜ)

ジェラートの心は揺れ動いていた。

「う、うん」

「起きたかツナ」

ツナの目の前にいたのはリボンだった。

「リ、リボン、ここは？」

ツナは辺りをキョロキョロ見回す。

「お前の部屋だ、獄寺と山本、京子とレイアが送ってくれたんだぞ」

「そっか、オレあの時・・・」

ツナの脳裏には先程のことがよぎる。

「リボーン、オレ・・・」

「わかってるぞ、全部聞いた、そしてジェラートが言った『計画』の意味がわかったぞ」

リボーンはそう言ってツナにテレビを見せた。すべての局があるニュースで埋め尽くされていた。

世界のあちこちで謎の襲撃が起こっていた。ニュースを見たツナは愕然とした。

「おそらくフィルムマールファミリーの奴らだぞ、お前達はディアナだけを見ていただろ、奴らはそれを利用したんだ、奴らのリングと同じものつけたものが現れたり、ましてや転校生としてクラスメイトになっちまったら監視しないわけにはいかねえからな」

ボンゴレファミリーは目先の小さな罠にかけられてしまったのだった。

「そ、そんな」

ツナの顔が青ざめる。

「早く手を打たねえとヤベーぞ」

フランス、スペイン、ドイツ、アメリカ、イギリス、様々な国々を襲っているフィルマーレファミリー、彼らは死ぬ気の炎を使っているため軍隊を派遣したり、強力な武器を使用しても無駄である。

そして・・・「もうひとつのボンゴレ」にもフィルマーレの魔の手が迫る。

標的19 ヴァリアーの敗北

フィルマーレの魔の手はついにイタリアまで伸びていた。それに対抗すべく、イタリアのボンゴレ本部はリング争奪戦で謹慎処分になっていた特殊暗殺部隊・ヴァリアーを筆頭にフィルマーレと対決をしていた。

しかし、戦場に立っているのはヴァリアーではない……

「くっ、なんだこいつは……ベル、レヴィ、ルツスーリア、マーマン、生きてやがんのかあ」

白銀の長髪剣士・スクアーロが叫ぶ。

「生きてるかはわかんねえが、重傷を負ってんのは確かだな」

黒髪の少年がスクアーロを見下ろす。

（あれは、死ぬ気の炎……なのか？だが沢田綱吉やXANXUSが使っていた炎とは少し違う、それに死ぬ気の炎を使えるのはボンゴレだけなんじゃ）

本来なら伝えられるはずの情報だが、謹慎中であるヴァリアーには

リングの炎のことは知らされていなかった。

「てめえ、いったい何者だ？」

「オレはフィルマーレファミリー幹部『6神官』の1人、アトラス」

「くそがあ」

スクアードは力を振り絞って立ち上がった。そしてルツスーリアヤベル、レヴィ、マーモンも次いで立ち上がる。

「よくもこんなにしてくれたわね」

「オレ王子だし、負けるわけにはいかないんだよね」

「ボスの信頼を・・・失うわけにはいかん」

「アルコバレーノの力、見せてあげるよ、バイパーミラージュ」

マーモンがそう唱えると幻覚により辺りが真っ暗闇になった。暗殺を生業としているヴァリアーにとって暗闇は平気だった。

「いくぞてめーら、続けえ、鮫ザンナ・ディ・スクアールの牙！！」

「レヴィボルタ！！」

「メタル・ニー・ラッシュュ！！」

「ロイヤルイクスプロージョン！！」

ヴァリアーの一斉の攻撃がアトラスを襲う。

しかしアトラスは焦ることもなく一呼吸おき、刀に青色の炎を灯す。

「無駄だよ、幻覚空間ごと破壊してやる、まとめて喰らえ」

アトラスが刀を構えた。そしてそれを一気に振りかざした。

「無雨槍破むうしゅうは！！」

アトラスの刀から雨の炎を帯びた無数の槍が飛んできた。

ズザザザザザ！！！！

無数の槍がヴァリアー全員に刺さり、幻覚空間を突き破った。

「ぐっ、だがこれくらいでやられるとでも……っ」

(な、なんだ……意識が)

スクアーロの目がかすみだした。

「雨属性の炎の特徴は『鎮静』、槍が刺されれば意識がもろろつとして……最後には……」

スクアーロをはじめ、全員が意識を失い、倒れた。

「ちえっ、やっぱりボンゴレが誇る特殊暗殺部隊・ヴァリアーといえど、炎が使えなければ雑魚当然か」

アトラスはがっかりしながら強大な雨の炎を灯し、トドメをさそうとする。

「じゃあね」

スクアーロ達に刀を振りかざす。

ドオオオオオオン!!!!

「な、なんだ？」

突然強力な炎がアトラスを襲う。
刀に帯びていた炎が飛んだ。

「オレ達のボンゴレをこんなにしやがったのはてめえか」

壊れた建物から声がした。

ゾクッ！！

アトラスは今の声に一瞬気圧された。

「なんだお前は、名を名乗れよ」

アトラスは少しイラつきを見せだした。

「てめえみたいなカスに名乗る意味はねえ」

鋭き眼光、畏怖の波動を纏った者が、建物から現れる。

「かつ消してやる、ドカスが」

ヴァリアーのボス・XANXUS登場。

標的20 XANXUS VS アトラス

ついに姿を現したXANXUS。その鋭き視線はとアトラスに。

「あなたがボンゴレ特殊暗殺部隊・ヴァリアーのボス、XANXUSか」

「……………」

XANXUSは何もしゃべらず、アトラスは話を続ける。

「さっきの炎、そうか、あんたリングなしでも死ぬ気の炎が使えたんだっけ？まあそれならそれで退屈せずに見ようだけだな」

アトラスは言い終わると再び刀に雨の炎を灯し、XANXUSに襲い掛かった。

「喰らえ、ソウルフレイム・蒼龍破そうりゅうは——！！」

ドゴオオオオオオオオオン！！！！

龍の形をした雨の炎の塊がXANXUSに直撃する。

「ちっ、あっけねえや」

アトラスは舌打ちをして、つまらなそうにその場を去ろうとし、向きを変えた。

しかし目の前には

「何があっけないって？」

やられたはずのXANXUSがアトラスの至近距離にいた。

「なっ、そんなばか・・・ぐはっ」

アトラスは避ける術もなくXANXUSの銃で殴られた。

「やろっ」

アトラスが刀をXANXUSに向かって振りかざす。しかしXANXUSはそれをかわすとすぐさま反撃に移った。アトラスの腹に蹴りを入れ、追撃を放った。

「怒りの暴発スコッピオ・ディーラ!!!」

「ぬあああ」

直撃を喰らったアトラスはそのまま地面に落ちた。

「かつ消える、炎の蕾（ボツチヨ・ロ・デイ・フィアンマ）！！」

ズザザザザザザザ！！！！

アトラスが落ちた方向から無数の槍が飛んできた。それはXANXUSの炎を打ち消した。攻撃を終えたアトラスは空中へ戻ったがXANXUSの姿は見えなかった。

「ちっ、どこ行きやがった、素早いな奴め、だが何本かは喰らったはずだ」

「ハア、ハア、くそが・・・」

とっさにXANXUSは建物の物陰に隠れてた。

「出てこないならば、ここら一带を吹っ飛ばすぞ」

アトラスが叫んだ。

(ぐ、意識がもつろつとしてきやがった)

いくらXANXUSといえど、鎮静の槍を喰らっては対処しようがなかった。

(気に入らねえが『あれ』でいくか)

アトラスはパワー全開で雨の炎を灯した、この一発ですべてを破壊するつもりで。

「いくぜ、んっ?」

建物からXANXUSが現れた。

「出てきやがったな、いくぞXANXUS、喰らえ最大最高のソウルフレーム・蒼龍破—————」

「後悔すんなよ、決別の^{コルボ・ダッディオ}一撃—————!!」

しかし結果は端から見ればアトラスの圧勝だった。炎の大きさが違いすぎた。

炎と炎が激突する。

「死ねええええええええええXANXUS」

バシューウウウウウウウウウ

!!!!

XANXUSの炎がアトラスの炎を突き破り、炎はそのままに向かう。

「な、なに」

「『死ぬ気の一点集中』、沢田綱吉の技で気に食わなかったが、この際しょうがねえ、かつ消えろ」

「ぐあああああああああ」

アトラスはまともに炎を喰らった。そして倒れたまま動かない。

だがXANXUSも先程の『無雨槍破』のせいで膝をつき、苦しそ

うだった。

「くっ、今とどめを刺してやる」

ガッ！

XANXUSの手から銃が落ちた。XANXUSはその気配の方向を見る。

「……なんだてめえは？」

足音がXANXUSに近づいてくる。

「貴様がXANXUSか、ボンゴレ？世にそっくりだな」

フィルマーレのボス・ウィンディ現る。

標的21 XANXUS VS ウィンディ

フィルマーレのボス・ウィンディ現る。

「なんだてめえは、かつ消されたいか、ドカスが」

ウィンディはニヤツとして静かに言った。

「やれるものなら・・・やってみな」

！！！！
ゾクッ！！！！

XANXUSはその目を見た途端、動けなくなった。

「貴様も『畏怖』と『静止』の波動を使えるようだが、私を超えない限り波動は打ち破れない」

「波動・・・だと、なんのことだ？」

体は動かないが、今にも襲い掛かってきそうな雰囲気だった。だがウィンディはそれを素通りし、笑みを浮かべた。

「まあいいだろう、この私と決着をつけたいのなら日本に向かうがいい、もちろん貴様だけでなく必要な仲間も連れてな、くわしいことは全世界に向けてテレビで放送してやる」

「ふざけんなカスが」

XANXUSが地面を蹴った。

「今すぐかつ消してやる!!!」

XANXUSがウィンディに向かう。

「くっ」

ドガッ!!

不意をつかれたウィンディだったが攻撃を受け流し、XANXUS地面に倒した。

(こいつ、私の波動から抜け出した！？)

ウィンディはXANXUSにトドメを刺すかと思いきや、目線をアトラスに向けた。

「アトラス、リングを持たないものに負けるとはな、ソウルフレイムもXANXUSごときの炎に打ち消されるしまつ、貴様に真のソウルフレイムを拝ませてやるう」

ウィンディは気を失ったままのアトラスに向かってしゃべり続けた。

「死ねアトラス、ソウルフレイム・茜龍破せんりゅうは!!!」

巨大なオレンジ色の龍の形をした炎がアトラスを襲い、灰にした。XANXUSはそれをまのわたりにした後、そのまま気を失って倒れた。

数時間後XANXUSは目を覚ました。そこには灰になったアトラスと焼け野原しか残っていなかった。

「ふざけやがって、どちくしょうがあ、必ず・必ず倒す」

その後XANXUSはスクアーロ達を連れ、日本に向かった。

日本のツナ達にディーノからヴァリアーがフィルムマールに敗れたことを聞いた。

「なありポーン、あのヴァリアーですら勝てなかったんだ、オレが勝てるわけないじゃんか」

「お前はそのヴァリアーに正面からぶつかって勝ったじゃねえか、それに今はリングを使いこなせるんだ、心配すんな」

リポーンはそう言ったが、ツナ達は不安でしよつがなかった。

「それにお楽しみもあるから大丈夫だ」

「なんだよお楽しみって？」

「秘密だ」

ツナはダメもとで多少期待をしてみたのだった。

標的22 この世の運命を賭けて

ヴァリアーがいるボンゴレ本部・イタリア支部が襲われてからというもの、フィルマーレファミリーの襲撃が突如止んだ。そして、それから3日後……

「やあ世界の諸君」

「10代目見てください、奴です」

「う〱お〱お〱お〱おい、やつがウィンディって奴かあ」

突然の大声がした。

「んな、この人達って……ヴァリアー」

「おお、ルツスーリアではないか、久しぶりだな」

「あら、相変わらずいい肉体してるわね」

「よお、スクアーロじゃねえか」

「久しぶりじゃねえかあ、元気してたか？」

「しししっ、エース君に爆弾少年じゃん」

「ナイフ野郎」

「ワオ、久しぶりだね天才君」

「……………」

了平とルツスーリア、山本とスクアーロはなぜか意気投合、しかし、レヴィ、獄寺、雲雀は戦闘オーラバンバン。そして沢田綱吉とXANXUSは……………」

「XANXUS」

「……………」

二人は特に言葉も交わさなかった。

「私はフィルムマレファミリーのボス・ウィンディというものだ。最近まで起こっていた世界各国の襲撃は我々フィルムマレファミリーの仕業だ、しかしあまりの無力さに呆れはてている、そこで我々フィルムマレファミリーとの真剣勝負を買うものはいないか？」

「いつがウィンディに間違いないのかあ、XANXUS」

XANXUSはスクアーロの質問に目で答えた。

「もしこの世界の運命を賭けた戦いに挑むのなら、沢田綱吉率いるボンゴレファミリーと共に日本にある並盛中学というところに2週間後の今日13時に集まっていたきたい」

その言葉に雲雀の眉が反応する。

「な、なんで並中なのー？」

ツナがそつと振り向くと怒りオーラに満ちた雲雀の姿が・・・

(ひいひいひい、やっぱり怒ってるー)

ツナの質問に答えるかのごとくウィンディが続ける。

「なぜ並盛中学かという対決方法が10代目ボンゴレファミリーが未来で行った『チョイス』で戦うからだ」

「な、なんでこいつがチョイスのことを知ってたんだ？」

「こいつ、一体何者だ？」

山本とリボーンが言った。

「なんだあ、そのチョイスってのは」

「『選ぶ』ってことだろ、しししっ」

「んなことはわかってんだあ、内容のことを聞いてんだあああああ
ああ」

まるで兄弟のように喧嘩をするスクアードとベルだった。

「なぜ私がチョイスを知っているかは後に話そう、あと戦いには参加条件がある。それは死ぬ気を使えるもののみ参加可能だ、以上」

ウィンディはテレビから消えた。

ツナ達には沈黙が続く。

「とにかく、修行するしかないわね」

「オレ達もそう思っぜ」

扉の前にいたのはディーノとレイアだった。

標的23 〱メンバー集結・修行編〱

新たなる戦い〱序章編〱は〱メンバー集結・修行編〱に続く。

ツナ達ボンゴレファミリーの前に現れたのはこの時代に発見されたばかりのリングからの死ぬ気の炎とこの時代にはまだ作製中であるはずの匣兵器を使ってくるフィルマーレファミリー。

未来で戦ってきたツナ達の実力を超えるフィルマーレ最高幹部『真6神官』、彼らの部下でヴァリアーを蹴散らし、XANXUSをも苦しめる實力を持つ『6神官』、そして、それらを遙かに上回る實力を秘めたフィルマーレのボス・ウインディ。

10年後にしか存在がないはずの『チヨイス』で戦うことになったボンゴレファミリー。

この章ではチヨイスで戦うメンバーの集結と修行編へと繋がる。

果たして集まるメンバーとは……

そして修行方法とは……

標的24 ヴァリアーの不满

「ディーノさん、レイアさん、どうしてここに？」

「イタリアのボンゴレ本部から連絡をもらってたんでな、まさかヴァリアーですら歯が立たないとは思ってもみなかったからな」

ディーノは困った顔をして話をしていた。

「そんな相手に勝てるのかしら、それに跳ね馬も死ぬ気の炎のことは知っていても使いこなすには時間がかかるはずよ」

レイアの言つとおりである。やはりオレ達7人でやるしかないのか、ツナはそう思った。

「それなら心配ねえぞ」

ツナの心の質問に答えるようにリボンが言った。

「実は未来から帰って来るときに正一に改造した特殊10年バスーカつてのをもらってきたんだ」

「と、特殊10年バズーカ？なんだそれ？」

「つまり、極限特別なバズーカということであろう」

「るっせーんだよ芝生頭、静かにしろ」

タコと芝生の喧嘩が始まった。
リポーンはそれを無視して話を続けた。

「特殊10年バズーカってのは時間効力ではないということだ、例えばツナにこいつを当てたとする、10年後のツナと現代のツナが入れ替わる、ここまでは同じなんだ、そしてこのスイッチを押せば元に戻る。そういうバズーカなんだ」

そしてある疑問をツナが恐る恐る聞いた。

「し、じゃあもし故障したら二度と戻れないとか・・・」

「いや、それは大丈夫だ、故障したときは故障してから10分後に戻るようになってるからな」

それを聞いてツナは心から安心した。

「んで、誰にそれを使うんだよ」

「お前もわかっているはずだ、今のヴァリアーではXANXUS以外は死ぬ気の炎は使えねえ、それに使えたところで匣を持っていないからな」

「ま、まさかヴァリアーに10年バズーカを？」

その時

「ううおおおおおおおおい、それは今のオレ達では勝てねえってことかあ」

スクアーロの怒りが爆発した。ベルやレヴィ、ルツスーリア達も文句を言い始めた。

しかし、XANXUSとマーモンだけは何も言わなかった。

「んじゃあ試してみるか」

リボーンの声の入った声に皆は言葉を止めた。

「リング争奪戦の時と同じように同属性の守護者同士対決しろ、そ

れで負けたらおとなしく10年バズーカを受けてもらっ

「よおおおし、やってやろうじゃあねえかああ

「ちょ、リボーン、また・・・」

ズガンッ!!!

「ひiiiiiii」

ツナの足元に銃弾がぶち込まれた。

「だったらお前達だけで勝てるのか、死ぬ気の炎が使えない奴が戦つても無駄死にするだけだ、さっさとやれ」

いつにもなく本気なりボーンにツナは何も言えなかった。

「確かに、奴らをおとなしくさせるには戦って勝つことが一番だな」
「同感ね」

デイナーとレイアもリボーンの言葉に賛成だった。

いつにもなく本気なりポーンにツナは何も言えなかった。

標的25 ボンゴレ VS ヴァリアー

再び起こりだしたリング争奪戦の同様決戦 - - - -

不満でいっぱいヴァリアーは全力で10代目ファミリーに向かって行った。

現在戦いに参加していないのは沢田綱吉、クローム髑髏、雲雀恭弥、マーマン、XANXUSの5人。

雲雀は誰関係なく戦おうとしたがリボンに止められておとなしくしていた。

「クフフフフ、おもしろいことが起きていますね」

「む、骸様」

「骸、なんでここに？」

ツナ達の前に復習者の牢獄にいるはずの六道骸がいた。

「お久しぶりですね、沢田綱吉、クローム、僕にもよくわかりませんが世界を滅ぼす輩がいると聞いたので特別釈放されたのですよ」

ツナは多少の不安があったが今は仲間である以上避ける気持ちはなかった。

骸達が話している最中、戦いは続く。

山本VSスクアール戦

激しく刀が交差していたが山本は余裕そのものだった。

「てめえ、まったく本気でやってねえな、どおいうことだああ」

「今のあんたじゃオレには勝てねえ、おとなしく10年後と変わってくれねえか」

山本の真剣な願いだったがスクアールは逆にその言葉で怒りが爆発した。

「ふざけんなああああ、ナメンのもいいかげんにしやがれ」

スクアールが構えを取った。

「こいつを喰らええええ、スコントロ・デイ・スクアール鮫特攻!!!」

「やっぱそうだよな、おとなしく聞きたまじやねえか、ならこつちも本気でいくぜ、勝負だスクアール、スコントロ・デイ・ローンディネ燕特攻!!!」

獄寺VSベルフェゴール戦

こちらの戦いはすぐに決着が着きそうだった。炎を使わないベルはリング争奪戦同様にワイヤーとナイフだけ。死ぬ気の炎を放つ獄寺には効かなかった。

「くっ、王子が追い詰められるなんて、そんなはずない、ロイヤルイクスプロージョン」

ベルは多数のナイフを獄寺に向けて放つ。

「悪く思っフレイムアローな、赤炎の矢!!!」

ランボVSレヴィ戦

こちらの戦いは決着が着いていた。痛めつけられて怒ったランボがボンゴレ匣を開匣し、カンピオ・フォルマ形態変化の雷の角でコルナ・フルミネ一撃でレヴィをやぶった。

了平VSルツスーリア戦

こちらも了平の晴の炎を纏ったマキシムキャンオン極限太陽で一発K・O

戦いはほとんど決着が着いた。

「くっ、なぜだ、オレ達がまったく歯が立たねえなんて」

スクアーロは歯が砕けるほどの力で噛み締めていた。
マーマンは自分がアルコバレーノであるとかわかっていた上で、戦闘には加わらなかった。

「みんなすげー、あのヴァリアーを……」

「次はお前の番だぞ、ツナ」

ドキッ!!

ツナに動揺が走った。

「えっ、オレもやるの……?」

ツナは戦いたくなかった。XANXUSの力はわかっていたし、なにより争奪戦の時のように怒りの感情がなかった。

「構えろ、ドカス」

XANXUSのいつになく本気な目がツナの心を打ち抜いた。

「XANXUSは本気だぞ、それに応えてやれ、ツナ」

そう言ったりボーンの目も本気だった。
ツナは額に炎を灯し――

「いくぞ、XANXUS」

「来い、沢田綱吉」

再び、あの激闘が始まる！

標的26 沢田綱吉 VS XANXUS

XANXUSは躊躇なく炎の雨をツナに向かって放つ。

ドオンッ ドオン ドオン

ドゴオオオオオオン！！

端からはしとめたかに見える。しかし

「こつちだXANXUS」

すべての攻撃をかわし、ツナはXANXUSの後ろへと回った。

「ぶんっ」

XANXUSは炎の逆噴射で向きを変えた。

ガキッ！！

ツナの拳とXANXUSの銃がぶつかり合う。
XANXUSはツナを掴み、空へと投げた。

「炎の鉄槌！！」
マルテロー・ディ・フィアンマ

それに対し、ツナはあの構えを取った。

「零地点突破・改！！」

XANXUSはそれを見て即座に反応した。

「それはもう使わせん」

ツナに向かって行った炎が散り散りになっていく。

「なっ」

炎に気をとられたツナが正面を向くとXANXUSが目の前まで迫っていた。

ガッ！！

銃で殴られ、さらに無防備になった。
そしてXANXUSの追撃が襲う。

「炎の蓄X!!!」
ホッチョーロ・デイ・フィアンマ・イクス

普通の炎の蓄ホッチョーロ・デイ・フィアンマより炎圧が強く、数が多い。
ツナは直撃を喰らい、地面に倒れた。

「10代目—————」

「ツナ—————」

「未来での力はこの程度でしかねえのか、もしそうなら……………」

キュアアアアアアア

XANXUSの手から光が照射される。

「んっ？」

ググッとツナが体を起こした。

「ま・・・まだ負けてねえ!!」

「ぐっ」

XANXUSが不意にも気圧された。

そして不覚にもリボーンを含め、そこにいた全員が気圧された。

ゴオオオオという音を立てながらツナが後方に炎を放つ。

「勝負だXANXUS!!」

「上等だ、かつ消してやるぜ!!」

コオオオオ

再びXANXUSの手に光が燈る。

ゲージシンメトリー 発射スタンバイ

「うおおおおおおお!!」

標的27 10年後ヴァリアー、来る

強力な炎同士がぶつかり合う。
そして砂煙りが払われてく。

「XANXUS!!」

「ツナ!!」

ツナとXANXUSは倒れていた。炎が衝突したところには巨大なクレーターができていた。

ザッ!!

立ち上がったのはツナだった。ツナはほとんどダメージがないように見えた。ただ衝撃で倒れただけだったように。

「ツナ、大丈夫なのか？」

山本が心配そうに尋ねる。

「未来であんなに死ぬ気の炎を喰らったんだ、平気だろ」

リポーンは余裕で言った。そしてXANXUSは動かないまま。

「バ、バカな、あのXANXUSがこうもあっさり」

スクアード以外は全員無言だった。

そして数分後――

「クソが、またためえに負けるとはな」

その言葉に振り向いたツナだったがその表情には怒りや悔しさは見えなかった。XANXUSはすでにこの結果を知っていたかのよう
に。

「いいだろう、ボンゴレリングを所持する者共に敗北したんだ、好きなようにするがいい」

「XANXUS」

ヴァリアー全員は承諾し、特殊10年バズーカを受けた。

ポフンッ

「うおおおおい、なんでまたためーらがいるんだあ」

「しししっ、また10年後に来ちまったんじゃねえの」

状況も知らずにスクアールとベルがベラベラしゃべりだした。

「いや、あの、今回は君達が10年前に来ただけど」

ツナが恐る恐る言った。

少しの沈黙の後――

「うおおおおおい、いったいどういことだあああああ
ああ」

全員の耳の鼓膜が破れそうだった。

ドガンッ

「ぐお」

スクアール頭の頭に石が飛んできた。

「てめ、なにしゃがる」

「説明しろ、沢田綱吉」

ただ1人、XANXUSは堂々としていた。そのXANXUSにツナはすべてを話した。

「貴様ら、その程度の用件でボスを呼んだというのか」

「んだとクソヤロー」

レヴィと獄寺が睨み始めた。

「だいたい、10年前のてめーらが承諾したから呼んだんだ」

「嘘をつけ」

「嘘じゃ」

「やめろ、レヴィ」

XANXUSがレヴィを止めた。

「ボンゴレに手を出したカス共は……オレ達でかつ消す」

他のヴァリアー隊はなにもXANXUSの言葉に対して何も言わなかった。

こうして心強いチヨイスマンバーが増え、修業は始まる。

標的28 思いがけない戦い

現在集まったメンバーはボンゴレ10代目ファミリーの8人とアルコバレーノのリボーンとマーモンの2人、そして10年後ヴァリアーの5人、レイアとディーノの計17人。そして - -

「あと骸とディーノをどうするかだ、今のお前達にはリングは使えどもと匣は持ってないだろうしな」

「クフフフ、確かに僕はリングも匣も持っていませんね」

「オレはリングはなんとか使うことができるけど・・・」

「んじゃあ決まりだな」

その言葉に骸が反応した。

「10年後と入れ替われ・・・とでも言いたいのですか？」

リボーンはそつだ、と頷いた。

「マジかよ、でも足手まといになるくらいならいっそそつちの方がいいかもしれねえな」

ディーノは納得していたが骸はというと・・・

「僕は納得がいきませんね、いきなり戦力外と言われても・・・ならばどなたか僕と戦って、僕が負けたら10年後と入れ代わることを約束しますよ」

「ならオレがぶっ飛ばしてやるよ」

獄寺がやる気満々で出てきた。

「待て獄寺、オレがやる」

その言葉を発したのはリボンだった。その状況に誰もが驚いていた。

「ほ、ホントにやるのかよりボン」

その中でも1番驚いていたのはツナだった。

「クフフフ、アルコバレーノが相手ですか、なら本気でいきますよ」

リボーンVS骸の戦いの行方は・・・

標的29 6神官、揃う

「なあホルス、奴らを潰すのっていつだったっけか？」

「……………」

1人の男がホルスと呼ばれた男にそう言ったが、黙ったままだった。

「ちっ、相変わらず無愛想なヤローだぜ、あんまシカトばっかだとさすがのオレもキレルぜ」

男はそう言っただけでホルス睨んだ。

「……………やってみるがいい……………」

無視していたホルスが初めて口を開いた。

その言葉に怒ったのか男が仕掛けようとした時……………

「そこまでだ!!」

その声に男は手を止めた。

「ケルベロス、それにディアナにリベル、6神官勢ぞろいってどこか」

「もうすぐ戦いだというのに、何をやっているのだウーラノス」

ホルスと睨み合っていた男はウーラノスと呼ばれた。

「ふん、ウィンディや真6神官の奴らに服従してんのはてめえらだけだろうが・・・まあいい、そっぴやアトラスのやつ、ウィンディのヤローに消されたらしいな」

「ああ、ヴァリアーのほとんどは倒したそうだがボスのXANXUSに負けたりしいからな」

「ハッ、リングも匣も使わない奴に負けたんじゃ消されるのも仕方ないな」

ウーラノスは仲間が消されたというのにどうでもいいという顔をしていた。

そして雲雀恭弥に負けたリベルにも突っかかってきた。

「よくてめえは消されなかつたなリベル」

「なんだと」

リベルは激昂し、雷の炎を灯して長刀が収納された匣を開けた。

「なんだ、やるか」

ウーラノスもリングに炎を灯し、匣を開匣した。

「ふん、ウーラノスよ、晴の活性ごときで我が雷の硬化に勝てる
でも？」

リベルは勝ち誇った顔でウーラノスを見ていた。

「くくく、はーはっはっは、てめえはまったく成長しねえな」

「なんだと」

「だったらなんで雲雀恭弥に負けた？雲の増殖ごときに負けている
にもかかわらず同じセリフか？『活性』を甘く見んじゃねえぞ！！」

「黙れえええええ」

リベルが光速で襲い掛かる。

ヒュンッ

対するウーラノスの姿も消えた。

「こつちだ雑魚」

ドゴッ

ウーラノスが消えたと思いきや瞬時にリベルの前に現れ、晴ハンマ
ーでリベルを吹っ飛ばした。

「ぐっ、おのれえ」

「いいかげんにしろ!!」

扉を開け、その喧嘩を止めに入ったのは前にツナ達を建物から監視
していた赤髪の青年だった。

「ガ、ガイア様」

「ウーラノス、リベル、次に騒ぎを起こしたらただではすまんぞ」

「ハイハイ、わかりましたよ」

ウーラノスはこれっぽっちも反省していなかった。一方リベルは黙
って頷いた。

「それからウィンディからの召集が掛かっている、すぐに向かえ」

6 神官達はウィンディの部屋へと向かって行った。

「クフフフ、行きますよアルコバレーノ」

ボゴツ ドオオオオオオン!!!!

「第1の道・地獄道!!!」

リボーンの足元から無数の火柱が上がった。

「リ、リボーン」

ツナが心配そうに言った。しかしそんな心配は必要なかった。

「クフフフフフ、・・・んっ?」

ズガガガガガガン!!!

「くっ」

キン キン キン

火柱から銃弾が飛んできた。骸は三叉槍でなんとか防いだ。

「幻覚ごときでオレをやれると思ったか」

「クフフフ、たかが挨拶ですよ」

戦いはまだ続く……

標的30 リボーン VS 六道骸

骸の目が四の文字を示す。修羅道能力でリボーンに襲い掛かる。対するリボーンはレオンを十手に変化させ応戦する。

激しく交差する二人。

「クフフフ、さすがですねアルコバレーノ、では……」

骸が4人に分裂した。

4人の骸はバラバラになり、リボーンへと向かう。

しかしリボーンは空へ飛び、骸めがけ放った。

「カオスショット!!!」

ドオオオオオン!!!

「ぐっ」

かろうじて避けた骸だったが、弾が腕をかすめた。

「本物はもう完璧に見破れるな、カオスショット!!!」

1人の骸に向かってカオスショット全弾が飛ぶ。

しかし、骸の口元が笑った。

ドオオオオオオオン！！

カオスショット全弾が骸に命中した。

しかし攻撃が当たったはずの骸には傷ひとつなかった。

「幻覚と・・・有幻覚」

クロームがポツリと呟いた。骸はとっさに幻覚と有幻覚の中を入れ替わったのだ。

「クフフフフ、こっちですよ」

バキッ！

本物の骸の攻撃がリボーンにヒットした。リボーンは壁にたたきつけられ・・・

「終わりです、アルコバレーノ」

グサッ！！

骸の三叉槍がリボーンを貫いた。

その場面に誰もが青ざめた。

「悪く思わないでくださいね、僕はマフィアの仲間でない上、これは『戦い』なのですから」

チャッ

(銃の音!?)

骸の後ろから音がし、そこにはリボーンが構えていた。そう、骸が刺したのはリボーンに化けたレオンだった。

「なぜ幻覚と有幻覚がわかったのですか？」

「未来で10年後のお前が使ったのを見たからだ」

骸は笑みを浮かべ体を翻し、リボーンに攻撃しようとしたが・・・

ピカアアアアアとリボーンのおしゃぶりが光った。

「カオスバースト!!」

リボーンの銃からは巨大な黄色い銃弾が発射された。

骸は三叉槍でカバーしたがそれと共に骸を貫いた。

「ぐはっ」

骸はその場に倒れた。

「く、クフフフ、さすが・・・です・・・アルコ・・・バレーノ」

「了平、晴コテで治療してやってくれ」

了平はすぐに骸の治療にかかった。

数分後・・・

「約束は約束、さあ10年バスーかなりなんなりして構いませんよ」

「いや、デーノと骸はこのままで行く」

「本当にいいのですか？」

「お前達、ホントはリングを使いこなせるんだろ」

「な、なんだって」

「マジかよ」

ツナと獄寺が目を丸くして言った。

「クフフフ、さすがアルコバレーノですね、リングを使わずにあな

た方と戦ってみたかったんですよ」

「オレは完璧にリングを使いこなせるわけじゃなかったからな」

「大丈夫だ、今のお前らなら」

リボーンはにっこりして言った。最初からこうなる感じだったように……

標的31 7属性の龍

集まったメンバーはボンゴレ10代目ファミリー8人とリボーン、
マーモン、ディーノ、そして10年後ヴァリアーの16人。

戦いのほとぼりが冷めた頃、リボーンはある地図を差し出した。

「今からお前達に『虹龍の谷』の『龍の城』へ行ってもらおう」

「な、なんだよその場所は」

「そこには7属性の龍がそれぞれ存在してな、お前達にそいつらを倒してもらおう」

「り、龍を倒すんすか」

「へえ、そりやすげのーな」

リボーンは話しを続ける。

「大空は天龍、晴は晴龍、雷は雷龍、嵐は嵐龍、雨は雨龍、霧は霧龍、雲は雲龍、同じ属性の龍としか対決できねえからな、奴らを倒すと龍の力を継承できるという言い伝えがあるんだ」

(龍の・・・力?)

リボーンの話聞いていたXANXUSが反応した。

(アトラスとかいうカスが10年前のオレに喰らわせたソウルフレ
イムってやつか)

「同じ属性なら何人でも戦うことができるからな」

そしてリボーンはあるものを取り出した。

「これって、匣?」

ツナはそれを手に取った。

「それにはなにも入ってねえ、龍を倒すとそれに封印され使つこと
ができる」

リボーンはそれと同じものを取り出した。

「なんで2つあるんだ?」

「2つまでなら同時に封印できる、つまり2体分まで使えるという

ことだ」

これならオレ達だけじゃなく、ヴァリアーも使うことができる、という事だった。

3日後

「こ、これが『龍の谷』」

ツナ達は絶叫した。あまりの谷の深さに。

そして谷の向こうの深い森にそびえ立つ7つの城。その地域だけは天候が悪かった。常に曇り空で雷を伴い、嵐が起きていた。

「ま、まるで悪魔の城みたいだ」

沈黙に耐え切れずツナが言った。

「にはははは、雷がピッカピッカしてるもんね」

「う、お、お、おい、おもしろそうじゃあねえかあ」

みんなそれぞれ意見が違った。

城の配置は大空を中心で、6つの城がそれを囲んでいた。

「んじゃあこつからは各々で城へ向かえ」

「待てよりボーン、レイアさんはどうするんだよ」

「リングなら私も持つてるから、なんとか足手まといにはならないと思うけど」

ボウツ！！

レイアはリングを取り出し、炎を灯して見せた。

「じゃあ行くぞ」

「おお」

リボーンの掛け声と共にツナ、XANXUS、ディーノ、レイアは天龍城、了平、ルツスーリアは晴龍城、ランボとレビィは雷龍城、獄寺とベルフェゴールは嵐龍城、山本とスクアーロは雨龍城、骸、

クロームは霧龍城、雲雀は一人で雲龍城へと進んで行った。

しかし、リボンとマーモンは崖の上で立ち止まっていた。

標的32 第三勢力・アルコバレーノ

「あなた方は行かなくてよろしいのですか？」

「オレ様の力もいるんじゃないか!？」

「オレも戦ってやるぞ、コラ!」

リボンとマーモンの後ろから雲雀そっくりで赤いおしゃぶりを下げた赤ん坊とヘルメットをして紫のおしゃぶりを下げた赤ん坊、そしてバンダナを巻いた青いおしゃぶりを下げた赤ん坊が現れた。

「風、コロネロ、よく来たな」

一人足りないような・・・

「うおい、オレ様はどうした」

スカルが叫んだ。

「なんだスカル、いたのか？」

「邪魔だ、どっか行ってるコラ！」

ドゴッ

「ノオオオオオオ！！！」

スカルは谷へ真っ逆さまに落ちて行った。

「ちょっとイジワルが過ぎたのでは？」

風は優しく言ったが顔は少しニヤけていた。

「相変わらず楽しそうね」

首からオレンジ色のおしゃぶりを下げた女性が現れた。

「ルーチェ……いや、その子供かい？」

マーモンがその女性を見て口を開いた。

「はじめまして、アリアと申します」

「やっば、似てんな」

リボーンはにっこりとして言った。

「私は見守ることしかできないけど、大空のアルコバレーノのとして役目は果たすわ」

そしてリボーン、コロネロ、風、マーモンは城とは違う方へ向かった。

スカルは崖をよじ登り、うらみを叫びながら後を追った。

みんなはそれぞれの城の前まで来ていた。

天龍城

「やっぱり緊張するなー」

ツナは扉を開けるのに戸惑っていた。

「相変わらずガキくせえ、10年後のてめえとは全然違うな」

XANXUSは吐き捨てた。

なんとも複雑な心境だった。XANXUSと普通……ではないが
対等に話していた。

(ふう、ようし)

ツナは一呼吸置き、扉を開けた。

晴龍城

「これが龍の城か、極限に燃えてきたぞー」

「そういえば10年前のあなたはこんな感じだったわね」

10年後の了平は冷静な雰囲気も持っていたため、ルツスーリアは
おもしろがっていた。

そして、二人は扉を開けた。

雷龍城

「くっ、なぜよりによってこんなガキと」

レヴィは少しいらついていた。いくらXANXUSの命令でもラン
ボと協力というのはどうも……

「ランボさんはガキじゃないもんね、この髭親父」

ガン

ヴァリアーの面々に加え、5歳児にもバカにされた。
レビィは一人でブンブンしながら扉を開けに行ってしまった。

嵐龍城

「まさか、お前と協力するとはな」

「ししっ、まあいいじゃねえの」

とりあえず喧嘩腰ではなかった。
獄寺は10年後でヴァリアーに助けられたため、妙な敵対心はなかった。

そして扉を開けた。

雨龍城

「うゝおゝおゝい、楽しみじゃねえかあ」

「そうだな、スクアーロと二人で協力して戦うのって初めてじゃね」

「そおだなあ、せいぜい足を引つ張らねえことだあ」

この2人は仲がよかった。

そしてスクアーロが扉を蹴り飛ばして開けた。

霧龍城

「クフフフ、アルコバレーノは来ないのですかね」

「……」

クロームは黙ったままだった。

「どうしました？」

「あ……あの」

クロームは骸の腕を掴み、黙りっぱなしだった。
骸は一瞬驚いたがすぐに戻し

「大丈夫です、僕はお前の側にいますから」

骸は静かに扉を開けた。

雲龍城

雲雀は少しご機嫌だった。今まで群れていたところから解放されたからだ。

「雲龍だかなんだか知らないけど、咬み殺してあげるよ」

雲雀は扉を開けた。

しかし、扉を開けた者達を待っていたのは沈黙だけだった。

すべての城には龍の姿がなかったのだ。

「やはりな」

「リ、リボーン」

天龍城に他のアルコバレーノを連れたりボーンが現れた。

「どづいつことだよりボーン」

「ヴェルデって奴を覚えてるか？」

「前に10代目を狙った野郎ですね」

無線から獄寺が反応した。

「奴はこの時代、炎と匣を研究していたから死ぬ気の炎の塊である龍を連れ去ったんだ、おそらくフィルマーレと手を組んでな」

「じ、じゃあどうすれば」

「だからオレ達がいるんだぜ、コラ！」

「その声はコロネ口師匠!？」

すぐに弟子である了平が反応した。

「今からオレ達で修行するしかないんだ」

ボンゴレファミリー、10年後ヴァリアー、そしてアルコバレーノ・
・龍を手にはできない以上、修行以外に方法はない!

標的33 超（ハイパー）チヨイス編

新たな戦いへメンバー集結・修業編へは新たな戦いへ超チヨイス編へと繋がる。

決定したチヨイスメンバーは第一勢力・ボンゴレファミリーとその同盟による9人、第二勢力・10年後ヴァリアーによる5人、そして第三勢力・アルコバレーノによる5人の計19人となった。

龍の力を手に入れる前にフィルマーレとそれと手を組んだアルコバレーノ・ヴェルデ。

手に龍の力を操るフィルマーレにはたしてツナ達は勝つことができ
るのか……

そして、超チヨイスとは一体……

独自の修業を完成させたツナ達は奴らを越え、世界を守ることが
できるか……

いざ、開炎!!!

標的34 超（ハイパー）チヨイス開始

時刻はもうすぐ13時になる。ボンゴレのメンバーは既に揃っていた。

みんなは並盛中学の屋上にいた。ウィンディが世界に向けてバトル宣言をしたので記者であふれかえっていたのだ。

「すごい人ばかりだな」

あまりの勢いにツナはささやいた。

「目障りだ、咬み殺していいかな」

雲雀がトンファーを構えた。

「ちよっ、雲雀さん」

ツナは焦って雲雀をなだめる。

「その必要はない」
ドオオオオン

！！！！

「なんだ」

記者のいたところが爆発したのだ。

「フィルマーレファミリー」

そこにはボスのウィンディと6神官がいた。

「じゃあ始めようか、超チョイス^{ハイパー}を」

ウィンディは未来で白蘭が用意した物と同じものを取り出した。

「ルールの説明をしよう、まず戦い方法のチョイス、そのチョイスのルールによって人数や属性をチョイス、そしてフィールドをチョイス、これで決定だ」

(なんだか白蘭の時と違うな)

しかし世界を滅ぼすと宣言された以上反論するわけにはいかない。

「真6神官はどうしたんだ」

獄寺が先陣を切った。

「そう慌てるな、まずは6神官を打ち破ることだな」

余裕のフィルマーレに対し、獄寺がイラつく。

「なめやがって」

「ふうん、じゃあまずあれを咬み殺せばいいんだね」

雲雀の口元に笑みが浮かぶ。

「う、お、お、お、い、早く始めねえかあ」

「では、始めるか、この戦いは7回戦までである、4回勝てば勝利だ」
みんなの瞳が強くなる。

そしてボンゴレとフィルマーレがグラウンドに並ぶ。そして残った記者達は生放送でこの状況を放送していた。

その放送を見ていた京子とハルはすぐさま学校へ向かった。

並中では超チヨイスが始まっていた。

「まず戦方法のチヨイスからだ」

ツナとウィンディはルーレットに手を置き、回した。

「「チヨイス！」」

ガラララララララ
ピタッ

ルーレットが止まった。

「1回戦は『30n3』だ」

「30n3?」

「要するに3対3の対決だ、これには人数・属性のチヨイスはないからメンバーは話し合って決めればいい、次にフィールドチヨイスだ」

再び二人はルーレットを回した。

ガラララララララ
ピタッ

「フィールドは霧フィールドだ、では行くぞ」

「待つて、私達も行く」

学校の校門に京子とハルがいた。

「京子ちゃん、ハル、なんで」

ツナに冷や汗が垂れる。

二人はツナに駆け寄り一緒に行きたいとお願いするばかりだった。
しかし、もちろんのことツナは断った。

「見学者として立ち会わせればよからう」

その提案を言い出したのはウィンディだった。

「こちらで戦いのメンバー以外には手を出すつもりはないのでね」

二人は何度断ろうとお願いしてきた。

「わかった」

結局勢いに負けてしまった。

「では行こう」

パアアアアア
バシユウ

ルーレットが光り、ツナ達は並中から消え去った。

そして光が戻るとツナ達は未来のチヨイスと同じように基地ユニットの中にいた。

「ここはメンバー以外の見学所だ」

モニターにウィンディが写し出された。

「チヨイスに参加するメンバーは後ろのドアを出ればフィールドに出るから」

みんなは後ろのドアを確認した。

「じゃあ始めよう、30n3のメンバーを決めるんだ」

^{ハイパー}超チヨイスは始まった。霧フィールドとは果たして……

「で、どうすんだツナ」

緊張のさなかりボーンが言った。

「どうするって言ってもなあ」

ツナは首をかしげて考えていたがあまりしつかりした答えが出ない。

（出たい人、なんて言ったらリボーンにぶっ飛ばされそうだし、か
とってフィールドが『霧』だから霧属性だけを出すわけにはいか
ないしな）

考えはまとまらなかった。

「だったらこういうのはどうだ」

山本が何かに気づいたらしく、言い出した。

「フィールドが『霧』ってことだからおそらく周りが幻覚できて
んだと思う、そこで対幻覚に慣れてるやつがいいと思うんだ」

山本にしてはまともな考えをしていると誰もが思った。特に獄寺と
スクアアローが。

「山本の考えている3人は？」

「オレとスクアーロ、そして・・・骸だ」

！！

「クフフフ、僕を選ぶとはね、山本武」

この3人かと思ったツナだったが迷いはなかった。

「わかった、君達3人にまかせるよ」

「オツケ」

「うゝおゝおゝい、先手必勝してやるぞおお」

「クフフフ、僕の足手まといにならないようお願いしますよ」

「そちらのメンバーは決まったようだな」

再びウィンディがモニターに現れた。

「ではこちらにもメンバー発表といこう、1人目はディアナ、2人目はケルベロス、3人目はウーラノス、この3人だ」

(ディアナが来るのか)

ツナは多少不安があった。表のディアナはかつて仲間だったのだから。

「メンバーは扉から出るのだ、そうそうこの戦いのルールはそれぞれ3人のうち2人を倒せば勝ちとなる」

「だが倒せたかどうかわかんねえじゃねえか」

獄寺が叫んだ。

「ならば倒れてから1分以上動かなかった場合に『戦闘不能』ということにしよう」

「山本、スクアーク、骸、気をつけて」

ツナがエールを贈った。

「骸様、気をつけて」

クロームも少し哀しそうな瞳で骸に言った。

「クフフフ、心配いりませんよ」

骸は微笑みを残してフィールドへ向かった。

「ししし、恥だけはさらさないようにな作戦隊長」

「負けたら私が作戦隊長になってあげるわ」

「10年でどれだけ強くなったか見せてもらうよ」

ベル、ルツスーリア、マーモンが声をかけ、スクアアロはフィールドへ向かった。

「それでは超^{ハイパー}チヨイス、第1回戦・3on3、バトルスタート」

3人共一斉に扉を出た。

そして目を開くと、そこは草原だった。山本、スクアアロ、骸は辺りを見回す。

「スクアアロ、骸、どこだ」

山本の側にはスクアアロも骸もない。

そしてスクアアロと骸も1人になっていた。しかし、2人は仲間を探さずにその場でじっとしていた。

フィルマーレの3人もまったく状況が同じだった。

幻覚にそこまで慣れていないディアナとウーラノスは辺りを見回す。

一方霧の術士であるケルベロスはスクアーローや骸と同じく、目を閉じてじっとしていた。

標的36 霧フィールド

メンバーが扉を出た後、ウィンディに霧フィールドの説明があった。

モニターにフィールドが写し映し出され、説明を聞いていた。

「霧フィールドは上から見ると、縦50メートル、横75メートルの長方形の形をしている。その空間内を6等分してある。つまり、一人縦横25メートルの部屋にいますと考えてもらいたい」

「だがそれじゃあすぐに戦いじゃねえか、どこが霧なんだよ」

獄寺がモニター越しに怒鳴った。

「実はこの空間はどこへ歩いていっても同じ景色しかないのだ、6等分してあるところに見えない境界線がある、それを見つけ、破らなければ敵とも味方とも会うことはできない」

「そんなのどうやって境界線を見つければいいんだ」

「境界線の場所にはそこにしか感じない空間の揺らぎがあるはずだ、それを見抜くということだ」

現在の場所の位置

左上・ケルベロス

左下・山本武

真ん中上・ディアナ

真ん中下 - スクアール
右上 - ウーラノス
右下 - 六道骸

山本とはとりあえず空間内を走っていた。しかし、行っても行っても同じ景色ばかりであった。

「ふう、味方どころか敵もいやしねえ」

山本は立ち止まり、辺りを見回す。

突然刀を出し、地面を斬りながら走り出した。

「山本、一体何を」

「何か気づいのかしら」

モニターから見ていたツナとレイアが言った。

（もしオレの勘が合っているなら）

「!!!、あった、やっぱりな」

山本が地面に付けていた傷が繋がった。

山本はこの空間が永遠に続くのか、また再び同じところへ戻ってくるのかを確かめたのだ。結果は思った通りだった。

「やっぱり同じところに戻ってきたか、なら」

「山本、もしかしてこのフィールドのことに気づいたのかも」

「あちらが先に見つけたか」

モニターを見ていたツナとウィンディが言った。

山本はその地面につけた傷の上をゆっくりと歩いた。

そして5分後

「ん？、ここだけ感じが違う・・・よし」

山本は刀に雨の炎を灯した。

「時雨蒼燕流攻式八の型・篠突く雨！！」

ズバアアア！！

霧の炎の壁を見事に斬った。
そしてその先にいたのは・・・。

「せっかく私から出向いてやろうとしたのに」

6神官のケルベロスがいた。

「てことはあんたも気づいてたんだな」

「当たり前だ、私は霧の術士なのだからな」

上から見て左の上下部分が繋がった。空間は5つになり山本と6神官が激突する！

標的37 山本武 VS ケルベロス

「!?!」

(今、一瞬空間がゆがんだ)

スクアードはフィールドに来てからその場を動かさず目を閉じていた。そして、山本が境界線を破った衝撃に感じたのだ。

「この先は最低でも2人いるってことかあ!」

だがスクアードは衝撃が来た方に刀は向けなかった。万が一敵の策略かもしれないと思ったからだ。

「さあ、始めようぜ」

「いいだろう、掛かって来いボンゴレ」

「いくぜ!?!」

ボウッ

山本は雨犬と雨燕のアニマルリングに炎を注入し、出現させた。
カーネ・ディ・ロベオマツネ・ディ・ヒオッジャ

「刀が4つか、なら私も」

ボウツ
ガチツ

山本に対し、ケルベロスは匣からナイフを出した。

ケルベロスの前に宙に浮いた千本のナイフが現れた。

「ナイフが千本、霧の構築か!？」

しかし、山本は臆することなく刀を構える。なにせ未来で霧の術士とは2回も戦っていた山本にはそれくらい大丈夫だった。

「千本ナイフ(ミツレ・コルテツロ)!!!」

ナイフが次々に山本に襲い掛かる。

(しょせんは幻覚、吞まれさえしなければ……)

「時雨蒼燕流守式七の型・繁吹き雨!!!」

バシヤアアアア

「ほう、振り払ったか、だがまだまだ行くぞ、千本ナイフ(ミツレ・コルテツロ)!!!」

(幻覚で構築されてりゃキリがねえ、なら)

「小次郎、形態変化だ!!」

カンピオ・フォルマ

「んっ、合体しただと!?!」

そしてモニターを見ていたウィンディも気づいた。

「あれは、変則四刀・・・まさか朝利雨月の」

山本の刀に巨大な炎が灯る。

「いくぜ、時雨蒼燕流総集奥義・時雨之化!!!!」

パシャアアアア!!

「ナイフが・・・止まった!?!」

仮面のせいで表情は見えなかったが、言葉には確実に焦りがあった。

山本はその隙を見逃さなかった。

「時雨蒼燕流攻式三の型・遣らずの雨!!」

「しまった、うぐっ」

刀がケルベロスの肩をかすめた。

「くっ、やるではないか、貴様ごときに波動を使つつもりはなかったが、それも言ってもらえないようだな」

ケルベロスは霧のリングに炎を灯し、その炎は次々と幻覚を構築していく。霧の炎は5人のケルベロスを構築した。

「また霧の幻覚か、だが実体と幻覚くらいもう……!!」

(なんだ、この感じ)

「どうした山本武、顔色が変わったぞ」

ケルベロスが言った通り、山本の表情が豹変した。

「まったくわかんねえ、どうなってんだ」

「くくく、見破れないだろう、その答え教えてやろう」

一方骸サイドは……

「派手にやっているようですね、この感覚からすると……」

術士である骸はすでに霧フィールドのことはわかっていた。

「そろそろ僕も行きましようか」

つけていたリングに炎を灯し、三叉槍を地面に付けた。

「第一の道・地獄……!!」

ピシッ

左側の空間が斬れた。

とっさに三叉槍を構えた骸だったが、

「スペルビ・スクアール!?」

「うゝおゝおゝおい、骸じゃあねえかあ!」

そう、スクアールは前か右かで迷っていたが右側の壁を突破し、骸に出会ったのだ。

「やはり、このフィールドの仕組みに気づいていましたか」

「ああ、オレがいた場所の左側で空間が歪む感じがしやがったからなあ」

「ではおそらくその方向に・・・」

「順序からすると、山本が戦っているだろう」

とりあえず二人は山本の勝利を願った。

「ハア、ハア・・・こそ、なんで実体と幻覚がわかんねえんだ」

ケルベロスの分身達に山本はてこずっていた。

「これこそが霧属性特有の波動・夢幻の波動だ」

「夢幻の・・・波動？」

標的38 波動

現在の霧フィールドの状況は6つあった部屋は左上と左下が繋がり、真ん中下と右下が繋がったため、4つへと減った。

「しゃらくせえ、オレ達もとつととやるぞお!!」

「ええ、そうですね、おそらくこの正面の境界線を破れば後の二人がいるでしょう」

二人が構えた。

「うおおおおい、ザンナ・ディ・スクアール鯨の牙!!」

「第1の道・地獄道!!」

ドゴオオオオン!!

二人の協力な技が境界線を打ち破る。

「やっと現れやがったか」

「.....」

「ではあなた方も気づいていたと?」

「いんや、わからなかったからそっちが出向くまで待ってたってわ

「けよ」

フィールドを把握してないにもかかわらず、ウーラノスは威張っていた。

「うおおおい、なんだあ、この生意気なガキは」

「んだと、やってやるうじゃねえか」

「クフフフ、相変わらず血の気が多いですね、では僕はあちらということで」

ウーラノスと一緒にいたディアナは相変わらず黙っていた。

「夢幻の・・・波動・・・」

（確か、骸がそんなこと言ってたな）

「貴様も波動を体験したことがあるだろう、ディアナやボンゴレ？世が発動していたところをな」

「!!」

ボンゴレ側は山本だけしか動揺していなかった。

「山本、波動のこと知らないんじゃないか」

山本の顔を見て、とっさに口にしたツナ。

「山本のことはスクアーロにまかせていたからな、コラ」

「おそらくスクアーロは教えてねえ」

XANXUSの言葉にみんなは固まった。

「でも一体どうして」

「10年後の時を思い出してみる、スクアーロは常に自分で乗り越えられるよう奴に言い聞かせたはずだ」

「山本……」

「ヴァリアーやアルコバレーノは波動のメカニズムは知っているはずだ、なぜ貴様が知らない」

「……」

「なら教えてやろう、波動はそれぞれの属性に存在し、その特徴に

刻まれたのを元にできている」

「……………」

波動のことを知らない山本はただただ黙っているだけだった。

「晴属性は『無我の波動』、雷属性は『雷霆の波動』、嵐属性は『炎破の波動』、雨属性は『静止の波動』、霧属性は『夢幻の波動』、雲属性は『考陰の波動』、そして大空が『調和の波動』、まあそれ以外にも属性に関係ない波動が存在するがな、波動は並外れた覚悟がない限り、使うことはできない」

「……………そうか……………だから」

「ん？」

ダダッ

山本がケルベロスに向かって走り出した。

「わかつたんだよ、スクアールがなぜ波動のことを教えてくれなかったかが」

「それがわかつたところで我が夢幻の波動は破られない」

山本の表情が鋭くなった。

ドクン ドクン

山本の心臓の鼓動が激しくなる。

「うおおおお」

「! ! ! !」

ブワア

山本から風のようなものが発せられた。

「な、何、こ、これは静止の波動! ?」

波動を知らないことで油断していたケルベロスに静止の波動を流すことはできなかった。

「くっ、動けない」

ケルベロスは焦った。

「そういえばリボン、波動のメカニズムを知ってるあいつなら切り抜ける方法を知ってるはずなんじゃ」

「ああ、知ってるだろうな、だが相手の波動に呑まれた時、波動を放った奴の精神が崩れるか、それを越える波動の力で呑み返すしか方法はねえ、それに呑み返す方法はたいていの奴は無理だからな」

山本がケルベロスの頭上に飛んだ。

「時雨蒼燕流総集奥義・時雨之化!」

ピシャアア

「ぐああああ……あれ、切られてねえ」

「ハハハッ、時雨之化は雨の炎を技や敵にぶつけるだけだからな」

「そんなことをして何の意味がある」

「今あんた、一瞬でも切られるってビビっただろ、その精神崩壊が、夢幻の波動が敗れた時だ」

「!、しまった」

そう、山本が時雨之化を放ったのは相手にトドメを刺す攻撃だと『思い込ませる』ことだった。それにより、一瞬でも恐れを感じたケルベロスの夢幻の波動は山本が凌駕したのだ。

「もうどれが本物かわかるぜ」

「くっ」

ケルベロスの顔がひきつった。

「時雨蒼燕流特式十の型・燕特攻!!!」
スコントロ・ディ・ローンディネ

「ギャアアアアア!!!」

究極の奥義に、ケルベロス、散る。

標的39 スペルビ・スクアード VS ウーラノス

「がはっ」

究極の奥義に6神官・ケルベロス、散る。

「ふう、危なかったぜ」

山本は形態変化を解き、刀を収めた。

カンピオ・フォルマ

「すごいよ山本」

モニターを見ていたツナが叫んだ。

「やはりこの程度か」

「ふう、しょせんはお前達真6神官とは出来が違うのだ」

ジェラートとウィンディはケルベロスの敗北に微動だにせず話していた。

そして1分後、機械音が流れた。

「イップンケイカ、フィルマーレファミリーケルベロス、セントウ
フノウ」

アナウンスの後、床に穴が開き、フィールドから姿を消した。

「山本の奴、勝ちやがったかあ」

スクアアロがニツと笑う。

「けっ、6神官の恥さらしが、おい鮫野郎、オレはそんな簡単に倒せねえぜ」

スクアアロとウーラノスの火花が散る。

「へっ」

ブンッ

「!!!」

ドン ドオン

スクアアロは刀を振り回し、仕込み火薬を放った。

「あつぶねー、不意打ちかよならこっちもいくぜ」

ウーラノスは晴ハンマーを開匣し、対抗する。

一方骸VSディアナ。

「ボンゴレ霧の守護者、滅する」

「クフフフ、やれるものなら」

ブウウン

骸の瞳に一の文字が宿る。

ボコッ

ドオオオオン

ディアナの足元から火柱が現れた。

「第1の道・地獄道！！」

バツ

「！！！」

火柱からディアナが飛び出してきた。

一瞬隙が生まれたがすぐに三叉槍を構えた。

ガキン

「ほう、幻覚をものともしないとは、それにこれは」

ディアナの手には雲の炎を纏った巨大なツメが装着されていた。

「な、何、あの巨大なツメ」

「あれが奴の武器匣だな」

驚いているツナに対し、リボーンは相変わらずというポーカークフェイスだった。

「であああああ」

ドゴッ

「へったくそがあ」

ウーラノスのハンマー攻撃を避け、反撃に出るスクアーロ。
ブンッ

「お前こそな、隙ありだぜ」

こちらも刀を避け、ハンマーがスクアーロを襲う。

「そう簡単に・・・」

ドガッ

「おへお」

とっさにハンマーを刀で受け止めたがそのまま力で飛ばされてしまった。

「ほう、よく無傷で済んだな」

「んだとお、どついう意味だあ」

「このハンマーの重さは5トン、よく刀が折れなかったなって言うてんだよ」

スクアール口や仲間にも動揺が走る。

「ご、5トンって」

もはや言葉にならなかった。

（ちっ、カじゃ奴の方が上ってことかあ）

スクアール口は立ち上がった。その時、腕に違和感を感じた。

（う、動かねえ）

モニターを見ていた仲間にもそれはわかった。

「スクアール、まさか」

特にディーノには。

「やられたな」

それに答えるようにリボンがつぶやいた。
もちろんウーラノスもそれは見逃さなかった。

「どうした鮫野郎、右手が動かなくなったとか」

（ちっ、気づいてやがる）

「う、お、お、おい、だからって調子に乗んじゃねえぞお」

ガチッ

ドシユ

「スクアール・グランデ・ピオッシャ
「**暴雨鮫**、てめーなんぞ匣で十分だあ」

「なめられたものだな」

ウーラノスの目つきが変わった。

ヒュン

「！！、消えた」

ドゴッ

ドオオオオン

「なっ」

消えたウーラノスは一瞬で現れ、アーロに強力な一撃を喰らわせた。

アーロはピクリとも動かない。

「さあ、次はてめえ本体に喰らわせてやるぜ、鮫野郎」

標的40 逆転への一手

スクアーロ・グランデ・ピオッジャ
暴雨鮫をも一撃でやられ、高重量のハンマーで攻撃されたため、右腕が麻痺した状態である。

「ちっ、クソがあ、このままやってやろうじゃねえかあ」

舌打ち後余裕を見せる態度だったがスクアーロに手は思い浮かばない。

「いくぞ、鮫野郎」
ヒュン

再びウーラノスが姿を消した。スクアーロは少し焦っていたのか、いつもなら気配で敵を追うのに、今はキョロキョロと辺りを見回し、目だけで追っていた。

「!?!」

「こっちだぜ鮫野郎」

もはや完全にスクアーロの後ろを取った。しかし

一瞬のうちにスクアーロとウーラノスの表情が入れ代わった。スクアーロは苦しみから笑みへ、ウーラノスは笑みから苦しみの顔へ。

「オレの剣に……死角はねえぜ!!」

「あ、あの技って」

「そうだ、雨戦でスクアアロが最後に見せた技だ、結局山本の影だったかな」

「ぐあ」

ウーラノスが膝をつく。見事ウーラノスの右手を貫いた。

「うおおおい」

「!!!、まずい」

ヒュン

再びウーラノスは消えた。

「ちっ」

スクアアロが静止の波動を放ったが、それを察知したウーラノスは高速移動で姿を消した。

「ねえ、リボーン、あいつもしかして」

「気づいたかツナ、ウーラノスは無我の波動を放っている」

ツナとリボーンの会話に了平とルツスーリアが反応した。

「うむ、無我の波動は体の身体機能を何倍にも活性させることができる」

「つまり、攻撃や防御、スピードも何倍にもなるってわけよ」

「ならばスクアアロの奴」

その話を聞いてレビイがニヤツとした。

「おいムツツリ、もしかしたらスクアアロが負けんじゃねえかって思ったな」

ベルの一言でレビイのニヤケ顔は崩れた。

「そ、そんなことはあるまい」

「しししっ、動揺しやがって、それに何倍にもするっつたって、タダなわけねえだろルツスーリア」

「さすがベルちゃん、その通りよ、無我の波動は使っていると後に反動が返ってくるのよ」

「オラア」

ドゴッ

「うゝおゝおゝおい」

ガキン

ウーラノスは次々とスクアーロを奇襲するが、対するスクアーロも避けては攻撃に移る。

（くっ、なぜだ、無我の波動を発動したオレに、なぜこつも見切られる）

「知りたいかあ」

ウーラノスに動揺が走る。

ズバツ

見事にスクアーロは高速移動中のウーラノスを斬った。

「なぜオレが毎度てめえ本体じゃなく、ハンマーに攻撃してたと思っう？」

「なんだと!？」

「それはなあ、ハンマーを通しててめえに鎮静の炎を流し込むためだあ!!」

してやられたという顔をするウーラノス。

「ジエラート、お前は気づいていたか」

「誰に聞いてんだウインディ、当然だろ」

「ぐっ、ならば直接食らわすだけだ……!!」

もはやウーラノスは冷静さなど微塵のかけらもなかった。

ガチッ

ドシユ

「スクアール・ディ・ピオッジャ雨鮫!!」

「もつひとつ持っていたのか」

「スクアール・グランデ・ピオッジャ暴雨鮫よりパワーはないが、今のてめえには十分だあ」

スクアール口が飛んだ。正面からはスクアール・ディ・ピオッジャ雨鮫が攻めて来る。

「鮫土砂降り（ディルヴィオ・ディ・スクアール）！！」

鮫の突進と空からの斬撃の土砂降りがウーラノスを襲う。

標的41 VS 晴龍

鮫と剣撃がウーラノスに襲い掛かる。

(避けきけねえ、使いつもりはなかったが、やむを得ねえ)

ウーラノスはリングに炎を灯し、匣を開匣した。

「いでよ、ドラゴナー・デル・セレーノ晴龍!!!」

巨大な晴の炎の塊が匣から出現した。

「ちっ、あれが例の龍か」

スクアーロは構わず攻撃を続ける。

ズザザザザザ!!!

剣撃はすべて当たった。だが煙が収まるとそこには無傷の晴龍とウーラノスの姿があった。

「くそがあ」

ググつと悔しそつに唇を噛むスクアーロ。

「この一撃だな」

「そおだなあ」

余裕なウーラノスに対して、スクアーロも笑っていた。

「いくぞ晴龍!!」

晴龍がウーラノスのハンマーと合体した。

「ううおおおい、いくぞお」

スクアーロ・グラスダアピロツヂャ・ヒオツジヤ
暴雨鮫と雨鮫を横に並べた。そして

ボオオオ!!

巨大な雨の炎を灯し、ウーラノス目掛けて突進する。

「いくぞ鮫野郎、おうりゅうは黄龍破……!!」

ハンマーを地面に叩き付け、ソウルフレイムがスクアーロに向かう。

XANXUSの言葉にみんなはモニターをじっと見た。

「ハアーハツハツハ、くたばったか鮫野郎……ん？」

ウーラノスの表情が変わった。

晴龍の様子がおかしい、ガタガタ震えていたのだ。

「どうした晴龍？」

ガアアアアアアア

バシユ

晴龍の叫びの後、スクアーロが晴龍の体の中から飛び出してきた。

「そ、そんなバカなああああ」

「鮫土砂降り（ディルヴィオ・ディ・スクアーロ）！！！！」

ズザザザザザ！！

「ぐああああ」

最強の奥義にウーラノス、墮つ。

「ししっ、やるじゃんスクアーロ」

「ぬっ」

楽しそうなベルと悔しそうなレヴィの顔があった。

ドサッ！

「あっ」

とっさのツナの声にみんなが振り向いた。
スクアーロも同じくその場に倒れたのだった。

標的42 1分間の死闘

境界線がすべて断ち切れ、晴龍とスクアーロの衝撃の波動は山本や骸にすぐに伝わった。

「スクアーロ……!!」

山本がスクアーロに駆け寄る。

「山本武、触れてはいけませんよ」

触れようとしていた山本の手がピタッと止まる。

「倒れた状態で触ればあなたも失格になりますよ」

骸の言葉に山本はグツと感情を堪え、その場でスクアーロをじっと見た。

「さて、このまま二人が起きなければそちらは3人中2人が脱落となり、我々の勝利ですが……」

ガキン

三叉槍と雲ツメが交錯する。 巨大なツメをもろともせず、骸も対

抗していた。

「霧の守護者、滅する」

「そちらはその気はないようですね」

骸は笑みを見せ、ディアナに向かう。

ブウウウン

「第3の道・畜生道!!!」

ディアナの周りに毒蛇が現れ、体を締め付ける。

ババババババ

しかしディアナは雲のリングから炎を最大限に灯し、毒蛇を振り払う。

ガバツ

「!!!」

巨大な雲ツメが骸を掴んだ。

ゲゲゲ

強力に骸を締め付ける。

「骸様」

クロームがとても心配そうに見ていた。
その顔を見てツナも冷や汗を垂らす。

「潰れる、霧の守護者!!」

「がああああ……でも言うと思いましたか？」

骸の不気味な笑いに一瞬ディアナの力がゆるんだ。

コオオオオオオ

「黄泉よみてんりん転臨!!」

パキン!!

光と共にツメが砕けた。

「終わりですよ」

三叉槍がディアナを襲う。

「イップンケイカ、フィルマーレファミリーウーラノス、ボンゴレファミリースペルビ・スクアーロ、セントウフノウ」

アナウンスの声に骸が手を止めた。

三叉槍がディアナの頬をかすめた所でアナウンスが流れた。

「サンニンチュウフタリセントウフノウ、ヨツテボンゴレファミリーノシヨウリデス」

「この勝負、お預けですね、行きましよう山本武」

そう言うと山本と骸は自分のユニットへ戻って行った。

戻るとみんなが出迎えてくれた。

「山本、骸、大丈夫？」

「大丈夫だぜツナ、それよりスクアーロを」

「大丈夫よ、私がすぐに治してあげるわ」

「ああ、サンキュー」

ルツスーリアのオカマ態度をものともせず、山本はルツスーリアにお礼を言った。

「骸様」

クロームは骸の元へ寄った。

「大丈夫ですよ」

そう言つてクロームを自分の腕で包みこんだ。

「しししっ、やられちゃったな」

「……………」

ベルに対し、相変わらずXANNUSは黙つたまま。

「見事だな、ボンゴレファミリー」

「ウィンディ」

モニターにウィンディが現れた。

「では2回戦といこう」

「えっ、もう次いくの?」

ツナの言葉も聞かず、モニターの下にジャイロルーレットが現れた。

「では回すぞ」

しかたなくツナはルーレットに手を当てた。

「「チョイス」」

ガララララララ
ピタッ

「ドゥーDue アトリビュートattributeだ」

「な、なにそれ」

まったく意味がわからなかった。

「2属性VS2属性の対決だ、次に属性、人数、フィールドチョイスだ」

ガララララララ
ピタッ

「ボンゴレは晴が2人、嵐が2人、フィルムマーレは嵐が1人、雷が

2人、フィールドは嵐だ」

激闘の2回戦、果たしてそのメンバーは……

標的43 メンバー決定

「晴が二人、嵐が二人か」

やはりツナにはメンバー決めでは迷いを見せていた。

「ねえ」

突然後ろから不機嫌そうな声が・・・

「まだ僕は出れないのかい」

怒りオーラが見え始めた雲雀。

「ヒ、ヒバリさん」

「まあ待て恭弥、番が来るまでトレーニングルームでオレと戦うつてので我慢してくれ、なっ」

「いいよ」

デイーノの言葉をあっさり受け入れた雲雀に、みんなの肩から力が抜けた。

「晴属性はルツスーリア、芝生、リボンさん、嵐属性はオレとナイフ野郎、風っすね」

「ツナ、どうするんだ」

「そんなこと言っても」

「極限にオレは出るぞ……!!」
響くほどの大声。

「なら晴は、ルッスーリアと了平だな、オレはまだ出ねえ」

「私も出ないで構いませんよ」

あっさりトリボンと風はその座を明け渡した。

「10代目、これで構いませんか？」

「う、うん、じゃあ頼むよ、気をつけて」

ぎこちない返事で4人を見送る。

「しししっ、足手まといにはならねーよーに」

「てめーがな」

言葉だけ見れば喧嘩だが、獄寺とベルは笑っていた。

「極限に頼むぞ、ルッスーリア」

「まかせなさい」

こちらはこちらで何故か仲がいい。

「その4人でいいのだな」

ウィンディの問いに、ツナは黙って頷いた。

「こちらのメンバーも紹介しよう、嵐は6神官最強の男・ホルス、雷は6神官のリベル、そして真6神官のインドラだ」

「!!、ついに、真6神官が来るのか」

ツナに冷や汗がにじむ。

ジェラートのように強かったら、と不安に思う。

「獄寺、頼んだぜ」

「てめえに言われなくても10代目の右腕であるオレが負けるわけにはいかねえ」

「ベル、ルツスーリア、君達の強さも見せてよね」

「しししっ、相変わらず生意気な子どだぜ」

「しっかり見ておくのよマーモン」

「お兄ちゃん」

とても心配そうな顔で了平を見る京子。

「大丈夫だ京子、兄ちゃんは必ず勝ってくる」

それぞれの想いを胸に、第2回戦は、幕を開ける。

標的44 それぞれの対峙

「今回の戦いは2属性VS2属性、よって1属性が敗れた方の負けということだ」

「やってやるうじゃねえか」

気合いの入る獄寺、他の3人も扉へと向かう。

「4人とも、気をつけて」

ツナの言葉に笑みで答えた獄寺と了平、ベルとルツスーリアは無表情だった。

そして、4人は扉をくぐった。

「うお」

フィールドに降り立った獄寺がいきなり声を張った。

「んだこりゃ、辺り一面砂漠じゃねえか」

そこは砂嵐が吹き荒れる、砂漠だった。

しかもいるのは獄寺とベルだけ。了平とルツスーリアはそばにはいなかった。その2人はというと・・・

「ぬぬ、極限に砂漠のど真ん中ではないか」

「しかも砂嵐が起こってる最中よ、目が開けられないわ〜・・・
って私サングラスかけてたわ〜」

しかし了平はそんなボケにツッコミは入れず、ただただ腕で砂を庇っていた。

「まさに嵐フィールドってとこだな」

「しししっ、いいんじゃね、ボンゴレの嵐の使命を体現できて」

「望むところだぜ」

獄寺とベルは突然言葉を止め、匣を用意した。
そこを動かず、目と気配だけでその何かを捜す。

「あぶねえ!!」

ドゴオオオオン!!

どこからか何かが襲ってきた。
とっさに S I S T E M A C ・ A ・ I を出現させたため、防ぐことはできた。

ザッ

二人は足音の方に顔を向けた。

「貴様らがボンゴレの守護者か」

刀を手に、長髪の男が現れる。

「ぬう、まったく何も見えんぞ」

「サングラスかけてても砂が入ってくるわ」

ルツスーリアは一人でクネクネ腰を振っている。

「なんでこんな奴らを相手にしなくてはならないのでしょうかね、インドラ様」

「まあ落ち着けリベル」

了平とルツスーリアの後ろからフィルマーレの2人が現れた。雲雀に負け、包帯グルグル巻きのリベルと、雲に乗り、まさに雷様といえるような男が現れた。

「お前が6神官最強のホルスってやつか」

「.....」

ベルの問いにホルスは沈黙したまま。そして同じく獄寺も。

(こいつ、たった一撃、しかもあれほど小さい炎撃でSYSTEM
A C・A・Iのシールドを4つ中3つまで貫いてやがる)

獄寺の顔に汗が伝う。ベルも獄寺の顔を見て顔色を変えた。

ボンゴレ嵐の守護者VS6神官最強を誇るホルス、ボンゴレ晴の守
護者VSフィルマーレ雷の神官、激闘開始!!

標的45 嵐の特攻隊

スツとホルスが刀を構えた。

2人はその刀を見た時、背筋が凍る現象に襲われた。

「な、なんだあの刀」

「なんかやべー感じじゃね」

ベルはそう言いながらもナイフを持ち先手を取った。

「ああゆう相手には先手必勝、ロイヤルイクスプロージョン!!」

嵐の炎を纏った多数のナイフがホルスに向かって投げられる。
ホルスはその攻撃に冷静に対応する。

「ござかしい、嵐アタック・テンベスタ衝撃!!」

ズザザザザザ!!

刀を振りかざし、嵐の炎の衝撃でナイフを落とした。

「やんじゃん」

ガチッ

ドシユ

ベルは嵐ミンク（ヴィゾーネ・テンペスタ）を開匣した。

「いくぜミンクー!!」

嵐ミンクは砂嵐の中を飛んだ。そして嵐の炎を砂埃に纏わせた。

「紅蓮の炎^{ファイアンマ・スカルラッタ}Ver砂嵐!!」

嵐の炎を纏った砂嵐がホルスに向かう。

しかし、ホルスは避けようとせず、刀に炎を灯しそれを受け止めた。

ガガガガガガガガガ!!

砂嵐もホルスもどちらも引かない。

ズザアアアア

後ろから音が聞こえ、顔を後ろに向けるとそこにはベルの姿があった。

「砂嵐はおとりだぜ、ロイヤルイクスプロージョン!!」

再びナイフがホルスに向かう。

「ふっ、そんなことはわかっている」

ホルスは右手を後ろに出し、嵐の炎のバリアを張った。
しかしベルフェゴールは笑ったままだった。

「しししっ、これも罠だったとしたら？」

一瞬にしてホルスの顔色が変わった。

「フレイムインフレーション!!」

その声の方向に顔を向けるも、もはや遅かった。
雲属性のフレイムアローが直撃した。

ズドドドドドドドド!!

「ぐっ」

嵐ミンクの作った砂嵐の中から獄寺が雲属性のフレイムアローを放ったのだ。

「今だ!!」

獄寺の掛け声と共にベルフェゴールも攻撃を仕掛けた。

嵐ミンクの炎を最大にして数本のナイフと共に突進した。

獄寺も負けじと攻撃をする。
始めは晴+嵐、続いて雲+嵐、そしてトドメに嵐+雷。

「常に攻撃の核となり、休むことのない怒涛の嵐!!」

ドゴオオオオン!!!

嵐の特攻隊のコンボ攻撃炸裂!!!

フィールドが再び元の砂嵐に戻った。

怒涛の攻撃を受けたホルスはその場に倒れていた。

「フウ」

二人が安堵の息をもらした。 が・ ・
再び寒気を感じた獄寺が倒れているホルスの方を見た。

「なっ、立ち上がりやがった」

何もなかったようスツとホルスが立った。

「たいした威力だが、その程度では私は倒せん」

ベルと獄寺のコンボ攻撃も効かず、ホルスの刃が牙を剥く。

標的46 日輪の闘士

「嵐月刀破らんげつとうは！！」

ババババババ！！

ホルスが刀を振りかざすと、二日月型の斬撃が飛んでくる。

「フレイムサンダー！！」

ドカン！！

「なっ」

フレイムサンダーを放ったが、嵐月刀破はまったく相殺されていないな
かった。

「くっ」

S I S T E M A C ・ A ・ I のシールドを発動させたが・・・

バリン バリン

ズバババババババ！！

いとも簡単にシールドを破られ、声もなく獄寺が倒れた。

「う、獄寺君」

「そんな、イヤです、獄寺さん」

ツナももちろんだがハルや京子も今にも崩れそうな表情をしていた。

「あれは、ただの刀じゃあねえ」

後ろからの声にみんなが振り向いた。

「ス、スクアーロ、大丈夫なのか？」

起きてきたスクアーロに山本が寄り添う。

「ただの刀じゃないってどういうこと？」

ツナが焦った表情で聞いた。

「あれは妖刀だあ、その昔かつて戦国の世に作られた刀、まったく壊れないうえ、多大な数の人間を斬り殺し、リングを斬ってきた刀だあ」

「ど、どういうことだ、リングもって」

「あの刀は人間やリングを斬ることによって妖力を増してく刀、普通の人間なら触れただけで精神ごと体が吹っ飛んじまうんだがなあ」

「獄寺君、そんな相手と」

離れていたツナにまで妖刀の恐ろしさが伝わってきた。

「お前はあの時の」

「そういえば並中でお会いしましたね」

了平はリベルの顔見てその時のことを思い出した。

「あら、知ってたの」

「ああ、並中でいきなり襲ってきた奴でな、その後雲雀に極限コテンパンにされたのだ」

ピクッ

その言葉にリベルの表情が変わる。

「貴様、言うてはならぬ名を口にしてしまったな」

バチッ

雷の音と共にリベルが消えた。

「死ね——!!」

ガッ

「くっ」

なんとかリベルの攻撃を腕で庇った。

「受け止めたのは見事、だが」

ババババババ!!!

「ぐああああ」

リベルがリングの力で電撃を放ったのだ。

「お兄ちゃん」

「ああ」

兄のやられる姿に京子は目をつぶる。

攻撃が止むと、了平は膝をついた。

「もう一度喰らえ!!」

バチッ

「くっ」

「メタルニー!!!」
バキッ

「ぐお」

ルツスーリアの膝蹴りがリベルにヒットした。

「す、すまんルツスーリア」

「気にしないの、行くわよ」

そして立ち上がった了平はルツスーリアの掛け声と共に、匣を開く。

229

「行くぞ我流、カンピオ・フォルマ形態変化!!!」

明るく大空を照らす日輪・ナックルの極限ブレイク。

「クーちゃんやるわよ、合体」

そしてルツスーリアも了平と同じく匣兵器と合体した。

日輪の闘志が反撃の時!!!

標的47 笹川了平 VS リベル

「ここはオレにまかせてくれないかルツスーリア」

「あら、手柄の独り占めはダメよ」

ふくれた顔をするルツスーリア。

「お前はとっておきの切り札だ、最初に使いたくないのだ」

一瞬ルツスーリアに沈黙が入った。

「ま、まあそこまで言うなら構わないわ」

切り札という言葉に反応したのか、うれしそうに顔を引き下がってくれた。

「なら私はあつちのと戦ってるわね」

そう言っつてインドラの方へ向かって行った。本当は真6神官相手には二人で戦いたかったのだが。

「しょうがあるまい、行くぞリベル」

「威勢は買っつが、雷の速さを持つ私に攻撃を当てれるかどうかですね、光速の雷いかすぢ！！」

バチッ

雷音と共に姿が消えた。

「フウ」

了平はリベルの高速移動を少しも気にせず、ゆっくり目を閉じた。そして一呼吸置き、構えをとった。

それをモニターで見ていたツナ達には何を考えているのかわからなかった。

「お兄さん、どうするつもりだろ？」

「きつと先輩には何か考えがあるんじゃないか」

「黙って見てればわかる」

ツナと山本にわかったような口ぶりでありボーンが言った。

「マキシマム極限……」

スウッと右腕を構え、

「^{キャン}太陽！……！！！」

バキッ

「がはっ」

強烈な衝撃と共に極限太陽がリベルを打ち抜いた。そして地面に倒れたリベルは攻撃を食らってから微動だにしなかった。

「えっ、い、一撃？」

「お、お兄ちゃん」

モニターで見ていた者達は全員ポカーンとした顔になっていた。

「了平の奴、やりやがったな」

「えっ、リボン、どうなったかわかったの」

「ああ」と一言だけ口にし、ニッとリボンが笑った。

「今のは未来で使っていた直接身体に晴の炎を当てる超活性、さらに晴属性特有の波動・無我の波動、そして前にお前が使った死ぬ気の一点集中、これらをコンボで使ったんだ」

「ってことは」

「とんでもない極限太陽だったんだ」

インドラに冷や汗がにじむ。これを受けたらさすがにマズイと。

「いづくぞ……、極限、ビッグバン極限太陽……」
マキシムキャノン

ヒュン

了平が消えた。

ドゴオオオオン！！

「が……は」

了平の攻撃はルツスーリアやモニターを見ていたみんなに探す時間も与えることはなかった。消えたと同時に了平のビッグバン極限太陽がインドラの腹に当たっていた。
マキシムキャノン

そのまま宙に身を投げられるたインドラ、さすがにこの攻撃は決まったとみんなは思った。

「なかなかやってくれる、けっこう効いた」

「なっ」

「あ、あの攻撃を受けて平気だなんて、バケモノよ」

さすがのルツスーリアも、攻撃を当てた了平も、畏怖の念を感じざるを得なかった。

「平気じゃねえよ、けっこう効いたぜ」

「くっ、無念、ルツスーリア・・・あとは・・・まかせ・・・た」

そういい残すと、了平はその場に倒れた。

標的48 最強の妖刀

「こつなりや出し惜しみはナシだな」

ベルは多数のナイフを宙に浮かす。

「いつくぜく、ミンク急襲ヴァイゾーネ・フリッツ!!!」

嵐ミンクとナイフのコンボが攻撃がホルスを襲う。
対するホルスも妖刀を構えた。

「妖道斬月破アキツキツキハ!!!」

ホルスが刀を上にした。嵐の炎が灯っているせいでホルスの妖刀は巨大だった。

そしてそのまま妖刀を振りかざした。

ドゴオオオオン!!!

巨大な刀はナイフとミンクをあつさり破壊した。

ズバツ!!!

「うっ」

妖刀の衝撃でそのままベルの体が斬られたのだ。
だが衝撃の余波だったので傷は浅かった。

「いって、だけど、こんくらいじゃ・・・」

ドシュ バシュ ドパツ

「がはっ」

突然ベルの体中から血が吹き出した。

「この妖刀は一度でも斬られるとそこから炎の効果が続く」

つまりこの妖刀で斬られると、そのまま風の分解効果が体中の至る所で発動するということ。

「があああああ」

悲痛な叫びがこだまする。

「……、こ、この声はベルちゃん」

その叫びに気づいたルツスーリアがその方向へと高速で移動した。
バヴォーネ・デル・セレーノ
晴孔雀と合体しているため、速度は速い。

「敵を目の前にして逃げるとは、見損なつたぞー!!」

バチッ

インドラも雷音と共に姿を消した。

(ベルちゃん、今行くわ)

「そうはさせん、サンダーボルト!!」

ババババババ!!!!

「がああ」

巨大な雷がルツスーリアを貫いた。

シュウウウウ

「あゝ・・・あゝ」
ドサッ

身体が焼け焦げ、そのまま意識を失った。

「ぐああああ」

バシユ

まだ続く嵐の分解効果、もはや待っているのは「死」しかない。その時

「フレイムアロー!!」

ポオオオオオオ

ホルスが炎がやってきた方を見ると、そこには獄寺が立っていた。

「ほう、起きたか」

「まいったなんて、言ってねえぞ」

鋭き眼光は衰えていなかった。

ホルスは鼻で笑うと、獄寺に問い掛けた。

「どうでもいいことだが、なぜ仲間を攻撃した？」

「ハッ、攻撃したんじゃない」

ホルスの表情が変わった。そしてベルの方を見ると、分解効果がなくなっていた。

「なるほど、炎を吹き飛ばしたか」

ホルスは納得すると、再び妖刀に巨大な炎を燈した。

「負けらんねえ、行くぞ瓜、カンピオ・フォルマ形態変化!!!」

「ニャアアアア」
コオオオオオオ

獄寺の武器が変わって行く。

荒々しく吹き荒れる疾風・Gの弓矢！！

「行くぞホルス、赤竜巻の矢！！！」
トルネード・フレイムアロー

「妖道斬月破！！」

ドギャギャギャギャ

二人の炎が激突しあう。

「ほう、妖道斬月破と対等か」

対等でなお、余裕を見せるホルス。
しかし、獄寺も笑みを見せた。

「これが本気なんて言ってねえ」

ギリギリギリギリギリ

赤竜巻の矢を放ち、再び力を蓄えていたのだ。

「喰らえ、追撃のトルネード・フレイムアローダンスング」

標的49 獄寺隼人 VS ホルス

4つの赤竜巻の矢がホルスを襲う。
トルネード・フレイムアロー

ガガガガガガガガ！

しかしホルスはすべてのトルネード・フレイムアローを防いでいた。

「うおおおおお、紅龍破「しゅうりゅうは………！！」

ドゴオオオオン！！

ホルスは渾身の力ですべての赤竜巻の矢を消し去った。
トルネード・フレイムアロー

「出やがったな、嵐属性の龍・嵐龍ドラゴナー・テンベスタ」

「私にソウルフレイムを使わせたのだ、その実力は評価に値する」

獄寺はホルスの言葉を踏むように

「まだ本気じゃねえ、評価すんのはこれからだ、行くぞ」

コオオオオオオ

ボウッ

突然獄寺の嵐のボンゴレリングが強大な光を放った。

「これが真のボンゴレリングの力だ」

「くっ、炎圧がさつきとは桁違いだ」

「オレの覚悟を甘く見んじゃねえ」

「よかるう、最高の力で迎え撃つ、紅龍破――――！！！！」

「フレイムバースト――――！！！！」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
ン！！！！！！

砂煙が収まった後、獄寺とホルスは二人共無事だった。

「ちっ」

「紅龍破を相殺するほどの力、認めざるを得んな、決着といきたい
のだが……時間切れだ」

ホルスの言葉にまさかと思った時にはもう遅かった。

「 IPPUNKEICA、BONGOLFAMIIRI SASAGAWARIOUHEI、LUT

スーリア、ベルフェゴール、セントウフノウ、フィルマーレファミ
リーリベル、セントウフノウ、ヨッテ1ゾクセイセントウフノウノ
タメ、フィルマーレファミリーノシヨウリデス」

「くっ、負け・・・かよ」

「貴様とはいつか決着だな、さらばだ」

帰還した獄寺達にみんなが駆け寄る。

「お兄ちゃん、しっかりして」

特に京子は泣きながら了平にすがりつく。

「すみません10代目、勝つことができず」

「そんなことはいいよ、それより無事でよかった」

ツナは安心すると、4人全員を医務室に送った。

「今回は我々の勝ちだな」

再びモニターにウィンディが写し出された。

「もうやめてくれ、こんな無意味な戦い」

ツナはもう限界だった。これ以上は仲間の傷つくところを見たくなくな
った。

「ならば世界を砕くまで」

ウィンディの反応は冷たかった。

バキッ！

突然ツナは頬を殴られた。いきなりでわけがわからず、その方向を見るとリボーンが立っていた。

「仲間を守るために戦う、それがお前の使命だろ、お前がしっかりしなきゃ、こいつらはどうしたらいいかわからなくなるだろ」

「それでもやりたくねえなら、勝手にしてやがれ」
今度はXANXUSが銃口を向けてきた。

納得できない部分が多いけれど、しかたなかった。リボーンとXANXUSの言う通りだった。

「わかった、やるよ」

決意再び、3回戦へ！！！！

標的50 ウィンディの能力

1勝1敗で迎えた第3回戦。次の戦いで流れが向き始める重要な戦いとなる。

「さあ、次のチヨイスを始めよう」

再びジャイロルーレットが現れる。

「「チヨイス!!!」」

ガラララララ ピタッ

「次の戦いは・・・チヨイスだ」

「チヨイスってまさか」

「そう、お前達が未来で白蘭と戦った時のやつだ」

「あ、あいつ、なぜ白蘭のことまで」

「お前一体何者だ？」

謎ばかりのウィンディにリボンが聞いた。

「ふっ、私はただの人間ではなかったのだ」

「意味がわかんねーぞ」

リポーンが言うのももつともだった。そこにいた全員はウィンディの言っていることは意味不明であった。

「私はボンゴレ？世に零地点突破で眠らされていた時、少しの間だけ意識があつた、その時にできたのが自由自在の『幽体離脱』だったのだ」

「自由自在の・・・幽体離脱？」

「そう、私は眠らされてから長い間地上をさまよつた、復活した時すべての復讐を果たすために、そして沢田綱吉達に出会つた。六道骸との戦い、ボンゴレ独立暗殺部隊・ヴァリアーとのリング争奪戦、そして未来での戦い、私は常にお前達のそばにいたのだ」

ウィンディの言つた言葉が事実なら、すべての辻妻があつことになる。リングからの死ぬ気の炎、匣兵器、チヨイスと白蘭の存在のこと。

「それで白蘭やチヨイスのことまで知つてたわけか」

「そつだ、さらにもうひとつ、時渡りの能力もあつたのだ」

「時渡り？」

「時空を越えることだ、私は未来を変える前の10年間を辿つてみた、初めは沢田綱吉と共に10年後の世界へ飛んだ、しかしそこにはボンゴレファミリーは壊滅していた、私はその理由を知るべく時渡りの能力で一人でその10年間を見てきたのだ」

「そ、そんなことが・・・」

あまりの能力のすごさにみんなは言葉が出ない。

「貴様らにもその時の映像ヒジヨシを見せてやろう」

突然モニターが光出し、ツナ達全員を吸い込んだ。そしてみんなが目を開けると真っ暗な空間にいた。

「ここは?」

「あれ、私医療室にいたのに」

「きよ、京子ちゃん」

医療室で了平の看病をしていたはずの京子もいた。

「我が力でお前達を私の世界へ案内しただけだ」

ウィンディの声のみが聞こえてくる不気味な空間。

とりあえず危険がないようにツナは京子とハルの側に駆け寄った。

「さあ見せてやろう、私の能力を、そしてあの時の未来を」

標的51 〈あの時の未来編〉

新たな戦い〈^{ハイパー}超チヨイス編〉は新たな戦い〈あの時の未来編〉へと続く。

ついに発覚したウィンディの能力、「自由自在の幽体離脱」、「時渡り」。ウィンディはこの能力を使い、400年間魂のみで地上をさまよっていた。すべてはボンゴレへの復習のために・・・

そしてついにボンゴレ？世の子孫・沢田綱吉に出会った。常に共に行動することでさまざまな情報を得た。チヨイスや白蘭を知っていたのもこのためである。

そしてウィンディはボンゴレ壊滅の原因を知るために「時渡り」でさまざまな出来事を目にしてきた。

10年間で起こった出来事の一部を、ボンゴレ側に映像として見せようとしていた・・・

標的52 祝勝会

突然辺りが明るくなってきた。

「なっ、これって」

ツナ達が見ている光景はヴァリアーとのリング争奪戦が無事終わった次の日、山本の家で祝勝会をあげている光景だった。

「どうなってんだこりゃ」

「あそこにいんのオレ達だよな」

「その通りだ」

再び聞こえるウィンディの声。

「今お前達に見えているのは私の時渡りの能力で見たものと同じものだ」

確かにツナ達は祝勝会をあげた。だがウィンディはこんなものを見せてどうするつもりなのかみんなはまったく検討がつかなかった。とりあえずどうしようもなかったのでおとなしくみんなはその光景を見ていた。

表向きにはランボの退院祝いとなっている祝勝会。もちろん京子達も一緒である。みんなが賑やかに盛り上がる中、ツナはどこか元氣

が無かった。気になった獄寺がツナに話しかける。

「どうしました10代目……ご気分でも？」

「えっ？いやっ、何でもないよ！……ただ……」

うつむくツナ。

「一緒に戦ってくれた……雲雀さんや骸……クローム達も呼べたらなって。まあ無理だろうけどね」

「なっ……！いいですよあんな奴ら」

「でも、あいつらも仲間なんだろう？」

山本は獄寺の肩に軽く手を置いた。

「仲間って……雲雀が聞いたら咬み殺されるぞてめえ」

「あははっ、かもな」

「かもなって……この野球バカ」

ハアとため息をつく獄寺。やはりこの男といると疲れる。

「ツナが仲間って言ったら仲間なんじゃね？ボスはツナなんだしな」

いつもの笑顔で山本が言った。ふてくされる獄寺。

「呼ぶのは無理でも、寿司は持ってけるかもな」

ツナの頭をぐしゃぐしゃにして、山本が言った。

「山本！」

ツナはそつと獄寺の顔を覗きこんだ。

「じっ……獄寺君……」

「10代目がそこまで言うんですたら……」

しぶしぶ納得する獄寺に満面の笑みでツナは答えた。

「ありがとう、獄寺君」

「よっしゃ、じゃあオレが握ってやるよ」

腕捲りをし、にこつと微笑む山本。その笑顔にほつとしたツナもつられて笑う。

「じゃっ、じゃあオレが届けるよ。リポーン、お前も行ってくれる
だろ？」

「ちょっとビビってんだろ？ツナ」

リポーンは帽子をかぶり直し、ひょこつとツナの肩に乗った。

「ビッ……ビビってなんか……」

慌てるツナ。やはり雲雀や黒曜メンバーに少しビビっているらしい。

「まあいいけどな」

「よかった・・・」

安堵の溜め息をもらすツナ。数分後、山本が寿司を作り終えた。

「っしゃ出来上がり！はいよ、もってけツナ」

ツナは木の桶を受け取った。ほんのり薫る木と酢の匂い。ツナは嬉しそくに微笑んだ。

「じゃっ・・・じゃあ行つてきます」

そう言つてツナは山本の家を出た。

標的53 雲雀恭弥へ

「まずは雲雀か？」

「うっ・・・うん・・・雲雀さん、学校に・・・居るよね？」

「まああいつのことだ、応接室にいんだろ？」

「緊張するなあ・・・」

少しずつ青ざめるツナ。

「情けねえな・・・やめるか？」

「やっ、やめないけど・・・」

そんなことを話しながら、並盛中の応接室の前に二人は来た。

「失礼します・・・」

そっとドアを開けようと、押そうとするが、ツナが力を入れる前にドア開き、ツナはバランスを崩した。

「あっ・・・!!」

（転ぶ!!）

そう思い、ツナが目を閉じた瞬間だった。

「ひ…雲雀さん!!」

雲雀の腕にすっぱりはまるツナ。雲雀は少し驚いた表情になるが、すぐに顔をしかめると、ツナをトンファーではじき飛ばした。

「何の用？」

今ので機嫌が悪くなったのか、声が少し重い。

「あつ…寿司ッ!!」

雲雀の足元にはひっくり返った桶が落ちていた。ツナは慌てて桶を元に戻すと、そつと中を確認した。

「あつ…」

山本が握った寿司は見るも無残に潰れていた。

「きつ…昨日のリング争奪戦のお礼に、お寿司持ってきたんですけど…潰れちゃ」

ツナが言い終わるより先に、雲雀はそつと桶に手を伸ばし、潰れたかんぱちを取って口に運んだ。

「君たちに感謝される覚えはないけど、寿司は好きだからね」

「雲雀さん…ありがとっござ…ッ!!ギヤッ!!」

雲雀は寿司を片手にトンファーでツナを殴った。

「感謝される覚えはないって言ったよね・・・それ以上言つと咬み殺すよ」

（もう咬み殺されてますけど・・・）

心の中でそう呟きながら、ツナは床で伸びていた。

「ったく、情けねえなツナ。昨日XANXUSに勝ったのが不思議だな」

「うるさいなあ・・・」

「やあ、赤ん坊」

「おう雲雀、まあその寿司食って体力回復してくれよな」

「回復したら僕と遊んでくれないかい？赤ん坊」

指についた米粒をペロツと舐め、恐ろしいほど無邪気な笑顔でリボーンを見つめる雲雀。おもわずツナの足がすくんだ。

「まあ、いいだろう」

「えっ？リボーン、来てくれないの？」

「オレは雲雀と遊んでるからな、黒曜は1人で行ってこい」

「んなあッ!? ちょっと待ってよりボーン」

「行くか、雲雀」

ツナ完全無視で、二人はどこかへ行ってしまった。

標的54 黒曜へ

「まったく、リボーンの奴……」

ツナは少し膨れながらも一つの桶を片手に、一人で黒曜ランドへ向かった。

「やっぱ1人やだなあ……あいつら怖いんだもん!! ああああどうしよう……1回戻って誰かと一緒に……」

ツナがその場を行ったり来たりしていると、後ろから小さな声が出た。

「ボス……?」

温泉セットを抱えたクロームだった。髪が濡れているので風呂帰りだろう。

「クローム?」

「どうしたのボス?」

「あつ、実はお礼がしたくて……」

ツナは寿司の入った桶を差し出した。

「寿司、持ってきたんだ」

「お寿司……?」

「うん・・・一緒に戦ってくれたから・・・」

クロームに寿司を渡そうとするが、両手がふさがっている。二人は少し戸惑ったが、ツナは微笑むと、クロームの横を歩き出した。

「そっいえば骸・・・大丈夫？」

「うん、今は疲れて眠ってるみたい・・・」

「よかった・・・クロームと骸は話せるの？」

頷くクローム。

「じゃあ・・・骸が起きたら、言っというてよ」

「・・・・・・？」

「一緒に戦ってくれて、ありがとうって」

クロームは少し嬉しそうに頷いた。

「んあ？クロームの隣にいんの誰らびよん？」

黒曜ランドの廃墟の窓から二人を見下ろす犬と千種。

「あれは・・・」

「ボンゴレええっ」

「なんでこんなところに……」

「ムキイイイイイイイイイ……！！！！！！バカ面が二人並ぶとなんかもう余計に腹立つびょん、何しに来たびょん！」

「それ嫉妬じゃない？」

「なっ……ぶ……ぶっ飛ばすぞメガネッ！」

犬は二人が中に入ってくるのを確認すると、犬歯のするどい上歯の形をしたパーツを取りだし、慣れた手つきで自分の歯に重ね合わせた。

「チーターチャンネルッ！」

そう叫ぶと犬は部屋を勢いよく飛び出した。

「めんどい……」

ずれた眼鏡をかけ直し、ゆっくりと千種は犬の後を追った。

標的55 六道骸へ

「ぬああにしに来たびよんボンゴレえ」

「ひいつ！！でっ・・・出たああッ！！」

ツナは慌てて持っていた寿司の桶で顔を隠す。犬はきよとんとその桶を見つめると、匂いを嗅いだ。

「犬、駄目だよまだ食べちゃ・・・」

「なんらこれ？」

「いつ・・・一緒に戦ってくれたお礼に寿司、持ってきたんだ」

苦笑いでツナが寿司を差し出す。

「お前の持ってきたもんなんか食べつか」

「犬」

「んべえく、さっさと帰るびよん」

犬はだらんと長い舌を口からのぞかせる。すると後ろから千種も現れた。

「何してるの？」

「ボスが昨日のお礼にお寿司を・・・」

「お礼って・・・別に何にもしてないけど」

ため息混じりに重たい口を開く千種。

「一緒に戦ってくれたじゃん・・・クローム達も、骸も」

「そーゆーのがムカつくびょん、キモいつつの」

「まあまあ、犬、千種、そんなこと言わずに・・・いただきなさい、そのお寿司」

突然クロームの口調が変わった。

「えっ・・・？」

「骸さん!!」

「どうも、ボンゴレ10代目・沢田綱吉」

「お前・・・大丈夫なのか」

いつもなら大声で出たーとか叫ぶはずなのになぜか冷静でいられた。

「少々疲れてますからね、あまり長時間こちらに居ることはできませんが」

「お前・・・」

ツナはリング争奪戦で見た骸の記憶を思い出していた。骸は犬や千種を逃がし囿になり、暗い牢獄で捕まっていることを。

『同情すんなよ。』

あの時のリボーンの手紙が頭の中でこだまする。ツナは息をのむと、顔をあげた。

「骸・・・あのっ・・・あのさ、一緒に戦ってくれて・・・
ありがとう」

「ふっ、まったく、君は物好きにもほどがありますよ」

骸は微笑むと、ふらっと体勢を崩し、壁にもたれこんだ。

「そろそろ限界みたいですね、犬、千種、私の分までお寿司、食べ
といて下さいね・・・クロームにもちゃんと」

そう言いかけると、骸はいなくなった。

「まったく・・・」

犬はため息をもらすと、クロームを抱き抱えた。

「寿司・・・ありがとびよん」

「ありがたく食べておくよ」

「えっ！……あっ……うっ、うん」

少し驚いた様子だったが、嬉しそうにツナは返事をした。千種に寿司を渡すと、3人は階段を登っていった。

「ただいまぁ……」

疲れ気味にツナは家に帰った。

「遅かったなツナ」

リボーンがひょこつと顔を出した。

「裏切り者ぁ……なんかすごい疲れたし……」

「で、どうだった？寿司もらってくれたか？」

「うん、骸とも話せたし、行ってよかったよ」

「雲雀もよろこんで寿司食ってたぞ」

「よかったぁ……ふぁあっ……」

大きなあくびをするツナにリボーンは微笑んだ。

（ツナ、お前のその優しさに仲間は惹かれてついてきてんだ。確かにお前はXANXUSに力では劣っていたかもしれないねえ、でもな、仲間を信じる気持ちはお前の方が上だった、だから勝てた。9代目がお前を選んだ最大の理由は、お前のその大空のように広い心だ。その笑顔を忘れんな、お前の一番大切なものを）

そしてここからが未来戦の、激闘の幕開けだった！！

標的56 獄寺隼人の過去

「てんめえ、こんなもん見せてどういうつもりだ」

再び辺りが真つ暗になり、獄寺が叫んだ。

「ふっ、これが新たななる戦いの幕開けだったのだろう」

そこから少し沈黙が入り、ウィンディの声が聞こえた。

「獄寺隼人、貴様にも悲しい過去があったな、私にとってはおもしろかったが」

「なっ」

その言葉に動揺する獄寺。

「笹川京子や三浦ハル、ヴァリアー達はこのことを知らないだろう、今からその映像を・・・」

「やめろ!」

ウィンディの言葉をさえぎるように叫んだ。

「ふっ、もう遅い」

また辺りが明るくなった。見えてきたのは未来での光景。獄寺の誕生日を祝おうとした時の光景だった。

「獄寺君、明日誕生日だよね?みんなでお祝いしようって話してた

「ただけど・・・明日、予定ある？」

「すみません、明日はちよつと・・・」

ツナは獄寺の事だから自分の誕生日を祝うなんて言われれば「10代目くオレ、幸せツス！」とか言つて泣いて喜ぶんじゃないかと想像していただけに、余りにも逆な反応に驚いた。

「あ、そうなんだ・・・。予定があるなら仕方ないよね、じゃあ日を改めて

「10代目」

ツナが言い切る前に、獄寺がそれを遮る様に言葉を発した。

「申し訳ありません、10代目。オレは、誕生日は祝わないと決めています。せつかくのご厚意を無下にしてしまい本当にすみません」

そう言つて深々と頭を下げると、獄寺は修行へ行つてしまった。

一方的に言われ、ツナはキョトンとしてその場に立ち尽くしていた。その一部始終を見ていた山本がツナに寄つて来た。

「獄寺、なんか様子変じゃなかったか？ツナの誘い断るなんてありえねーのな」

ハッと我に返つたツナが、山本を見上げ頷いた。

「山本・・・そういえばここ何日か、獄寺君元気なかつたよね・・・」

二人は先程出てつてしまい、今は誰もいない扉をを見つめていた。

「う、獄寺君のお母さんが殺された!？」

最近の獄寺の反応が気になったツナは、リボンとビアンキが話していたのを聞き、ビアンキと京子、ハルがお風呂へ行ったのを機に、問いかけた。そして・・・驚愕の事実を聞くことになる。

「獄寺はビアンキとは違う母親から生まれたんだ。だがマフィア界では愛人の子供は認められねえんだ。獄寺は父親と本妻の子供として発表され、育てられた。本当の母親は獄寺の3才の誕生日の5日後、獄寺に会いに行く途中に事故で死んだ。自殺の線も疑われたが、獄寺に渡すプレゼントを持っていた事、ブレイキ痕がない事を見ると・・・父親の組織に消されたと言う噂だ」

「そんな・・・なんだよ、それっ！」

ツナは歯を噛み締め、獄寺にそんな過去があつたなんて・・・と眉をしかめた。

「だからアイツ・・・ドロドロのグチャグチャって言ったのか」

起きた山本も、その話を聞いてぽつりと呟いた。

「それで誕生日を祝いたくないのかな、オレ修行終わったら獄寺のところに行ってみるよ」

「オレも一緒に行くぜ！」

二人のやり取りを見てリボンはため息をつき、そのままどこかへ身を隠した。

標的57 隼人とラヴィーナ

「あなた！聞いて、実は私・・・子供ができたの！」

腰まで伸びた美しい銀色の髪を揺らし、満面の笑みでその美しい女性性は男にそう言った。

「こ・・・子供・・・？」

男は血相を変えると彼女の肩を掴み、悲しき事実を伝えた。

「マファイア界で・・・マファイア界で・・・妻以外の女との子は認められないのだ・・・」

男はその場に崩れ落ち、地面に額を擦り付けた。

「すまないっ・・・」

「この子を・・・生んではいけないのですか・・・？」

彼女の声は微かに震えていた。沈黙が続く。男はやっと重い口を開いた。

「1つだけこの子を生める方法があるのだが・・・」

10分ほど話を聞いた。

「わかりました・・・必ずこの子を大事にすると、約束して下さいますか・・・？」

「もちろんだ……」

「それと……名前は私に決めさせて下さい……この子の名前は……」

数ヶ月後、ファミリーのボスと妻の間に、新しい子供が生まれたという発表がされた。

名前はハヤト。

なぜ日本人の名前なのかと尋ねる者もいたが、ボスはいつも曖昧な言葉を返すだけだった。

そして、時は流れた。

部屋に響くピアノの音。その音はまだ安定しないながらも、力強く、繊細で美しかった。

「また上手になってるわね」

そつとドアを開け、入ってきたのは、いつも彼が心待にしていたあの女性だった。年に3回遊びに来てくれる人。

「お姉さん、また来てくれたんだね」

「勿論よ、約束……したでしょう？」

彼女は小指を出すと、しゃがみこみ、大きなピアノの前に座る。そして小さな少年に優しく微笑んだ。

「ハヤト、今練習してた曲は？」

「今度僕の誕生日パーティーで弾く曲なんだ……この曲は好きだけど、難しくって……」

「私も昔弾いたわ」

少し下を向いてうつむくハヤトを彼女はそっと撫でた。

「大丈夫よ、だってあなたは……」

（だってあなたは私の息子だもの……）

彼女は唇を噛みしめ、今にも流れそうになる涙を必死にこらえた。

「お姉さん……？」

ハヤトは小さな手で、そっと彼女の目に溜まった涙を拭き取った。

「悲しいことがあっても、泣いちゃダメだよ？僕、笑ってるお姉さんが大好きなんだ」

ハヤトがニッと笑って見せると、彼女はおもわずハヤトを抱き締めた。

「そうだ、悲しい時はね、ピアノを弾くんだよ」

彼女が顔をあげると、ハヤトはそっと彼女の手をとり鍵盤に触れさ

せた。部屋に静かに響く調律されたピアノの音。

「綺麗な音でしょ？お姉さんはこんな綺麗な手を持つてるんだ、きつともつと綺麗な音でピアノが弾けるよ」

ハヤトはひょこつと椅子の左側に座ると自分の横に座れと、椅子を軽く叩いた。

「一緒に弾ごうよ」

始まる小さな演奏会。部屋に響き渡る澄んだピアノの音。明るく楽しい笑い声はまるで歌のようにピアノと共に響いていた。

「お姉さん！凄いよ、凄いピアノ上手だね！」

少し息を切らし、興奮に頬を赤く染めながらハヤトが彼女の手をとった。

「ハヤトの方が上手よ？弾けたじゃない、誕生日パーティーの曲」

「・・・そうだった！誕生日パーティー、お姉さん僕と一緒にこの曲弾ごうよ！」

「えっ？」

「僕、もう一曲弾くから、この曲はお姉さんと一緒に。ねっ？」

ハヤトは微笑んで小指を差し出した。

「約束だよ？」

「・・・うんっ」

結ばれた小さな小指の温もり。そして、そのままハヤトの手を握った。

「綺麗な手、ピアノを弾くには最適よ、いつまでもピアノを弾き続けてね、いつまでも・・・綺麗な心を忘れないで」

一瞬キョトンとしたがすぐに笑顔になり「うんっ」と大きい返事をした。

これが母・ラヴィーナと子・隼人の最後の会話だった。

標的58 ラヴィーナの死

ハヤトの3才の誕生日パーティー当日、彼女が現れることはない。誕生日パーティーが終わる、ハヤトはいつものピアノの前に座っていた。小さな足音がハヤトの方へ近づいてくるのが聞こえた。ハヤトの姉のピアンキだ。

「ピアノ、凄かったねハヤト！2曲目なんかとくに・・・私、感動しちゃ」

ピアンキが言い終わるより先にハヤトは思い切り鍵盤を叩きつけた。

「ハヤト・・・？」

「この曲は完成じゃないんだ・・・お姉さんと一緒に弾かなきゃ完成じゃないんだ！」

ハヤトは部屋を飛び出した。

「約束したのにつ・・・」

階段下ですすり泣くハヤトに、白衣の男が話しかけた。

「ったくうるせえなあ！これだからガキは困るぜえまったく」

「シヤマル・・・」

シヤマルはそつとハヤトの横に座るとハヤトの髪をぐしゃぐしゃにした。

「男が女に泣かさねんな、仕方なかったんだよ。あの美人の姉ちゃんは・・・特にな」

「意味わかんねえよ・・・」

シヤマルは全て知っていた。彼女がハヤトの母親だということ。そして彼女が決してハヤトの誕生日パーティーに來れないことを。ハヤトの誕生日の5日後、彼女が組織の別荘で誕生日祝いにハヤトと密会するという許可が出た。シヤマルが頼んだのだろう。そして頼んだシヤマル本人も思いもしなかつただろう、まさかその日を境に、彼女が二度とハヤトと会うことが出来無くなるということ。そして当日、彼女はあり得ない場所で謎の転落死を遂げた。一切残らなかつたタイヤ痕、そう、その死は故意的な物だつた。

はじめは父親の組織に消されたものだとばかり思っていた。

〓 5年後 〓

8才になつたハヤトが屋敷内をうろついていると、お手伝い達の話し声が聞こえてきた。

「今日で5年目ね」

「なにがですか？」

「ほら、ハヤトぼっちゃまのお母様が亡くなられてからよ」「えっ、ハヤトぼっちゃまって奥様の子じゃなかったの？」

その言葉を聞いて、体が動かなくなった。

「ハヤトぼっちゃまって若いピアニストに産ませた子なのよ」

「オレの母さんて・・・若い・・・ピアニスト・・・あっ」

本当の母親、銀色の髪、ハヤトの頭の中に甦ってきたのは、一緒にピアノを弾いた彼女の姿だった。3才の誕生日以来彼女は現れなくなった。その時、ハヤトの中で全ての辻褄があった。

「・・・あの人がおれの・・・！」

ハヤトは夢中で走り出した。

（あの人が・・・オレの・・・お母さん・・・本当の？）

溢れだす涙を拭おうともせず、ハヤトは屋敷を飛び出した。

標的59 授けられた名前

気がつくとハヤトは彼女が転落死したと思われる崖の下に来ていた。5年も経っている今、その場所は綺麗に整備され、元通りになっていた。ハヤトはその場に座り込んだ。

「おね・・・え・・・さん・・・？」

空は薄暗い雲に覆われ、小雨だった雨はやがて激しく吹き荒れる嵐となった。ハヤトの悲しみをかき消すように。

「お・・・さ・・・お母さん・・・」

「おかあさああああああああん!!!!!!!!!!!!!!!!!!あああああああああ!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

ハヤトは叫んだ。何度も、何度も。

どれくらい時間が経ったのだろう。

雨はすっかり止み、雲の隙間から光が差ししていた。ハヤトはまだその場に座っていた。ふとハヤトが目の中の崖に目をやると、崖の間に汚れた袋が挟まっているのが目に入った。ハヤトはそっとその袋に手を伸ばした。薄い水色の袋に青いリボン、上手く崖の間に挟ま

ついていたのか、その袋は綺麗なままだった。袋を開け、中を見ると、そこには楽譜と一枚の紙が入っていた。

《 H A P P Y B I R T H D A Y 隼人 》

「中国・・・日本語・・・？」

隼人、その字の下に小さく筆記体でHAYATOと書いてあった。

「オレ・・・？」

ハヤトはあわてて中に入っていた楽譜を見た。

「これは・・・」

その楽譜は、ハヤトが誕生日パーティーの日に演奏した曲、彼女と母と初めて共に演奏した曲だった。楽譜は少し日に焼け、黄ばんでおり、記号や下線が所狭しと書き込んであった。

『昔私も弾いたわ。』

あの日の母の言葉が甦る。楽譜の裏には一枚一枚、小さく漢字で”獄寺”と書いてあった。ハヤトはただ一枚だけ筆記体でGOK U D E R Aと書いてある楽譜を見つけた。

「くぐぐぐ・・・はやと・・・」

ハヤトは空を見上げるとそう呟いた。

「オレの名前は・・・獄寺隼人？」

「オレは・・・オレは・・・」

隼人は楽譜を強く抱きしめ、再びその場に泣き崩れた。太陽の光に母の温もりを感じながら。

それから彼は何度も挫折を経験しながらも必死に一人で生きていった。彼女の息子、獄寺隼人として。そのとき彼は思いもしなかっただろう、この先自分が本当に愛する家族が、ファミリーができることを。そして母の死の真実を知ることを・・・

標的60 仲間（ファミリー）

次に日にとりあえずみんなで寿司を作ることにした。京子達がいなくなつたのを確認し、ツナはコーヒを啜りながら山本を横目でチラツと見る。山本はというと、文句を言いながらもちゃんと獄寺が入れてくれた緑茶を美味しそうに飲んでいた。すると、獄寺が口を開いた。

「あの・・・10代目、昨日はすみませんでした。オレ、誕生日にいい思い出がないもので・・・」

「ううん、気にしてないよ、それと…ゴメン。お母さんの事、リボーンに聞いたんだ」

ツナの言葉に、獄寺の体がピクツと震えた。

「そうですか・・・、リボーンさんのおっしゃる通りです、オレのお袋は・・・親父に殺されたんです。オレを・・・生んだせいで・・・」

獄寺の、何とも言えない苦しいような…悲しいような表情と言葉にツナと山本は言葉が出なかつた。

「なので・・・せっかくの10代目からのお誘いをお断りするのには本当に心苦しいのですが・・・オレは、オレが生まれた事を祝つてはいけないんです」

ふっと脳裏に子供の頃の自分が浮かぶ。あの日、待っても待っても

来る事はなかった女性。来るって言ったのに、なんで・・・どうして？具合でも悪くなつたのかな？父親に聞いても、姉に聞いても苦笑いではぐらかされた。幼いながらにそれ以上聞いてはいけなのだと悟った獄寺はそれ以来その人の話をするのを止めた。そしてそれから5年が過ぎ、本当の事を知り、家を飛び出した8才のとき。

あまりにも悲しい言葉を自分に突き刺す獄寺にツナは心が痛んだ。

「あのさ、上手く言えないけど・・・獄寺君のお母さんは君を生んでよかったって思ってたんじゃないかな？」

「ああ、オレもそう思うぜ獄寺」

そう言うツナと山本を、獄寺は静かに見る。

「あの10代目、お聞きしたい事があるんですが・・・お袋がオレを生んでよかったなんて・・・どうしてそう思われるんですか？」

獄寺のその質問にツナは驚いた。いつも、難しい問題をスラスラ解いてしまう獄寺なのに、こんな簡単な事に気付かないのかと・・・。

「オレを生んだせいで・・・ピアノストの夢も断たれ、命まで奪われたんですよ？オレが生まれなければ、あの人は不幸な人生を送らずにすんだはずです・・・オレにはわかりません」

と、そこへ山本が口を開いた。

「獄寺ー、難しく考えんなよ！お袋さんが、わざわざお前ん家まで来たのは何の為だ？お前に会いたかったからだろ？誕生日のプレゼント

ントだつてお前の為にきつと一生懸命選んだはずだぜ？」

山本の知った風な口にムツとした獄寺だが、それ以上にその言葉が胸を締め付けた。

(会いたかった・・・？オレに・・・？)

「・・・うるせー、テメーに言われたくねえんだよ」

そう言い放った声はとても小さく、獄寺はそのまま俯いてしまった。

しばしの沈黙の後、ツナが口を開いた。

「オレはさ・・・オレは君に出会えてよかったと思ってる。君だけじゃない、山本や、お兄さん、ちよつと恐いけど雲雀さんや骸、クローム・・・みんなに出会えて本当に嬉しいんだ。今までずっと一人だったダメなオレにこんないい仲間が出来た。1番最初に友達になってくれたのは君だよ、獄寺君！」

バツと顔をあげツナを見ると、優しく微笑む彼と眼があった。

「君は、オレの事をボンゴレのボスとして慕ってくれてるのかもしれないけど、オレはね、君を1人の友達だと思ってる。お母さんの事も、本当のところはわからないけど・・・山本の言うように嫌ってたら、生まなければよかったと思ってるなら会いにきたりしないんじゃないかな？君のお母さんは、君が大事だったと思うよ・・・オレ達と同じ様に・・・獄寺君？」

獄寺は驚いていた。そんなつもりはなかったのに、いくら抑えよう

としても、次から次へと零れてくる熱い滴。袖でグイグイ拭いても止まらない。

「す、すいません10代目、っ・・・違うんです、ちよっと・・・目にゴミが」

どうにかごまかそうと、必死な獄寺にツナは優しく声をかけた。

「いっぱい泣いていいんだよ。ずっと一人で我慢してきたんだもんでも、これからはオレ達がいる。君は一人でしょい込むクセがあるけど・・・仲間でしょ、少しはオレ達にも頼ってよ」

そう言ったツナは照れ臭そうに頬を赤らめて笑う。同じ様に山本も「だな！」と何時もの笑顔だ。

そんな二人を見て、獄寺はいつの間にか止まった涙を全部拭い、照れ臭そうに笑った。

「10代目、明日のパーティー、キャンセル返上してもいいですか？」
「もちろん！！」

(10代目の言う様に、正直お袋がオレを生んでよかったと思ってくれてるのかわからねえけど・・・オレは今、あなたに生んでくれた事を感謝してる。オレにも、仲間が・・・大切な友達が出来た。誕生日なんて、何の意味も無いと思ってたけど、こんな風に祝ってくれる人がいる。そして、生まれてよかったと思えたのは10代目、あなたのおかげです。オレもあなたをボスとしてでは無く、友達だと心の中では思っているだなんて、やっぱりおこがましくて言えません。10代目、あなたはやはり素晴らしいお方だ。お袋・・・オ

しはあなたの分まで生きる。だからどうか、どうか安らかに・・・)

そして獄寺は、白蘭を倒した後、母の死の真実を知ることになる・・・

標的61 さらなる悲劇

今の光景を見た後、あまりの真実に京子とハルは言葉を失っていた。いつもの激しい性格の中にこのような悲しき過去があるなんて思いもしなかった。

獄寺に少なからず瞳に雫がたまる。

「くっ・・・おふくろ」

「大丈夫です獄寺さん」

ハルはそう言つて獄寺の手を握った。

「今はハルや京子ちゃん、ツナさん達仲間がいます
その言葉に思わずハルを抱きしめてしまった。」

「いいかげんにしろウィンディ!!」

滅多に怒らないツナも限界に近づいていた。

「これこそが真実、次もおもしろい」

ツナの言葉をまるつきり無視して再び光景を映し出す。

時は10年後・・・

「お待たせしました楽々軒です、えっとラーメンと餃子、それからチャーハンですね」

長くキレイなみつあみを垂らし、岡持ち片手にイーピンはその部屋のドアを開けた。

「ああ、いつもありがとうイーピンさん」

「草壁さんもいつもうちの店で注文してくれて、ほんとにありがとうございます」

少し間を置き、うつむき気味にイーピンは呟いた。

「今日は・・・雲雀さんは・・・?」

「今日は仕事で・・・そろそろ帰って来ると思っんですけど・・・すみません」

「い・・・いえ・・・用事とかじゃないんです!少し気になっただけで・・・し・・・失礼します」

顔を真っ赤にし、イーピンが慌てて部屋を飛び出すと、向こうから人影が見えた。

「緑タナビク〜並盛ノ〜・・・」

肩に止まった黄色い鳥が歌うのは並盛中学校歌。向こうから歩いてくるのは紛れも無く、「風紀財団」のトップに立つ、雲雀恭弥だった。

「ひ・・・雲雀さん・・・」

思わず顔が赤くなるイーピン。イーピンに気がついた雲雀は、少し早足になってこちらに向かってきた。

「・・・やっと思つけた」

「えっ？」

イーピンの肩に手を置き、小さく溜息をつく雲雀。

「・・・雲雀・・・さん？」

イーピンの顔の赤らみが頂点に達した時、雲雀は小さな声で呟いた。

「君の師匠が殺された・・・急いで本部に行きなよ」

赤く染まっていた頬は青白くなり、持っていた岡持ちを離し、イーピンはボンゴレアジト本部に急いだ。

床にこぼれたラーメン。器が割れる音が、広い通路に響いた。

「・・・」

「恭さん？」

唇をかみ締め悔しそうな顔をする雲雀。

「白蘭・・・」

手に持っていた資料を握りつぶすと、その場に投げ捨てた。草壁はそれを拾うと、そっと広げ、中を見た。

【死亡者14名、内、風紀財団12名】

「恭さん・・・これは・・・また奴らが・・・？」

「……ああ、ずいぶん僕の町を汚してくれてるみたいだよ……」

雲雀は窓から外を見渡しながらそう言った。

「絶対に……咬み殺す」

標的62 イーピンの決意

「獄寺さん」

アジトに走りこむと、イーピンは目の前獄寺のもとへ駆け寄り、獄寺の肩を強く揺すった。

「師匠は、師匠は死んでませんよね？……師匠は……生きてるんですよね……？」

獄寺はそっとイーピンの手を取ると、首を横に振った。

「し……しよ……」

イーピンはその場に崩れ落ちた。目を見開き、震える手のひらをじっと見つめていた。

「イーピン……」

そっとランボがイーピンの肩に触れるが、イーピンはその手をはじいた。冷たい空気が流れる。イーピンから強く感じる殺気。

「おい、イーピン……？」

山本がそばに近づこうとすると、イーピンがふら付きながら立ち上がった。

「沢田さん……が殺された……リボンが……殺された……師匠が……師匠が……」

イーピンは立ち上がると被っていた楽々軒の帽子を取り、みつあみをほどいた。
目が血走っている。

「びゃくらああああああああああん!!!」

イーピンがそう叫ぶと、周りのものが全て飛び散った。餃子拳だ。獄寺と山本は何とかガードしたが、ランボははじかれ壁に背中を強打した。

「やめるイーピン」

「イーピン」

餃子拳の構えになるイーピンを、慌てて止める三人。しかし、あまりの気の強さに近づけない。

「ああああああああああああああああ

「!!!!!!」

「イーピン!!」

ランボが叫んだ瞬間、ふとイーピンの殺気が消えた。イーピンの手を掴み、立っていたのは雲雀だった。

「やめなよ」

口を小さく開き、唇を震わせながら、イーピンは呟いた。

「……師匠……」

雲雀の顔を見たイーピンはカクンと膝を折り、その場で嗚咽した。似ている、似すぎていたのだ。雲雀とイーピンの師匠は。イーピンはおもわず雲雀に抱きついた。

「……師匠お……」

雲雀はそつとイーピンの頭を撫でると、ゆっくり体を引き離れた。

「僕は君の師匠じゃない……」

雲雀はそつとイーピンの涙を拭いた。

「雲雀……さん」

「……戦うんだ」

「おい、雲雀」

その言葉を獄寺が止める。

「十代目は！この戦いにこいつらを関わらせたくなかったはずだ、お前は十代目の意思を……」

「僕は君達みたいに草食動物の犬じゃないんだ」
「なっ……」

獄寺の動きが止まる。雲雀はイーピンとランボを見た。

「彼らにも・・・成長してもらわないとね」

雲雀はもう一度イーピンのほうを向くと、いつもの鋭い目で言った。

「・・・復讐で戦おうとする奴の末路はもう決まってる、君は復讐の為に戦うんじゃない・・・意味・・・わかるよね？」

イーピンは袖で顔を拭いた。

「はい」

雲雀はそう言うのと帰って行った。イーピンは雲雀が見えなくなるまで、ずっと頭を下げ続けた。

「ありがとうございました・・・」

この日からイーピンはアルバイトの長期休みをとった。仲間を殺した白蘭に復讐するためじゃない。これ以上自分の大切な人をなくさないように。大切な人を守るために、イーピンは再び殺し屋に戻る。師匠が始めて私に教えてくれたこと。雲雀さんは師匠に似ているのは顔だけじゃなかったようだ。

私が戦うとき、それは誰かを守るとき

私が・・・死ぬとき、それは誰かを守った時。

師匠、待っていて下さい・・・

標的63 XANXUSとスクアーロ

「イーピンが・・・」

「マジかよ・・・」

あまりの驚愕な事実につなも山本も言葉を失った。

「どうだった、イーピンの味わった悲しみは」

もはや残忍や鬼というレベルではなかった。ウィンディは悪魔同然だった。

「ウィンディ!!!」

叫んだツナの拳がグツと強く握られる。

(くくく、いいぞ、まだまだ憎しみの心を増大させる)

「次はお前達にとってはなんともないが・・・スクアーロにとっては悔しい思い出だな」

「なんだとお」

名前を呼ばれたことに反応した。

(沢田綱吉、このようなことを続ければさすがの貴様も・・・)

沢田綱吉が死んだ。その情報がヴァリアーにもたらされた時、何人

かは驚愕した。

「沢田が死んだあ、てめえふざけてんじゃあねえぞおおおー!!」
スクアーロの叫びが建物内にこだまする。

「ひっ、ほ、本当です」

情報を伝えにきたヴァリアー隊はビビッていた。

「くっ、じゃあボンゴレ10代目はどおすんだあああ」

(オレはこんなボンゴレを守りたかったわけじゃあねえ・・・XANXUS・・・)

「18年前・イタリア」

そこでは年に数回開かれる、ボンゴレ関係者のパーティーが行われていた。にぎやかに響き渡る笑い声、そんなパーティーをいやそうに仏頂面で歩く1人の少年がいた。彼の名前はスクアーロ。ここらじゃ少し有名な最強少年剣士、ボンゴレヴァリアー次期ボス候補。マフィアのパーティー、きっと強い奴がわんさかといっているのではないかと思い、少し楽しみに来ていたスクアーロは、この陽気な空気に腹がたっていた。

「ちっ・・・つまんねえとこに来ちまったなあ・・・」

スクアーロは近くの食事を無造作に取り口に詰め込んだ。その時だった。この陽気な空気の中、スクアーロが少しの殺気を感じたのは慌て辺りを見渡すスクアーロ。

すると、人混みに紛れ、自分と同じように不機嫌そうに歩くスクア

一口より少し年上の少年が目に入った。ボンゴレ9代目ボスの息子、XANXUSだ。スクアーロはじっとXANXUSを見つめた。すると、それに気付いたのか、XANXUSが振り向いた。そして・
・目があつた。

スクアーロはその瞬間自分の足がすくむのがわかった。握った手に感じる汗の湿り気、震える体。スクアーロは一目で悟った、自分はXANXUSには敵わないと。そしてスクアーロは決めた、これからはXANXUSについていこうと。そう決めた時にはもう、彼は人混みをかき分け、XANXUSの目の前に立っていた。

「うゝおゝおい・・・」

「・・・・・・・・？」

XANXUSは顔をしかめる。

「オレのボスになれ、一生ついていく」

沈黙が続く。

「オレがお前のボスだあ・・・？」

XANXUSは不敵な笑顔を浮かべ、口元からは白い歯をみせた。

「ぶははははッ」

XANXUSは腹をかかえて笑いだした。

「何がおかしい！！オレは本気だぞおお！！」

「オレがボスになるなんざ当たり前のことだカス」

荒々しい声を張り上げ、叫ぶXANXUS。静まり返る会場。

「お前だけじゃねえ・・・オレはここにいる全員のボスになんだよ！！ボンゴレ10代目になア！！」

スクアードは言葉を失ったと同時に全身に激しい震えを感じた。

「やはりお前は本物だあ・・・！！」

スクアードが満面の笑みでXANXUSを見た瞬間、XANXUSは手に持っていたワイングラスをスクアードの脳天に叩きつけた。

「ドカスが」

そう言うと、XANXUSは歩き出してしまった。

「・・・・・・・・・・！！うううう　おい！！何しやがる！！おい！！待てえ！！ううう　おおおい！！！！！！！！！！」

標的64 スクアーロの誓い

それから半年がたった。スクアーロがヴァリアーのボスになることが明確となってきたころだった。ある人の男がヴァリアーに入団した。XANXUSだった。XANXUSはヴァリアーでも圧倒的な強さを誇り、すぐにスクアーロを追い越し、ヴァリアーのボスになってしまった。

「うゝお おい、お前、何でヴァリアーに……!？」

XANXUSは握った拳を壁に叩きつけ、舌打ちをした。

「復讐だ……あの老いぼれに復讐するためだ……」

「復讐……?」

「オレはこれからボンゴレを手に入れる」

「いいぞお……オレはお前に従うだけだあ」

数ヶ月後、剣帝に挑み、方腕を無くし帰ってきたスクアーロは、剣帝を倒した達成感、満足感からか、微笑みながらXANXUSに話かけた。

「うゝお おい、XANXUS!!誓ってやるぜ」

「……?」

「オレは例の計画が成就されるまで髪は切らねえ」

「あゝ？」

不愉快そうにXANXUSが答える。

「オレの願掛けだ、お前も誓え、髪は切るな」

「はんつ、くだらねえ・・・剣帝に使い物にならなくされたその手で、役に立てるのか？」

「うゝおゝおい、勘違いすんなよ、オレは左手を持たない剣帝の技を理解するためにこの手を落としたんだ」

スクアールは包帯に巻かれたその手をXANXUSに見せつけた。

「これがオレのお前とやっていくための覚悟だ」

沈黙、お互いにらみ合う二人。

「まあ見てろ御曹司」

スクアールはふと目線をそらし、顔を下げると、XANXUSの肩に軽く手を置いた。

「これから先、お前はオレを仲間にしたことに感謝する日が必ず来る」

そんな一方的な約束から3日後。

「目障りだ・・・」

XANXUSはそつと自分の前髪をつまんだ。

『お前も誓え、髪は切るな』

頭によみがえるスクアーロの言葉。

「ちっ・・・」

髪をかきあげ、鏡の前を立ち去った。

「ボス・・・？」

「前髪気になつたらすぐその場で切るのに・・・」

ひょこつと顔を出したベルと、その腕にすっぽりはまったマーモン。

「まさかっ・・・恋かしらあゝ」

両手を合わせ、楽しそうに話しかけるのはルツスーリア。そんなルツスーリアを後ろから静かに睨み付けるレヴィ。

「なっ何よレヴィ・・・ボスだって恋くらい・・・」

「なんだあてめえら、こんなとこに固まって」

マーモンがボスが前髪を切らないと話すと、スクアアローは満面の笑みを浮かべ、

鼻で笑い、XANXUSのところへ向かった。

「なんなのよ・・・？」

「ううお おいボスさんよお、ちゃんと髪の毛切らないでいるみてえだな？お前がオレの言うこと聞くなんざ初めての・・・」

スクアアローがそう言いかけた瞬間、XANXUSはハサミで思い切り前髪を切った。

「あ？」

「あ あっ！！お前、願掛け」

「知るかカス、オレは切る。伸ばしたかったらてめえの勝手にしろ」

そう言うとハサミをスクアアローに投げた。

スクアアローはサツとよけるが、立て続けにグラスが飛んで来て、顔面で砕けた。

「ううお おい！！！！て・・・めツ・・・あ・・・っ・・・」

XANXUSが髪を切らないと思い少し喜んだ自分に、そんな喜びを一瞬にして碎き、顔面にハサミとグラスを投げたXANXUSに、情けなさ、いらだち、感情が混ざり合い、結果、スクアーロは深いため息しか出なかった。

「オレは伸ばすからなあ・・・絶対・・・ぜつつてええええに！！！！！！」

「うゝお おおおおい！！！！！！！！！！」

スクアーロの虚しい叫び声は、屋敷中に響き渡った。

沢田綱吉が死んだ。これでボス候補はXANXUSのみだった。しかし、嬉しくともなるともなかった。

XANXUSはそれから一度スクアーロと共に日本へ向かった。

標的65 沢田綱吉の死

「まあどうってことなかったらう」

「てめえ」

スクアーロは目の前にいない相手をにらみつけた。

「カスが、くだらねえこと思い出させやがって」

コオオオオオオ　ボオツ

XANXUSが暗闇に向かって憤怒の炎を放った。
しかし、何も起こらなかった。

「次は真実を知らない者には悲しい映像ヒジヨンかもしれんな」
「い、一体何を見せるつもりだ」

「それは見てのお楽しみだ」

(十代目・・・)

棺桶の中には白い花に囲まれ、ボンゴレ10代目ボス、沢田綱吉が眠っていた。獄寺はそつとツナの頬に触れる。伝わって来ない体温、獄寺は崩れ落ちるようにその場にしゃがこむところえていた涙を一気に流した。声はなかった。なにも言わず、山本はそつと獄寺の肩に手を置き、座り込むと静かに涙を流した。

「オレが・・・オレがついていなかったせいで・・・十代目は・・・」

「お前だけのせいじゃない・・・それに・・・これは」

「これは草食動物が自ら下した選択だ・・・君達が今泣き叫んだって草食動物が帰ってくるわけじゃないだろう？君達には・・・やることがあるんじゃないの？」

雲雀はそう言うのとツナの棺桶の中にそつと一輪の紫の花を添えた。雲属性の炎と同じ色の花を。決して群れる事無く、しかし白い花の山の中にそつと置かれたその花はとても美しくその中に混じっていた。

「僕は行くよ・・・」やること「があるからね」

そつといい残すと雲雀は去ってしまった。彼は知っていたからだ、ツナは本当は死んでいないことを・・・そしてこのことは3人の約束で他の守護者には言わないと・・・

「あいつ・・・」

「獄寺 山本・・・そろそろ時間だ、棺桶を閉める」

了平は二人の肩を軽く叩き微笑をうかべると、ツナの前に片膝をついた。

「京子が部屋にこもってしまっただ・・・少し遅れてしまった」

了平はそつとツナの亜麻色の髪の毛をなでた。

「お前は立派なボスだった・・・沢田・・・」

棺桶が少しずつし閉まっっていく。

腫れ上がった目からこぼれそうになる涙を必死にこらえ、目をそらすことなく獄寺と山本は閉じていく棺桶の中のツナの顔を見つめ続けていた。

時は少し遡る。

この世界ではボンゴレのボスとしての道を歩んでいた10年後の沢田綱吉。この頃は何も起きていなかったため、アジトで守護者と共に暮らしていた。

しかし、それを破るかのごとく、マフィアの急襲があった。

襲ってきたマフィア、名をミルフィオーレファミリーといい、リングと匣を多数使用してくるうえに、ボンゴレリングを持っていなかったツナ達は次々と追い詰められていった。

そして本部が陥落した時に、ミルフィオーレが交渉の席を用意したとの連絡が入った。

「行ってくる」

「危険です10代目、オレ達も一緒に・・・」

あちらが一人で来いという条件だったため、獄寺の制止も聞かずに行こうとしていた。

「大丈夫だから」

ニツコリと微笑むツナに獄寺と山本は何も言えなかった。

そしてツナはミルフィオーレの交渉の席に1人で行ってしまった。

ツナが入っていったのは大きくて立派な建物だった。

そして建物の近くの林に獄寺と山本が隠れていた。やはりツナのこととが心配でしかたなかったのだ。

そしてその時

パン

「!!」

突然銃声が鳴り響いた。

「まさか、10代目」

最悪の想像が2人の脳裏をよぎった。

「止める獄寺!!」

獄寺は林を飛び出し、ミルフィオーレ達を次々倒していき、ある部屋へとたどり着いた。

そこには床に倒れているツナとミルフィオーレ6弔花・入江正一がただ1人いた。

「ボンゴレの嵐の守護者か、ボンゴレX世は死んだぞ」

その言葉に獄寺の我慢は限界を超えた。

「てめええええ」

武器を構える獄寺だったが、突然辺りを霧が包み始めた。

「残念だが、お前と遊んでいる暇はない」

メガネをクイツと上げ、冷たい表情で見下す入江正一。

「待ちやがれ！！」

獄寺の説得もむなしく、ミルフィオーレは霧の中に消えた。どうやらミルフィオーレ部隊も建物も6甲花達も構築された幻覚だったらしい。

そしてそこにちょうど現れた山本も、その光景を見て愕然となった。

「ツナ」

「くしょお、ちくしょおおおおおおお！！！！」

地面を何度も殴る獄寺、やがてそれは止まり、ポツポツと降ってきた雨が山本と獄寺、そして・・・ツナの体を濡らしていった。

標的66 獄寺隼人と山本武

「獄寺、戻るぞ・・・」

もう人は残っていないかった。とはいっても、ボンゴレ守護者と関係者の少人数にしか報告はされていない。ボスを失ったという情報が外にばれれば、ミルフィオーレファミリーだけでなく、他のファミリーからも狙われる危険性があるからだ。この葬儀も森の奥深くで隠れるようにして行われた。

「先に行つてくれ・・・オレは・・・もう少し・・・お側に」

「・・・わかった」

山本は少しためらいながらもその場を後にした。熱くなる目頭を必死に覚ますように、空を見上げながら。

(ツナ・・・)

「十代目・・・」

獄寺はそう呟くと棺桶の前に座り込んだ。

「あなたと出会ってから、オレの人生は大きく変わっていきました。退屈だった毎日にも急に雲が晴れていくように・・・あなたと見てきた全てのものが今もずっとオレの中で・・・。オレは変わった・・・

と思います。昔のオレには無かった物をあなたは完璧に持っていた。あなたはそれをオレ達に分け与えるようにオレ達の心の隙間を補ってくれた。優しく・・・暖かく・・・全てを包み込む大空。やはりあなたは大空だ。青くてで雲ひとつない大空、この世でもっとも美しいのは・・・この空だと、オレは思うんです」

「十代目・・・オレ・・・また一緒に・・・あの馬鹿共とみんなで・・・」

獄寺は立ち上がると空を見上げた。

(ふざけるな！何のために戦ってると思ってるんだよ！またみんなで雪合戦するんだ！花火見るんだ！だから戦うんだ！だから強くなるんだ！またみんなで笑いたいの！君が死んだら意味がないじゃないか！)

獄寺はリング争奪戦のときのツナの言葉を思い出していた。

「十代目がいなきゃ・・・意味ないじゃないですか・・・」

少し風が吹いた、獄寺は髪をかきあげ唇をかみ締めた。こぼれ落ちる涙を拭おうともせず、ただただ獄寺は空を見つめているのであった。

(獄寺・・・帰ってきたかな・・・)

山本はソファに腰をかけると、誰もいない静かな部屋を見渡した。

「ツナ・・・」

(山本)

「ツナって口に出して言うとき・・・聞こえんだよな・・・お前の声」

山本は深く溜息をつくと拳を強く握り締め、机を叩いた。

「くそっ・・・」

「心中穏やかじゃあなさそうだな」

ドアが開き入ってきたのはヴァリアーのスクアーロだった。

「スクアーロ、どうしてここに・・・」

「うちのボスが墓参りにな・・・オレは付き添いだ」

「そうか・・・」

スクアーロは山本の隣に腰を下ろした。

「無理もねえ・・・ボスが死んだんだ、おまえらのことだ・・・どうせ自分を責めてんだろう」

「オレらが付いてれば・・・とは思ったがな・・・ツナが下した決断だっつって雲雀に怒られたよ・・・」

山本は苦笑した。スクアアローは立ち上がると立て掛けてあった刀を山本に投げた。

「一本・・・手合わせしねえか？久しぶりに」

山本は少し驚いたような顔をしたが、すぐに立ち上がると微笑んで頷いた。

「スクアアロー」

「ああん？」

「サンキューな」

「何の話だ・・・」

「ハハっ、なんでもねーよ」

山本は刀を手に、外へ出た。

標的67 過去からの贈り物

ツナの棺桶の前にはヴァリアーのボス・XANXUSが立っていた。

「フン・・・だからあれほど言っただろう、てめえは甘すぎた、その甘さがお前の命取りだと・・・」

XANXUSが怪訝そうな顔でそう呟く。

「だが皮肉なもんだ・・・その甘さのおかげで・・・オレは今ここに居るんだからな・・・まったく・・・ジジイといいお前といい・・・」

XANXUSは鼻で笑うと少し微笑んだ。それは今までに見せたこともないような優しく、そして悲しい笑顔だった。

獄寺がアジトに戻ると倉庫の階段下からすすり泣く声が聞こえた。そっと近づいて覗き込むと膝を抱えて震えているハルがいた。

「アホ女・・・」

「獄寺・・・さん・・・みつ・・・見ないでください・・・ハルは・・・ハルはツナさんの分まで笑顔で居なきゃいけないんです、こんなところで・・・泣いてちゃ・・・、それに信じてません、ツナさんが死んだなんて」

溢れてくる涙を必死に袖で拭う。その袖はひどく濡れていた。獄寺

はハルの頭をそつと撫でた。ハルがふと顔を上げ、獄寺の顔を見る。獄寺の赤く少し腫れた目は明らかに今まで泣いていたことを証明していた。

「獄寺さん・・・肩・・・借してください」

そう言うとハルは隼人に飛びつき泣き叫んだ。獄寺は何も言わず、優しくハルを抱きしめた。

了平が部屋に入ると窓から空を見つめる京子が立っていた。

「京子・・・」

京子はゆっくり振り向くと、そつと空に手を伸ばす。

「お兄ちゃん・・・あのね、こうやって空を見ると、ツツ君が笑ってるように見えるの・・・」

京子は泣いていた。静かに静かにそして美しく。しかし優しくかった京子の表情が少しゆがんだ。

「お兄ちゃん本当のこと話してよ・・・ツツ君は事故で死んだんじゃないんでしょ・・・?」

「京子・・・」

「お願い・・・お兄ちゃん・・・」

その決意に負け、了平は話した。ミルフィオーレとの交渉の最中にツナが殺されたことを。

「今話したのが・・・真実だ」

京子は一切動揺せず、了平のほうに体を向けると微笑んだ。

「大丈夫だよ、お兄ちゃん！ツツ君は・・・ツツ君は帰ってくる、なんでかな？よくわかんないんだけどね・・・ツツ君は居なくならない気がするの」

（京子ちゃんは太陽みたいに笑うんです）

了平はそんなツナの言葉を思い出した。

（本当に太陽みたいだな・・・沢田・・・）

それから数日がたった。あれ以来ミルフィオーレはボンゴレの呼びかけにも一切応じず、次々とボンゴレ関係者を消していった。

「くそ・・・また犠牲者が10人も・・・」

報告書を握り締め獄寺は机を叩いた。

「あいつら・・・ボンゴレ側の人間を全滅させる気だ！」

「ボンゴレリングがない今、どうやって戦えば・・・」

「それなら心配ないよ」

ドアを開け雲雀が中に入ってきた。

「どういうことだ？雲雀」

「どつちやらもつすぐ・・・10年前から贈り物がやってくるみたいだよ」

「贈り物・・・？」

雲雀はミルフィオーレはある装置によって、10年前からリングを持った守護者をこちらに呼びリングを奪うと言う。

「そんな装置がこの世にあるとでも・・・？」

「十年バズーカ・・・！」

獄寺は呟いた。

「ランボが持つてる十年バズーカが何か関係しているかもしれない」

「とにかく十年前の自分と入れ替わったときのためにいろいろと準備は必要だと思つよ」

雲雀はそれだけ言うと残りは草壁にまかせて行ってしまった。

「あいつ・・・なんでそんなこと・・・」

「恭さんに隠し事なんてできないと思ったほうがいい・・・あの入

は強いだけじゃない・・・恭さんは・・・天才です」

草壁は誇らしげな顔でそう話した。了平はふとこの前京子が言っていたことを思い出した。

(ツツ君は帰ってくる・・・)

京子はこうなると、十年前から沢田が帰ってくると思っていたのか・・・

(超直感・・・?)

沢田・・・おまえと京子はやはり結ばれる運命だったのかもしれない・・・会議が終わり、そんなことを思いながら了平はイタリアへ飛んだ。

獄寺は十年前の自分がいつ来てもいいように、G文字で暗号化された手紙を常に持ち歩いていた。そして、毎日ツナのところに行っていた。その日も獄寺はいつものようにツナのところへ向かった。静かな森の中、ツナの棺桶の方から声がした。

(人が居る・・・!)

獄寺は慌てて草むらをぬけた。

「誰だ!」

獄寺が声をあげると、ツナの棺桶の中に座っている小柄な少年が見

えた。

紛れもなくそれは、10年前のツナだった。

「10代目……」

やってきたのだ。過去からの贈り物が……。

標的68 〈怒涛のチヨイス編〉

場面は再び超チヨイスの舞台へ……

未来での惨劇を見せたウィンディの真意は……

ついに再開するチヨイス3回戦、現在は1勝1敗の同点。
ここからの1戦が勝敗を左右するだろう……

まだ戦いに参加していない真6神官の晴、嵐、雨、霧、雲の守護者、
ボンゴレ側のレイア、そしてウィンディ……

彼らの未知数な実力が徐々に明らかになってくる……

これより超チヨイスの3回戦が始まる……

最後にツナ達は勝利を手にすることができらるだろうか……

標的69 3回戦

「ふふふ、どうだった、私の力は!?!」

見せたい映像^{ヒジヨン}を見せ終わったウィンディは満足げな顔で言い放った。

「こんなのを見せて、一体なんのつもりだ!?!」

さすがに我慢の限界だったのか、ツナが大声で叫んだ。

「今にわかるさ、さあ3回戦を始めようじゃないか」

再びジャイロルーレットが姿を現した。

「戦い方は決まっていたが、肝心の属性とフィールドが決まっていなかったからな」

ツナはしぶしぶジャイロルーレットに手を置いた。

「「チヨイス!?!」」

ガラララララ

ピタッ

ルーレット結果

フィールド：雨

ボンゴレ：大空2、霧1

フィルマーレ：晴2、霧1
となった。

「大空は2人・・・か」

まさかのこの結果ツナは考え込んだ。大空が2人である以上、リングと匣の経験がある自分と10年後XANXUSを選ぶべきだ、と。

「やっぱりリングと匣を使えるオレとXANXUSか」

さすがに女の子には戦わせたくなかった。

そしてもう一人の大空であるディーノはまだトレーニングルームで雲雀と戦っていた。

その時プシューとトレーニングルームの扉が開き、雲雀が出てきた。

「ひ、雲雀さん」

「僕の出番はまだなのかい？」

「いや、あの、実は・・・あれ？」

雲雀はともかくディーノがトレーニングルームから出てこなかった。

「あの雲雀さん、ディーノさんは？」

「ふう、まったくこの時代の跳ね馬は弱すぎるよ」

その言葉に何やら嫌な予感がした一同。ツナは慌ててトレーニングルームに入った。

するとそこにはディーノがボロボロの状態で気絶していた。

「デイ、ディーノさん」

未来で戦った雲雀とリングも匣兵器も未経験なディーノとでは天地ほどの実力差があったのだ。

「これじゃ使い物にならねえな」

「やっぱりオレとXANXUSで行くか・・・っていうかレイアさんは？それにリボン以外のアルコバレーノも」

ツナの言葉にみんなが周りを見るが、レイアとリボン以外のアルコバレーノの姿がなかった。

「ああ、あいつらなら・・・」

リボンが言うには数十分前、2回戦の途中でレイアは扉を出ていたらしい。みんなは戦いに夢中だったため、気づかなかったという。リボン以外のアルコバレーノはレイアの後を追ったとのことだ。

レイアは扉を出た。そこは並盛中の屋上へとつながっていた。

「んん〜」

レイアは風に吹かれながら背伸びした。そこにアルコバレーノ達が追ってきた。

「あら、気づいてたの？」

「いつたいなんのつもりだ、コラ」

「あなたは何者ですか？」

コロネロと風が率直に聞いた。

「ふふ、さすがアルコバレーノといったところかな」

突然口調が変わりだした。

「やはりあなたは……」

アルコバレーノが全員戦闘体制に入った。

「まあ待ってよ、僕は君達と戦うために来たわけじゃないから、今回は味方としてきたんだよ」

「なっ」

全員の表情が驚愕のそれへと変わった。

「そつだよねマーモン君」

みんなが一斉にマーモンを見た。

「マジなのか、コラ」

「そうだよ、僕も最初は信じられなかったさ、仮に敵として現れても僕らじゃ敵わないしね、だから幻覚と夢幻の波動で覆ってるのさ」

再び外の景色の方を見るレイア。

「そろそろ3回戦かな」

「みんないた」

後ろから声があったので全員が振り返った。声主はレイア達を探していたツナだった。

「もう次のチヨイスが始まるんだ、みんな中に来てよ」

レイアは何も言わずに中に入っていった。

「さあ、コロネ口達も」

「あ、ああ」

そう言ってアルコバレーノも全員中に入った。

超チヨイス3回戦は波乱の予感が・・・!!

標的70 出陣

「結局負けちまったのか、コラ」

その言葉に獄寺が暗い顔をした。

「負けてしまったものはしかたがありません、次をしっかりやるべきですね」

結果を見たコロネ口と風が言った。

「大空が2人、霧が1人、それなら大空は私が出るわ」

その言葉にみんなが振り返った。

「えっ、レイアさん、出るの」

「ええ、私もれっきとした大空属性よ」

「で、でも匣兵器もないし、そこまで経験があるわけじゃ・・・」

「やらせてあげなよ」

またしてもその言葉に振り返る。ふわふわ浮いている赤ん坊・マーモンに・・・

「何か勝算があつてのことだろうし、それより霧はどうするんだい？」

何故マーモンがそこで口を出したのかわからなかった。

そしてもうひとつの問題はそれだった。再び骸に行かせるのか、クロームか、マーモンか。

「クロームかマーモン、どちらか出てくれないか」

「僕が出て構いませんけど」

「いや、お前は1回戦にも出たし、ウィンディチェ復讐者の牢獄から出て時間も経ってないんだろう、骸は少し休んでくれ」

その発言に一瞬骸は驚いたが、今は彼の指示に従うことにした。

(やはり君は甘いですね……)

「ボス、私が出る」

「わかった、頼むよクローム」

クロームはコクツと頷いた。

「XANXUS、お前は……」

「……」

ツナの問いにXANXUSは黙っていた。しかし、少しして口を開いた。

「フン、オレがかつ消すのはウィンディのカスだ、ザコはてめえらでかたづけろ」

「じゃあ、オレとレイアさんで出るよ」

「そちらのメンバーはそれで決まったかな、それでは我々のメンバー発表といこう、晴は6神官のウーラノス、真6神官のヘリオス、霧は真6神官のペガサスでいこう」

「うゝおゝおゝおい、あの野郎もう復活してやがるのかあ」

「おそらく晴の活性を使ったら」

「言い忘れてたけど、今回のルール人数が違うのを予測してたのが偶然にも同数だ、だが最初に決めていたルール・シークレットターゲットルールでいこう」

「シークレットターゲットルール？」

「ランダムにターゲットが決まり、それを倒せば勝ちだ、もちろんランダムだから何をしてもわからない」

「だがそれではお前達がズルをすることができるじゃねえか」

リボーンの言う通りだった。例えばウーラノスがターゲットだったとして、やられたら実はペガサスがターゲットだったということもできる。しかし、それはウィンディにもわかっていたこと。

「ごもつとも、だからメンバーがフィールドに出た時点でお互いのターゲットを発表する、つまりメンバー以外は誰がターゲットかわ

かるということだ、では3回戦スタートだ」

ツナはメンバーであるレイアに言葉をかけた。

「レイアさん、無理しないでね」

レイアは黙って頷くと、リングを指にはめ、戦闘の準備にかかった。

「骸様」

「大丈夫ですよクローム、お前には僕がついています、ボンゴレ匣も」

そう言ってクロームの頭をそつと撫でた。

「じゃあ、行こうか」

「ツナ君」

医務室から京子が出てきてツナの手を握って言った。

「無茶はしないで、お兄ちゃんだってあんなことになって・・・」

「大丈夫だから」

京子の言葉を遮るように、ツナが言った。

「君からもらったお守りもある、絶対勝つから」

京子の手をもつひとつの手で撫でると、そつと離し、扉へと向かった。

「行こう!」

こうして3人は扉をくぐった。

「安心しろ京子、ツナの強さは知っているだろう」

リボーンの言葉は未来での戦いを思い出させた。

互いにメンバーが出た時に、再びウィンディがモニターに現れた。

「ではターゲット発表だ、フィルマーレはウーラノス、ボンゴレはレイアだ」

「ここは……森?」

3人が出たところは未来戦の時と似ている森だった。

「なんか、また未来に来たみたいだ……んっ?」

突然とてつもなく少量で降っているかもわからないくらいの雨が降ってきた。

「気をつけた方がいいわね」

えっ、とツナクロームがキョトンとした。

「フィールドは雨だったでしょ、おそらくこのフィールドに存在する水はすべて鎮静の効果があるはず」

「あっ、そうか」

「まだこの量なら大丈夫だけど、降ってきたらマズイわよ、用心してね」

2人はレイアの言葉に納得した。

「!」

何かに気づいたのか、レイアが戦闘体制に入った。同じくツナとクロームも気づいたらしい。

「何か、来る」

「とりあえず私がここに残るわ、沢田君とクロームさんは散り散りになって」

「えっ、でも一人じゃ・・・」

「大丈夫だから、ねっ」

そのレイアの笑みに、何か違和感を感じたツナ。

(この感じ・・・どこかで・・・)

「じゃあお願いするよ、無茶はしないでね」

ツナはこの場をレイアにまかし、クロームと共に走った。
すると空から一人の男が現れた。

「グハハ、ボンゴレの人間一人はっけ〜ん」

言葉はだらしなく、見た目は全身を白いスーツのようなものを着ているた。

「あなたがフィルムマーレね？」

「グハハ、オレ様はフィルムマーレ真6神官晴の守護者・ヘリオスだ」

そのままヘリオスはレイアの前へ降り立った。

「ボスじゃねえのが残念だ、しかも女」

「女って思ってたら、負けるよ」

「グハハハハハ、おもしれえ、やってみな!!」

レイアVSヘリオス、戦闘開始!!!

標的71 レイア VS ヘリオス

「グハハ、いくぜえ」

ダツと地面を蹴り、レイアに襲い掛かる。

ガッ

二人の腕が交錯する。

そこからは避ける、受ける、殴るの目にも止まらぬ速さで戦う二人。

「やるな、嬢ちゃん、これならどうだ」

ふとリングをレイアに向けた。

「太陽光!!」

「うっ」

晴のリングが太陽のような光を発し、レイアの目を眩ませた。

(喰らえ!!)

目の見えていないレイアにパンチを浴びせる。しかし

ガシツと腕を掴まれた。

「なっ」

「ハア」
「うお」

そのまま地面へと一本背負いを喰らわせた。

「いって……ヤバッ」

ズキユン

倒れたヘリオスに隠し持っていた銃を発砲した。

「あつぶね、どっからんなもん出したんだ？」

しかし、問題はそれではない。

「目が見えなかったはずだが……」

「ふっ、リングに炎を灯していたからそのゆらめきで方向がわかったのよ」

「へえ、あんたすげえじゃん、んじゃあオレ様もそろそろ本気で行くか」

「そうしてくれる？」

まだまだ実力を見せない状態でも、二人ともかなりの実力者であることは伺えた。

「レイアの奴、やるじゃねえか、それよりコロネロ」

「ん？なんだリポーン」

「あいつは一体何者だったんだ？」

その質問にはコロナロだけでなく、他のアルコバレーノもだんまりしてしまった。

「まだ、確証があるわけじゃねえが……」

「そうですね、十中八九『彼』だとは思いますが……」

コロナロも風も知っている顔のようである。

「それでもいい、教える」

みんなには聞こえないようにコロナロはリポーンの耳元でコソコソと言った。

「!!!!、何だと……」

いつものポーカーフェイスのリポーンもその真実には驚きを隠せないようだった。

「スカル、マーモン、本当なのか？」

二人共黙って頷いた。

「そんなバカなこと……あるはずがねえ」

「オレ達だって最初は信じられなかったぜ、コラ」

「仮にそうならなんでここに、なんで味方として戦ってやがんだ」

再びアルコバレーノ達はモニターを見始めた。

「いくぜ開匣、いでよ晴チーター（ゲパルド・デル・セレーノ）！
！」

「晴属性のチーター！？」

「見たところあんた、匣兵器持ってねえようだな」

その言葉に沈黙するレイア。

「まあ匣があろうがなかろうが駿足のチーター、しかも晴の活性でさらにスピードアップしたオレ様のチーターちゃんは捉えられないだろうがな」

ヒュン

晴チーターが消えた。辺りを見渡すが、姿はない。

「匣に気を取られるなよ」

「！-！-」

レイアがヘリオスの方を見るとすぐ近くまで来ていた。

「くっ」

再び交戦状態になるヘリオスとレイア。

「ガールルル」

敵はヘリオスだけではない。

ガブツ！！

「あああああああ」

突然現れた晴チーターはレイアに噛み付いた。

「隙アリだよ」

ゴッ！！

ヘリオスの拳がレイアに当たる。

「それもういつちよ」

コオオオオオオ

ボウツ！！

「ぐっ」

「ガル」

リングに巨大な炎を灯してヘリオスと晴チーターを退かせた。

「ハア、ハア」

痛そうに肩を押さえるレイア。

「レイアさん」

モニター越しに名前を呼ぶ京子、もちろん届くはずもない。

「どうだい、もう負けを認めたら？」

やがてレイアの表情は苦痛から喜びの顔へと変化していった。

「やっぱり、この姿じゃあダメだねえ」

「!?!」

突然レイアの口調が激変し、驚くヘリオス、そしてリボン達。

「本来の姿で……」

瞳も鋭くなる。

「……やりたいな……」

何か得体の知れないものを感じたヘリオスは思わず下がってしまっ。

(なんだこいつ……いつたい……)

「マーモン君、モニターで見てるんでしょ、もう幻覚を解いてくれて構わないよ」

レイアの言った言葉にみんなの目が見開かれる。

「マーモンお前……」

「しかたないだろ、僕の幻覚と彼の夢幻の波動を組み合わせないとバレちゃうしね」

マーモンがパチンと指を鳴らすと、レイアにかけられていた幻覚がなくなり始めた。

やがてその姿があらわになっていく。

「さあ、本当の戦いを始めよう!!」

標的72 時を紡ぐ白き魔手

霧の幻覚が解け、その姿があらわになっていく。

「!?!」

モニターで見ていた全員は言葉を失った。しかしリボンやヴァリアーだけではない、フィルマーレのボスであるウィンディですら固まっていた。

そして遠く離れていたツナとクロームも、それを感じとっていた。

「まさか……まさか……」

ツナに戦慄が走る。そして、ナッツのアニマルリングも同様に震えていた。

「久しぶりだね綱吉君、君にとっては久しぶりではないかもしれないけれど」

無線から聞こえてきた声を聞いた瞬間、ツナとクロームの謎の悪寒の正体がわかった。

「……びゃ……白蘭!?!」

細い身体のライン、無造作に散らされた髪形、強力な波動を纏って現れたのは、かつて未来で激闘を繰り広げた最強の敵、白蘭だった。年齢は未来の時より遙かに若い。

「な・・・なんで・・・どうして・・・」

「知りたいかい？でも話しは後だよ綱吉君、今は勝つことだけを考えなよ」

そう言うと白蘭は無線を切った。

「どうして・・・」

「ボス」

一瞬精神が崩れかけたが、クロームの言葉で我に返った。

「そ、そうだ、今は勝つことだけ、あいつのことは後だ」

「おっと、見つけたよボンゴレ」

白蘭に気を取られていたのか、こんな近くに来るまで気づかなかった。

「クローム、ここはオレが行く」

クロームはコクツと頷くと森の奥へと走って行った。

「君がボンゴレの大將か、僕はフィルマーレ真6神官・ペガサス」

紳士のような口調で現れたのは霧の真6神官のペガサスだった。

「お前が誰であろうと、ここで倒すだけだ」

ハイパー化したツナは超速でペガサスを討ちにかかった。

「白蘭!？」

「未来でツナが倒したはずだ」

「いや、奴自信のこともそうだが、奴のつけているリングを見てみる」

獄寺が白蘭のつけていたリングを指摘した。みんなはモニターでそれを確認すると、またもや言葉を失う。

「マーレ……リング?」

そう、白蘭がつけていたリングは、アルコバレーノによって封印されたはずの大空のマーレリングだった。

「そんな……」

未来ことを知っている現代のアルコバレーノにとっても、それはとても大きいショックだった。

「だが今はそんなこと言ってらんねえ、今は白蘭は味方、そう思うしかない」

「なんだあ、男になっちまいがった」

「やっぱりこっちの姿の方が動きやすいや、言っておくけど、真の姿はさっきのとはケタ違いの戦闘力だからね」

「ほほう、それは楽しみだな」

相変わらずへらへらとだらしない口調である。

「じゃあ行くよー!」

バキッ!!

「なっ」

(バ、バカな・・・このオレが見えなかった)

ガッ!!

高速で攻撃を放ち、すぐさま追撃に移る。

「いくよ白龍しろりゆう、白連撃しろれんげき!」

ガガガガガガガガガガ!!

いつのまにか開匣していた匣・白龍を使った乱舞攻撃が炸裂する。
そのまま攻撃を受けて地面に下りるヘリオス。先程までの余裕は感じられない。

「ちっ、匣兵器持ってやがったか」

ヘリオスは晴チーター(ゲパルド・デル・セレーノ)を匣に戻した。

そして白蘭に向け再び開匣。

「行けえ晴チーター!!!」

晴チーターは活性の作用で高速撃を見せる。白蘭の周りで高速移動をし、攪乱させる作戦であろう。

「ふうん、確かに速いけど・・・」

(今だ晴チーター)

「ガアアアアアア!!!」

ガブツ!!

「よし・・・いや・・・」

噛み付いたと思いきや、そこに白蘭の姿はなかった。そのかわり

バシユ!!!

「なっ」

突然晴チーターが切断された。

「な、何が起きたというのだ」

焦るヘリオスの後ろからふと声がした。

「白龍断、攻撃しても僕はそこにはいない、待っているのは白龍の牙だけ」

「くっ、いつのまに」

「ふふ、もう諦めたら？」

その言葉にヘリオスの顔がびくびく反応する。

「ふざけんなああ、オレ様は・・・オレ様は真6神官だぞ」

そのまま空へ飛び、リングの炎を最大限に灯した。

「うおおおおおおお！！」

ヘリオスの手に炎の弾の塊ができる。

ヘリオスは次々にその弾を生み出した。

やがて数十個の弾がヘリオスの周りに浮遊している。

「何をしようってんだい？」

「くくく、これは我が炎をエネルギーの塊にしたもの、これを喰らえばさすがの貴様も木っ端みじんよ」

「へえ、それは楽しみだなあ」

ヘリオスの宣言に対し、余裕着々の白蘭。

「余裕ぶっこいてられるのもこれで最後だあ、喰らえええ太陽弾 -
- - - - - ! ! !」

太陽弾と呼ばれた炎エネルギーの塊が白蘭に襲い掛かる。

標的73 白蘭 VS ヘリオス

いくつもの太陽弾が白蘭に襲い掛かる。

「確かにすごい炎エネルギーだよ、でも、気をつけないと逆に利用されちゃうよ」

白蘭は笑みを浮かべながら匣兵器を取り出し、開匣した。

「今更何を出そうと無意味だあ!!」

ドカン ドカン ドカン ドゴオオオオン!!!

「あんなエネルギーじゃあさすがの白蘭も・・・」

「いや・・・」

爆煙が収まり始めた。

「ハツハツハ、どおだあ、我が力は・・・ん？」
爆煙の中から人影が現れた。

「なっ、なんだとおおお」

しかし、その人影はピクリとも動かない。

「あ、あれは」

顔は白蘭、しかし髪は長く、背は高く、意思を持っていなさそうな
雰囲気を漂わせている男がだった。

「ぬぬう、あれは白蘭なのか」

さすがのヘリオスもわけがわからない状態にいた。
そしてその後ろには・

「び、白蘭、白蘭が二人いやがるのか」

「GHOST」

獄寺がポツリとつぶやいた。

「マジかよ」

「GHOSTって・・・」

「ど、どういふことだ」

「ハハハ、これが僕の秘密の匣兵器であり、もう一人の僕さ」

「意味がわからんぞ」

まさにごもつともな意見。いきなりもう一人の自分と言われても何
もわからない。

「まあわかんなくていいよ、ただ1つ覚えておいてほしいのはさっ

き君が放った炎は全部……」

白蘭の背中から強力なエネルギーを感じる。

「僕の中にあるってことを……！」

言葉と共に、白蘭の背中からブアツと翼が生えた。まさに未来での決闘の時とまったく同じ現象だった。

「さあ、君の炎は全部吸収したよ」

「ふっ、だからどうしたというのだ」

ヒュン

「んっ、消えた」

バキッ！！

突然白蘭が殴られた。

「おらあ」

ドゴッ！！バキッ！！

ヘリオスは高速移動で白蘭を攪乱し、次々と攻撃を加えていった。

「ハッハッハ、どうした白蘭、無我の波動の前では手も足も出ないか？」

文字通り白蘭はただ攻撃されていく一方だった。

「トドメ、太陽弾……!!」

ドゴオオオオオオオオオン!!!

「くすぐったいじゃないか」

突然爆煙の中から聞こえた白蘭の声に思わず退いてしまった。

「バ、バカな、あれほどの攻撃を喰らって平気だというのか」

「だから言ったじゃない、諦めたらって」

余裕たっぷりでニコニコ話す白蘭に対し、ヘリオスはもはや冷静ではいられなかった。

「くっ、こうなったら最後の手段、いでよ晴龍！」

巨大な光と共にスクアー口を苦しめた晴龍（トラコーネ・デル・セレーノ）が姿を現した。

「ふうん、これが龍か」

「いけえ晴龍、奴を炎で囲い、滅ぼせえ!!!」
ヘリオスの命令で晴龍は白蘭の周りを囲う。
そして、頭上から襲い掛かった。

「この程度ならこの技で十分だよ、無力さを思いしつたら？」

白蘭は晴龍に臆することなく、両手を構え、静かに広げる。

「白拍手!!!」

パン!!!!

あれほど巨大な炎を纏った龍が、白蘭のたった1回の拍手で、跡形もなく消滅してしまった。

「な……な……なにが……起きたのだ……」

その一瞬の出来事にヘリオスは精神は崩壊していく。

「さっきのは白拍手しろはつかといって、大空の特徴である調和によって、炎を打ち消したんだよ」

「……………」

もはや白蘭の声さえ届いていなかった。

「聞こえてないか、まあいいや、トドメだよヘリオス君」

白蘭は白龍を2匹開匣した。

「白龍!！」

2匹の白龍はその場で立ちすくんでいたヘリオスに真っ直ぐ向かった。

ドゴオオオオン!!

その攻撃から数分が経過し、ヘリオスは戦闘不能となった。

白蘭は一息ついた。そして空を見上げつぶやいた。

「さて、あとは君達だよ綱吉君、クローム髑髏」

標的74 沢田綱吉 VS ペガサス

バキッ！！

「ぐああああ」

「まだだ！」

超速の炎乱舞攻撃を浴びせるツナ。

「トドメだ、X BURNER！！！」

ドゴオオオオン！！

「ツナの奴、とんでもない強さだな、コラ」

「確かに強いが、今のX BURNERは瞬時に放ったものだ、しとめてはねえはずだ」

モクモクと上がる煙はやがて収まっていく。

「くくく、強いなあ」

起き上がったペガサスは先程の攻撃を喰らっていないかのようにスツと立ち上がった。

(奴はそうとう感情が高ぶっている、ウィンディの作戦を成功させるには今か・・・)

「くっ、まったく効いていないのか」

「いやいや、素晴らしい攻撃だったさ、ただ僕が・・・」

ペガサスの体が霧の炎で包まれていく。

「幻覚だったからさ」

後ろから声がしたので、ツナはとっさに振り向いた。

「いない」

「こっちだよ」

バキッ！！

攻撃を喰らったが、たいした攻撃力じゃなかった。

しかし、今不意に聞こえてきた声、聞き間違いじゃなければ・・・

「今の攻撃どうだった、ツナ君」

ツナはペガサスの方を見た時、自分の目を疑った。

「・・・京・・・子」

そう、目の前にいるのは、間違いなく笹川京子の姿をしたものだった。

「えっ、私？」

モニターを見ていた本物の京子はキョトンとしていた。

「あれは幻覚と違って、ようするに京子の偽物ってことだけ、コラ」

コロネロが京子にわかりやすく説明した。

「でもなんで私の姿に？」

「おそらく奴の狙いはツナを惑わすことが、それとも・・・」

「なんのつもりだペガサス」

「.....」

京子の姿をした者に叫んだが、黙ったままである。

「誰に話してるんですかツナさん」

「!!!!!!」

またしても耳を疑った。ツナが後ろを見ると、ハルの姿があった。

「・・・ハル・・・」

(幻覚か)

もちろんそうであるはずだが、見切ることができなかった。

「夢幻の波動を放ってるのか」

「どうしたのツナ君、かかっておいでよ」

チヨイチヨイツと指で挑発し始めた。

「くっ」

拳をグツと握るも、手を出せるはずはなかった。

「来ないならこっちから行きますよ」

ハルと京子がツナに襲い掛かってきた。

なんとか攻撃をしのいではいるが、このまま反撃せずにいれればいずれ体力はなくなる。

「マズイな、コラ」

「リポーン君、コロネロ君、なんとかならないの？」

「・・・」

京子の問いに二人は黙ったままだった。

バキッ

「ぐっ」

京子の拳がツナの腹にヒットした。

(このままではいずれやられる……か八か……)

ツナはアニマルリングに炎を注入した。

そしてオレンジ色の炎を纏ったライオンが現れた。

「行くぞナッツ!!」

ツナの考えた作戦とは……

標的75 覇王の目覚め

「ナッツ、天空の雄叫び（ルツジート・デイ・チエーリ）！！」

「GAOOOO！！」

京子とハルの幻覚に向けられて天空の雄叫びが放たれた。するとその幻覚が崩れ出した。

「くっ、大空の調和か」

ボボボボ

次々に形が崩れていく。

ツナはその光景をジッと見つめていた。

（見えた、あいつは京子に化けている）

幻覚崩れた一瞬をツナは見逃さなかった。幻覚の形が崩れた瞬間に実体があった。

しかし問題は見破ってなお、京子とハルの姿をした幻覚に攻撃できるかである。

「ペガサス」

「ん？」

「貴様がなぜ、幻覚の形をハルと京子の姿にし、オレの前に現わさせたのかはわかる」

それを聞いたペガサスは大声で笑い出した。

「はーはっはっは、わかるだと、なら言ってみるよ」

少しの沈黙の後、ツナはゆっくり口を開いた。

「霸王を・・・目覚めさせるためじゃないのか!？」

ツナの言葉にペガサスの笑いが止まった。

「気づいていたのか」

「ああ、ウィンディの能力を聞いた時、もしかと思ってな」

モニターを見ていた者達にもその戦慄を感じる。

「霸王か」

「さすがは沢田綱吉というところだな」

ボンゴレ側とフィルマーレ側のモニターが繋がる。

「ふふふ、奴の言う通り僕は能力で霸王の存在を知った、霸王と我々は互いに悪そのもの、復活させれば仲間として迎えられそうだったからな」

ウィンディの笑い声とペガサスの笑い声がこだまする。

「ウィンディ、てめえは最後までツナ達の側にいたのか？」

「いや、霸王がジュエルリングを少々奪うとこまでだ、それ以上見ても意味がないからな」

その言葉を聞いた時、リボン達の表情が笑みに変わった。

「それを聞いて安心したぜペガサス」

ウィンディと同じ内容をツナに話した時の反応だった。

「？、何がおかしいというのだ」

「そんなに会いたければ会わせてやるよ」

巨大な鼓動と共に、ツナを黒い炎が灯り始めた。

「うおおおおお」

数分後、やがて炎は収まり始め、オレンジではなく黒い炎を灯した沢田綱吉が姿を現した。

「！！」

その力を白蘭も感じていた。

「ふうん、すごいパワーじゃないか綱吉君」

同じ領域にいないリボン達にまでその力は及んでいた。

「霸王が来たな」

「ツナ・・・」

「ツナ君」

みんなの見守る中、霸王は目覚めた。

標的76 霸王 VS ペガサス

ついに目覚めた霸王。その体から感じ取れる波動はとても強い。

「あんたが霸王かい？」

「……………」

「我々はフィルマーレファミリーというものだ、我々と共に世界を取ろうではないか」

霸王はその重い口を開いた。

「オレはてめえらの仲間にはならない」

「……………では言い方を変えよう、我々と強力し、ボンゴレを倒そうではないか」

利用する気満々のペガサスに対し、霸王は……………。

「聞こえなかったのか、てめえらとは強力する気も、仲間になる気もねえ」

「な、なんだと!?!?」

(ウィンディ、話しが違うぜ、ボンゴレを倒すように仕向ければ強力くらいするはずじゃなかったのか)

「どっとなっている!?!?」

ペガサス同様、ウィンディにも疑問が浮かぶ。

「だから言ったじゃねえかウィンディ、最後まで見てねえのかったな」

「くっ、一体どういうことだ!？」

リポーンの言葉にウィンディは激昂した。

「教える義理はねえ、だが1つだけ言ってやる、霸王はお前達の仲間には絶対ならねえ」

ペガサスな顔が一瞬引きつったが、すぐに表情を戻した。

「くっ、まあいい、ならば貴様を倒せばいいことだ」

「やれるものならな」

(くくく、万が一仲間にならなかった時の対処法はウィンディに知らされている、閻属性のこともな)

ペガサスはハルと京子の幻覚を解いた。

(炎が吸収されるなら、使わなければいい)

「いくぞ霸王!！」

ペガサスは肉弾戦で霸王に挑んだ。

「ハアアアア」

ドゴッ！！

ペガサスの拳が霸王に当たる。しかし、霸王はビクともしない。

「もう終わりか？」

その余裕にペガサスは一步退いてしまった。そして霸王が反撃を放つ。

ドゴン！！

「がはっ」

霸王が放った攻撃にペガサスはいとも簡単に吹っ飛んだ。

「確かに炎が吸収されるなら出さなければいい、だが生身の人間と炎を使う人間が戦えば勝敗は明らかだ」

「ぐ、その通りだな、ならば吸収覚悟で挑むだけだ」

ペガサスは匣を用意し、開匣した。

「ミストワールド
霧世界！！」

霧に包まれ、景色は森から草原へと変わった。そして雨も少しずつと強くなっていった。

「!!!」

ズバツ!!

空から突如ペガサスが襲撃してきた。

「惜しかったな」

「それはどうかな」

ペガサスの一言に霸王の表情が変わる。

ボコツ!!

「なっ」

霸王の足元から2つの手が生え、両足を掴んだ。

「くくく、これで身動きは取れまい」

不意に聞こえてきた声は前にいるペガサスからのものではなかった。顔を後ろに向けると何人ものペガサスがいた。

そして顔を前に戻すと、辺りはペガサスの姿がでいっぱいだった。

「さあ、どうする霸王!？」

「.....」

「はぁーはっはっは、声もでないか」

勝ちとタカをくくっているのか、ペガサスは笑い出した。

その時霸王は腕をスツと構えた。真っ黒な炎を纏わせながら。

（一体何をやる気だ？）

謎の悪寒がペガサスを襲う。

「ならば一気にカタをつけるのみ」

斧、刀、槍、様々な武器を持ったペガサス達が霸王へ襲い掛かった。

やがて1人のペガサスが霸王に攻撃した。

しかしあっさりと拳で受け止められてしまった。

だがその攻撃を仕掛けたペガサスが驚いたのは、攻撃を受け止められたことではなかった。

『攻撃をしたペガサス』以外誰1人として、霸王への攻撃は当たっていない、それよりも誰も側に近づけていなかった。

「ど、どうしたというのだ」

ペガサス達の足元を見ると、黒い炎が地面を覆っていたのだ。

「ブラックグラウンド、炎を纏っているもののみを対象に動けなくなる」

「なっ」

「つまり、これがある限り全体を炎で作られている幻覚は身動きが取れなくなり、動けるのは足元に炎を灯していないもののみ、つまり動いているてめえは……」

ドゴオオオオン！！

「本物つてわけだ」

霸王の正確無比な拳がpegasusを吹き飛ばす。

標的77 真の龍

「がはっ」

周りの幻覚はすべて消え、ペガサス本体も霸王の攻撃を受ける。

「さあ、終わりにするか」

やっと起き上がったペガサスは、攻撃を受けたところを苦しそうに押さえていた。

「くっ、あまり調子に乗らないことだ、2体から1体となった真の龍の力を見よ！！」

「2体から1体？リボンさん、奴の言っているのは？」

「ああ、前にも言ったが7属性の龍は2体に分割し、2つの匣として使うことができる、分けた時点でもその龍の力は国を滅ぼすほどの力を持つという、それが1つになったってことは……」

「世界を……滅ぼしかねない」

リボンに続けて獄寺がつぶやいた。それを聞いていた他の仲間にもその恐怖は伝わった。

「いくぞ霸王、いでよ霧龍下リボン・ネ・マイ・ネツビマ！！」

開匣する直前、霧龍の匣はありえないほどの波動を発していた。そ

して出現してなお、その力は変わらない・・・それどころか大地をも揺らすほどの力。

「ガアアアアア！！」

強大な叫びとまばゆい光と共に、虹龍の1角・霧龍は、真の姿で大地に降臨した。

「フハハハハハハハハハハハハハハハ、どうだ霸王よ」

冷静な表情ではあったが、霸王にもその力のすさまじさは伝わっていた。

「霧龍、私とひとつになるのだ」

霧龍と向き合い、両手を広げるペガサス。

霧龍は雄叫びをあげた後、炎と化してペガサスへ乗り移るかのよう
に合体した。

「うおおおおお、力があふれるてくる！！」

やがて合体が終わり、その姿があらわになる。

ついに合体した姿を現す。

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・」」」

リボン達はその姿を見て沈黙する。

「な、何も変わってねえぞ、コラ」

「失敗・・・したわけでもなさそうですし」

「だが、この違和感は・・・」

それは同じく霸王も感じていた。

(何ひとつ変わっていない、炎圧も先程となんら変わらない)

しかし、ペガサスの表情が明らかに変わった。

バキッ！！

「なっ」

「は、速い」

「炎を完全に抑えてやがったんだ」

超速のスピードで霸王を攻撃を当てた。

霸王は飛ばされていながらもペガサスの方に顔を向けるが、そこにはもういなかった。

「こつちだ」

ドゴッ！

声を向ける暇もなく地面にたたきつけられた。

(なんてスピードだ)

「どうだね僕の攻撃力とスピードは、7属性の龍と合体することを^{ドラゴンフュージョン}龍合体という、分割状態でも強い力を発揮するが、真の姿ではありえないほどの力になる」

それは攻撃を喰らった霸王が一番わかっていた。

血を口から吐き、なんとか立ち上がる。

「さすがは霸王といったところか」

「くっ」

(さてどうするか、スピードも攻撃力もオレを遥かに上回っている)

「どうした霸王よ、成す術なしか」

「炎圧が上回っていても、勝てる根拠にはならねえ」

「よかろう」

霸王に続き、ペガサスも構えをとる。

「いくぞ霸王」

ペガサスがその場から姿を消した。

（まずは動きを見切る）

ガッ！

右手拳を使い、ペガサスの攻撃を逸らした。

（超スピードを利用して逸らし、その隙をつくー！！）

バキッ！！

霸王の攻撃がペガサスの顔面を打った。

「……………」

しかし、まったく効いていなるそぶりを見せない。その一瞬の隙をペガサスは見逃さない。

ドゴッ！！

「ぐあ

回し蹴りが霸王の横腹にヒットした。

その場に膝を付き、立ち上がるのも苦しそうである。

「あの霸王がたったあれだけの攻撃でやられちまうのか」

「策があるとも思えねえしな」

かつてその力を目の当たりにした山本とリボンでさえ、そう思っ
てしまった。

「一息に消してやろう」

ペガサスの右手が光り出し、霧龍の形へと変わっていく。

「死ね霸王、紺龍破こんりゅうは……!!」

その場から離れようとしても、うまく体が動かないでいる。

ペガサスから発した巨大かつ純度の高い霧の炎が、霸王目掛けて放
たれた。

標的78 X BURNER VS 紺龍破

霧の炎のソウルフレイム・紺龍破こんりゅうはが霸王を襲った。

その力は、辺りの森をすべて破壊しつくすほどのパワーだった。

「ハハハハハハ、さらばだ霸王、我々の仲間にならなかったことを後悔するがいい」

ペガサスは勝利の雄叫びを上げ、焼け野原と化したフィールドを見つめていた。

すると、あるものに目が行った。

「バ・・・バカな」

焼け野原に本来あるはずのないものが存在した。

「なぜ肉体が残っている」

紺龍破によつて、すべてのものが破壊されたはずなのに、そこには横たわっている霸王の姿があった。

「真の龍の力を喰らつてなお、肉体が残るはずはない・・・」

ペガサスは死んだ（と思いついでいる）霸王を睨みつけた。だが少しすると、冷静さを取り戻した。

「まあいい、肉体が残っていようが死んでいることには間違いはない」

ペガサスは霸王に背を向け、他の仲間のところへと向かおうとした。

ザッ!!

謎の物音にペガサスの足が止まった。悪寒がペガサスを襲う。

恐る恐る振り向くと、そこには霸王が立ち上がる姿があった。

「どこへ行くんだ？」

「そ・・・そんな・・・バカ・・・な」

「闇属性のことは知ってるんじゃないのか!？」

そして霸王の体からかすかに鼓動のような音が聞こえてきた。

(何だ、この音は!?)

やがて鼓動は収まり、霸王の体が光り出す。

「うおおおおおおお!!」

コオオオオオオオオオオ

その光の直後、巨大な炎が霸王を纏った。

「くくく、闇属性の特徴は吸収、てめえの紺龍破の力、確かにいた
だいたぜ」

「くっ」

ペガサスはその巨大な炎を纏った霸王に思わず後ずさりをしてしまった。

(まさか、あれほどの炎を吸収するなんて・・・)

ペガサスは闇属性のことは熟知していたが、真の紺龍破ならば、吸収させずに体内の炎エネルギーをパンクさせられると思い、全身全霊の紺龍破を放ってしまったのだ。

「てめえのフルパワー、試させてもらっぜ」

ドゴンッ！！

「ぐあっ」

先程のペガサスのスピードを上回る速さでペガサスを撃ち抜く。

「ただだぜ」

そのままペガサスの服を掴み、膝蹴りを放つ。

そして追撃！！

「ビッグバンフレイム！！！！」

ドゴオオオオン！！

形そのものはツナのビッグバンアクセルにそっくりな技だった。

「ぐふっ」

口からドバツと血を吐き、手と膝をつく。

「オレをコケにした罰だ、跡形もなく葬ってやるぜ」

「くっ、貴様こそ私の力を見くびってないか、やっと貴様は私と互角、それか少し越えただけ、それだけで調子に乗るな」

霸王もペガサスも互い顔を真剣に見合わせていた。

「ならば、互いの最高炎圧で勝負といこうか」

「よかるっ」

ペガサスは一瞬でその誘いを受け入れた。考えがあつてのことかはペガサス自身にしかわからなかった。

「ペガサスの奴、今の状況で勝ち目があるのか？なあウィンディ」

「.....」

ウィンディはジェラートの問いには答えず、モニター越しにペガサスをじっと見ていた。

「霸王の奴これで決める気だ、勝てるんですかねりボンさん？」

「わからねえ、だが信じるしかねえ」

リボンや獄寺達もモニター越しに霸王をじっと見ていた。

そして霸王とペガサスの2人は最高の一撃を放つべく、その準備段階にいる。

ペガサスはすべての炎エネルギーと合体した霧龍の力を右手拳に集めていく。

対する霸王は左手で後方に炎を放っている。

やがて互いに準備は整い、攻撃段階に入る。

「いくぞ霸王、最大最高の紺龍破 - - - - -
!!!!!!」

ペガサスの右手から放たれた紺龍破は、霸王を攻撃した時よりも遙かに炎圧が上回っていた。

「ペガサス、てめえには負けるわけにはいかねえ、いくぞ!!!!!!」

後方への炎が更なる大きさへと変わる。

「X BURNER!!!!!!」

標的79 決着

X BURNERと紺龍破、2人の最高炎圧で放った攻撃がぶつかり合う。

互いに押しつつ押される状況が続く。

「ぐっ、渾身の紺龍破を放つてもなお、奴を上回ることはないのか……」

ペガサスの紺龍破が少しずつ弱まってきているのがわかった。

(僕は……こんなところで負けるわけには……ウインディ)

ペガサスは脳裏にボスであるウインディが現れた。それはウインディがペガサスを仲間に取り連れてくれた時のことだった。

当時ペガサスは16歳の時に両親を失い、学校でもイジメにあっていたのだ。

そんな時に会ったのがウインディだ。

ペガサスは出会った当時、ウインディにケンカを仕掛けていた。野望に満ちたその目が気に入くわないという理由で。

しかし結果はウインディの圧勝、トドメを刺されるかと思い、ペガサスは観念した。

「その覚悟、私の元で使う気はないか」
突然の質問に戸惑った。

「何言つてやがる」

「私の仲間になれ、私と共に来い」

ウィンディはそう言つて手を差し延べた。

ペガサスは意思と関係なく体が反応し、ウィンディの手を掴んだ。

(それ以来、僕の居場所はフィルマーレファミリーとなった、そんな僕を仲間に引き入れてくれたウィンディのためにも)

「僕は負けるわけにはいかない!!」

その覚悟はペガサスの霧のリングから純度の高い炎が灯させた。

弱まっていた紺龍破は、純度と威力をより上昇させ、X BURNERを押し返していく。

「くっ」

霸王のX BURNERは弱まつてはいないものの、紺龍破の威力が上回つていくため徐々に押されてきている。

(オレだつて負けられねえんだ、あの約束は……)

それは霸王がツナの体を媒介に、ボンゴレ?世と戦つた時のことである。

「霸王、オレ達ボンゴレがお前の仲間だ。お前は1人じゃない、オレ達がいる」

霸王は？世に言われたその言葉を忘れることはなかった。

(だからオレも、ピンチの時はオレが助けると・・・約束した!!)

「オレだって、負けられねえんだ!!」

その霸王の覚悟に、闇のリングから炎が灯る。

そしてX BURNERの威力が上昇した。

「くっ、奴の炎の威力が上がった・・・だが・・・」

X BURNERの威力は上がったが、紺龍破以上の威力はなく、少しずつ押されている。

(くっ、このままじゃ勝てねえ・・・そうだ!!)

霸王は両足に闇のリングから出ている炎を灯した。

「これで耐えるしかねえ」

霸王は後方に放っていた左手を正面に向け直した。

「いくぞ、XX BURNER・・・!!」

威力はX BURNERを遙かに上回る炎圧である。とっさに思いついたのは足を固定し、X BURNERを両手で放つ霸王の奥義・

標的80 クローム髑髏 VS ウーラノス

クロームは1人、ツナと別れた後森を進んでいた。周りは同じような景色が並んでいる。

そして、クロームが歩くその先の木の上に人影があった。

「こつちに霧の守護者が」

6神官の1人、ウーラノスだった。木の上で敵の待ち伏せをしている。

クロームはそうとも知らずにとことと歩いて来る。そしてちょうどウーラノスの真下にクロームが来た。

（今だ！）

「おらあああああ！！」

ドゴオオオオン！！

ウーラノスは渾身の一撃がクロームを襲った。

「へっ、ペシャンコになったまっただか」

そして、ついに霸王が真6神官を討つ！！

「ハア、ハア……」

ボロボロになった霸王の元へある人物がやって来た。

「へえ、まさに戦場の後って感じだね」

「お前……白蘭か！？」

「そうだよ、君が霸王だね、この地形を見るとかなり強そうだね」

「お前もな、伝わってくる覇気はそうとうなものだ」

2人は目を合わせただけで互いの実力を知ったようだ。

そして霸王は懐から匣を取り出した。

「なんの匣だい？」

「まあ見てな」

闇の炎を注入し、匣が開かれた。

匣からは大量の闇の炎が放出された。その炎は霸王を包み込んでいった。

そして5分ほどして炎が匣へと戻って行った。

炎の中から現れた霸王の体にはダメージが一切残っていなかった。

「何をしたんだい？」

白蘭にしてはめずらしく真剣ま表情で聞いた。

「闇属性の炎の特徴は『吸収』、この匣にはすべてのダメージを吸収するほどの大量の闇の炎が入っている、ただし時間がかかるため戦闘中には使えないんだ」

霸王の説明には白蘭も、モニターを見ていた人も素直に驚いていた。

「へえ、それはすごい匣だね、とにかく2人は倒したんだよね、それで勝利じゃないってことは……」

「ああ、ターゲットはウーラノスだ」

霸王と白蘭はターゲットを突き止めると、クロームを探しに飛び立った。

ハンマーは容赦なくクロームを潰した、だが……。

(なんだ？手応えがまるでなかった……)

「ん？」

突然ハンマーの下から霧が発生した。

「ちっ、幻覚だったか」

ウーラノスはハンマーを上げ、辺りを見回す。今のところ気配はない。

(さあ、どこから攻めて来る、クローム髑髏!!)

ポコッ!!

「ん?」

ドゴオオオオン!!!

地面の至る所から火柱が発生した。ウーラノスはその火柱の中に飲まれていった。

「おりゃああああ!!」

ドゴオオオオン!!

幻覚の効かなかったウーラノスもすかさずハンマーをたたき付けて火柱に対抗した。

地面に亀裂が入り、火柱は吹き飛んだ。

「!!!」

後ろから気配を察知したウーラノスは体を回転させハンマーを振り回した。

表情が後ろを向いた時、そこにはクロームの姿があった。

「ドンピシャリだぜ」

バシューウウウウウー！！

「何！？」

ハンマーはクロームの体を直撃したが、その瞬間霧状になった。

（幻覚だと、だが確かに気配はした）

そして、辺りからたくさんの気配がした。

見回すと、そこには5人のクロームが姿を現した。

「夢幻の波動か、だがわからなければ、全部消せばいい」

ウーラノスはその状況を冷静に分析し、攻めに入った。

「おらあああああ！！」

次々とクロームを撃破していく。

バキッ！！

「ぐっ」

ウーラノスが一閃を喰らった。しかし、それも計算の内だった。

(ならてめえが本物だ!!)

ハンマーを振り回そうとするが、手が止まった。

「なっ、てめえは……」

ウーラノスに一撃を入れたのはクロームではなかったからだ。

「クフフフフ、シヨーはこれからですよ」

標的 81 イリユージョン

ウーラノスに攻撃を放ったのはクロームではなかった。

「てめえは……六道骸!？」

目の前にいたのは六道骸だった。

「ただの幻覚だろうが、消えやがれ!！」

右手に炎を集め、骸に向かって放つ。

「クフフフフ」

骸はそれを避ける仕種はなく、余裕そのものだった。

パンツ!!!

「白拍手!!!」

さらには白蘭。

「X BURNER!!!」

ドゴオオオオン!!!

「うお!!!」

そしてツナまでもが姿を現した。

「ど、どうなってやがる!?!」

ウーラノスは少しずつ焦りの表情を見せ始めた。

なにせ、目の前には六道骸、白蘭、沢田綱吉がいたのだから。

「クフフフフ、これこそがアルコバレーノと本物の六道骸が修業させ、クロームに見極めさせた霧属性最強の技・イリユージョン!」

「確かに幻覚だけど、このうち綱吉君か骸君、そして僕のどれかがクローム罫體がなりきっている本物だからね」

「たとえ見破ったとしても骸、白蘭、そしてオレと同じ戦闘力、技を使えるからお前に勝ち目は無い」

骸、白蘭、ツナがそれぞれウーラノスに向かって話した。

「なるほどな、それに夢幻の波動を放っているからまず見破ることもできないわけか」

話しを聞いている中でもウーラノスはなぜか冷静だった。まるで策はまだあるかのように。

「それなら出し惜しみはなしだな、晴龍!」
下「ラゴナーネ・テル・セレーノ」

再び龍が姿を現す。晴龍を自分の右手に纏わせ、戦闘体制に入る。

「じゃあ僕から行くよ、白龍!！」

白蘭も似たように白龍を右手に纏わせ、ウーラノスへと襲い掛かる。

ガキン!!!

「うおおおおお」

「ハアアアア」

互いに纏わせた右手をぶつけ合う。

すると白蘭は右手を1度退かせ、再びウーラノスに向かって放つ。

「シロリツ白龍爪!！」

ドゴンツ!!!

ウーラノスは動かず白龍爪を受け止める。

ボコツ!

「ん?」

ドゴオオオオン!!!

「うおっ」

地面から突如炎の柱がウーラノスを襲った。

「骸か、しょせんは幻覚だ、効かねえよ」

ウーラノスは体内の炎エネルギーを氣として放ち、白蘭と火柱を退かせた。しかし、目の前の白蘭の後ろからツナがこちらに向かっていた。

ドゴツ!!

「ぐあ」

正面からのストレートを喰らい、吹き飛んだ。

「トドメだ」

ツナは後方に柔の炎を放ち、X BURNERの準備をしたが……

ポオオオオオ!!

「何だ!？」

ウーラノスが吹き飛ばされた方向から巨大な炎が発生した。

そして突然ツナの目の前に影が指した。ふと上を見ると、そこには全身に晴の炎を纏ったウーラノスがいた。

ドゴツ!!

ウーラノスの回転蹴りはツナを一瞬で地面に叩きつけた。

「いつの間に!?!」

骸が気を取られているうちに、ウーラノスが姿を消す。

ドゴッ!!

「ぐっ」

次は瞬時に骸の前に現れ、横殴りを腹に入れた。

(バカな、見えなかった)

白蘭の目ですら追えない速さ。するとウーラノスは目前に接近していた。

「黄龍破!!--!」

至近距離からのソウルフレイムが放たれた。

「白拍手!!--!」

パン!

とっさに白拍手で黄龍破をかき消すも、炎圧が高かったため、手から血が吹き出した。

「ぐっ」

ウーラノスは手を引っ込ませ、再び黄龍破を放つ。

「2度は防げまい、黄龍破!!」

ドゴオオオオン!!

「ぐああああ!!」

黄龍破は白蘭に直撃。ウーラノスはほんの1分足らずで3人を倒してしまった。

標的 82 霧止まぬ幻

「あいつも龍との合体を!？」

「つ、強い、幻覚とはいえ実力はほぼ同じなはず……」

「心配いりませんよ」

みんなの心配の中、突然声を入れたのは骸だった。

「確かに龍合体をした彼の^{ドラゴンフュージョン}実力は最強クラスと言えるでしょう、しかし彼も言うように……」

骸は一瞬の沈黙の後、こう言った。

「しよせんは幻覚なのですよ」

その言葉を聞いていたみんなは、その意味がわかる者とわからない者にわかれた。

しかし、意味がわかる者達には少なからず希望が見えていた。

(クローム、お前なら大丈夫です、幻覚だけが霧ではないのですから……)

ウーラノスは3人を一時退けた。空へ浮かび、3人をジッと見ていた。

「クローム髑髏は白蘭か」

ウーラノスは先程の攻撃で、クロームが誰に化けているかを見極めていた。
そして白蘭、骸、ツナの3人は起き上がり、ウーラノスを睨みつける。

「なかなかやるな、だがいつまでもやられてはいないぜ」

ツナが再びウーラノスへ先手をかける。

(幻覚はシカトだな)
ウーラノスは向かってくるツナを高速で回避し、白蘭へ速攻をかけた。

「龍の爪!!!」

ザクツツ!!!

ウーラノスの右手に纏っていた炎が巨大な爪の形をして、白蘭を切り裂いた。

「これで終わりだ!!!」

「何がだい？」

「なにっ!?!」

体を貫かれたというのに白蘭は平然としていた。

「まさか、幻覚か!？」

(いや、確かに奴には一瞬のブレが生じたはず……)

「それは自分で確かめなよ」

ガッ!!

「ぐあっ」

白蘭の白龍を纏った右手がウーラノスを裂く。

(幻覚じゃ……ねえのか!??…)

「!?!」

そしてウーラノスはあることに気がついた。

白蘭を貫いたはずの右手が、よく見ると白蘭に届いていなかった。

(バカな、まさか……認識させなかったというのか!?)

「夢幻泡影むげんぼうえい、霧の炎の力であなたの視界に小細工したの」

やがて本物のクロームが姿を現すと、認識スラシの技の説明をする。

「イリユージョンとの組み合わせにより、本物が紛れ込めば最高の

詐欺ヘテウとなる・・・というところだな」

今現在、ウーラノスの前に幻覚はない。あるのは本物のクローム髑
體、霸王、白蘭である。

「さっきも言ったけど、幻覚と本物の攻撃力はケタが違うよ」

「よかろう、3人まとめて吹き飛ばしてやろう、晴龍!!!」

白蘭の言葉に憶することなく、晴龍を体に纏わせる。

「じゃあオレらも行くか!!!」

3人のリングから炎が放出される。

「いくぞ、黄龍破.....!!!」

「迎え撃つぞ、クローム、白蘭!!!」

クローム、白蘭は霸王に続く。

3人の究極合体技が、黄龍破に対抗する。

「「「白閻流はくあんりゅう・夢幻爆炎破むげんばくえんは!!!!」」」

標的83 霸王と白蘭

扉が開き、勝者の3人が戻って来た。3人の奥義、はくあんりゅう白闇流・むげんば夢幻爆炎くえんは破は見事に黄龍破を下し、勝利したのだ。

「霸王、白蘭、てめえらどの面下げて来やがった!!」

帰ってくるなり獄寺が霸王と白蘭に怒鳴った。他のみんなも獄寺ほどではないが多少なりとも警戒心を抱いていた。

「オレは？世との約束を果たすために現れただけだ、もう二度とてめえらの前には現れねえよ」

「どついう意味だ？」

その言葉に対して疑問を持ったのはリボンだけだった。

「ツナの体から出る、それにはもちろん魂の消滅を伴うけどな」

「そんなすぐに決めることでもねえだろ、ツナと話し合ってから決めても遅くはねえ、それに結果的にツナを助けたんだ、獄寺も了承しろ」

「ぐっ、わかりました」

リボンに強いられ、獄寺はしかたなく了承する。

「じゃあ、少し休む」

霸王はそう言うと、炎が体を纏い、本来のツナに戻った。

「10代目、ご無事で!？」

「あ、うん」

「だが霸王はともかく、問題はてめえだ白蘭!!」

「そうだけ、何でここにいるんだ？」

「しかも、お前この時代の白蘭だろ!？」

リボーンはその核心をつく言葉に、みんなは内心ビクついた。目の下に模様はなく、髪型も多少違う。確かに未来での白蘭ではない。

「僕は未来での出来事をすべて知っている、何故ユニが僕にまで教えたのかはわからないけどね」

「ユニが・・・」

「その後、今の力を引き出すためにボンゴレ9代目に連れていかれたんだ」

「き、9代目だと!？」

「まさか、そんな・・・」

白蘭から放たれた衝撃的な言葉、ツナ達は言葉を失った。

まさか9代目が白蘭を送ったとは誰もが予想できなかった。

「まあ僕も今更世界をどうしようなんて思ってないし、それに9代目からボンゴレ10代目に力を貸してくれって言われてるしね」

「オ、オレの・・・!?」

「まだボンゴレに忠誠を誓ったっていう証拠がないから右足に枷がつけられているんだけどね」

白蘭の右足にはボンゴレの紋章がついた枷がはまっていた。そして、白蘭は右手についているリングを見つめる。

「このマーレリングも、9代目が封印を解き、僕に預けてくれた。だから君達がどう思うと僕は綱吉君の力になるつもりでいるよ」

「騙されなくてください10代目!!!こいつはそんな奴じゃありません!!!」

やはりというか、当然のように獄寺が噛み付いて来る。確か未来であんなことをされては、すぐに信用しろという方が無理である。

「別に戦っても構わないよ獄寺君、実力なら僕の方が上だしね」

「いいぜ、掛かって来やがれ!!!」

白蘭はリングを、獄寺はダイナマイトを構える。

「ちょ、ちょっと待ってよ、獄寺君、白蘭も、今はそんなことをしてる場合じゃないって」

ツナの静止に白蘭と獄寺は引き下がった。しかし、獄寺はずっと白蘭を睨んでいた。

「まさか白蘭が仲間とは恐れ入ったぞ」

「ウインディ!!!」

「では続いて4回戦といこうか、4回戦はロットチヨイス、ワールドとメンバーの数はジャイロルーレットで、メンバーはくじ引きだ」

「クジ？」

「そこにメンバーの名前を書いた紙を入れてある、ルーレットの数分だけ引くのだ」

ボンゴレサイド：4人

フィルマーレサイド：3人

フィールド：雷

と決定した。

そしてツナの引いたメンバーはディーノ、雲雀、マーモン、風の4人。

「ほう、アルコバレーノも参戦か、ではこちらのメンバーを発表だ」

ウインディはモニター越しに紙を見せた。

「!!!!」

ツナ達に衝撃が走った。メンバーは静香、ヘリオス、そしてウィンディ。

「ウィン・ディ」

「奴の实力は未だわからねえ、用心していけよ」

リボーンはディーノ、雲雀、マーモン、風の4人に言った。

「フフ」

ついに白いベールに包まれしウィンディの力が明らかになる。
そしてボンゴレサイドも

「僕が咬み殺してあげるよ」

「あんま無茶すんなよ」

ついに参戦を果たす最強の守護者と若き跳ね馬。

「あとで金はもらえるんだろうね!？」

「これは油断できませんね」

最強を謡う赤ん坊、アルコバレーノも加わり、4回戦の戦いははたして……

標的84 ロットチョイス

ロットチョイス、ルールは敵全員を下した方が勝ちという特殊なルール。

「うふふ、一体誰が私の相手になるのかしら!？」

「ふつ、相変わらずだな、静香」

「何よウィンディ、ボンゴレ?世もかわいいけど、学生服のボウヤと跳ね馬の彼もなかなかかわいいじゃない!？」

何故か気分のルンルン状態の静香にウィンディは少し呆れていた。そしてこの静香という女こそ、リベルにツナ暗殺の命令を送った張本人である。

一方ヘリオスの方は、完全に回復していない状態での参戦。白蘭にやられた傷が生々しく残っている。

「無理をするなよヘリオス」

「へっ、お前の恨みが晴れない限り、死ねねえよ」

そして超チョイス4回戦、ロットチョイスがスタートする!!

戦場に降り立った7人の精鋭。

ロットなだけに、またもやバラバラになってしまった。

それぞれの目の前には倒すべき敵のみがいる。

「君が僕の相手かい!?!」

「まあ、学生服のボウヤじゃない、ラッキー」

「確かにラッキーだよ、僕に咬み殺されるんだから」

ギラツとした雲雀の眼光の下には真6神官の静香。

「お前は確か、跳ね馬のディーノ、匣も持たねえお前に勝機はないぜ」

「お前はヘリオス、白蘭にやられた傷は癒えてないようだな、それに匣はなくてもリングがある!」

ディーノはヘリオスと対峙。そして -

「まさかアルコバレーノが2人とはな・・・」

「なんだい、この強力な威圧感は!?!」

「一瞬でも気を抜けばやられますね」

風とマーモンはXANXUSをも圧倒するフィルマーレのボス・ウインディ。

まさに見事に組み合わせられた対決、たとえ目の前の敵に勝利しても全員を倒さなければ勝ちにはならない。

この3試合が同時に死闘の火蓋を切った。

ヒュッ！！

雲雀の一閃が空を切る！

「いきなり女性相手に本気で武器振るう？」

「そんなことは関係ないよ、それより君も掛かって来なよ」

手加減という言葉を知らない雲雀は、静香に次々とトンファーを振りかざしていく。まさに獣を全力で狩るライオンのように。しかし・・・。

5分ほどが経ち、未だトンファーを振るい続ける雲雀。だが、一撃たりとも静香には届いていない。

「何のつもりだい、よけてばっかりで!？」

「・・・・・・・・」

「答えないつもり!？なら無理矢理にでも聞こう」

雲雀は手に付けている雲針鼠ボルコスヒノ・ヌーヴォラのロールのアニマルリングに炎を注入しようとした。その時、静香が口を開いた。

「だってさ、一撃も当てられない奴なんてたかが知れてるじゃない、そんな相手に攻撃できるとでも思ってるの!？」

その言葉に雲雀の眉がピクツと反応する。

「どうしても相手してほしいなら私に一撃入れてみなよ」

雲雀を小バカにしたような態度で笑う静香。

頭に来た雲雀は、ロールを出現させず、トンファーのみで静香を砕こうとした。

「なら、本気で咬み殺してあげるよ!!」

「!?!?!」

(何この子、すごい威圧感・・・)

さすがの静香も怒りをあらわにした雲雀の殺気を肌で感じた。

「行くよ!?!」

標的85 雲雀恭弥 VS 静香

まさに嵐にも負けない怒涛の攻めを見せる雲雀。先程までとはスピードが圧倒的に違った。

「くっ」

なんとかかすべての攻撃を避ける静香だが、雲雀は静香の動きを見破り始めていた。

「そこだね」

バキッ!!!

そしてついに一撃目が入った。

「咬み殺す!!!」

体制を崩した静香に猛烈な攻撃を浴びせた。一度攻撃が入ったらその手が休まることはない。

「もう終わりがい? つまらない」

雲雀はプイッと方向を変え、立ち去ろうとしたその時 -

(!!!)

ガキン!!!

何かが来るのを察知し、振り返りトンファーで防御すると、そこには刺のついた鞭が巻き付いていた。

「ふうん、やっと本気になったようだね」

「よくもいたぶってくれたわね、ぐちゃぐちゃにしてあげるわ!!」
巻き付いた鞭を雲雀ごとグイッと引っ張り自分の方へ引き寄せた。
そのまま鞭を外し、再び雲雀に向かって飛ばす。今度のは雨の炎を纏わせて。

キンッ!!

再びトンファーで防御するも、弾かれてしまった。これでトンファーは片方になってしまった。

「オホホホホ、甘く見ちゃダメよ!!」
そして再び刺鞭が襲い掛かってくる。
しかし雲雀はヒョイと軽くかわし、その隙に静香へ突っ込む。

ザクッ!!

とトンファーの音とは別のそれがした。避けたはずの鞭の先端が方向を変え、雲雀を切ったのだ。

「オホホホホ」

高い笑い声とは裏腹に、雲雀のムカツキ度は頂点に達しようとして

いた。

「オーホツホツホツホグツ……」

静香の笑い声が突然変になったと思ったたら雲雀がトンファーを静香に投げつけたのだ。屈辱的な状態での雲雀らしいといえは雲雀らしい。

「おのれ、このガキンチョ!!!」

雲雀はその間に弾かれたトンファーを取りに走った。しかし、静香も隙を逃すほど甘くなかった。

「ぐっ!!!」

突然響く雲雀の声。そしてポタツと血が落ちる。

雲雀の体に静香の刺鞭が巻き付かっていた。

「オホホホホ、痛いでしょうボウヤ、もっと苦痛の叫び声をあげなさい」

さらに静香は鞭を締め付ける。

常人ではない痛み、さらには鎮静の炎が体に染み込んでくる感覚には、さすがの雲雀も表情が変わる。

「ぐっ、調子に……」

「ん?」

「乗らないでよー!!」

ボウツ!!!!!!

「なっ!?!」

突如雲雀から巨大な雲の炎が放たれた。雲雀を纏うというよりは、リングからの炎が巨大すぎて、全体を覆っているようである。

「ロール」

雲雀がそう名前を呼ぶと、ボルコスヒーノ・ヌーヴォラアニマルリングより雲針鼠が出現した。

「キュウウウウ」

ドゴオオオオオオオオオオ!!!

ロールが超高速で静香に突っ込んだのだ。いきなりの奇襲で静香にクリティカルヒットした。

その隙に雲雀はヨタヨタと苦しそうにトンファーを拾った。そして静香の方も立ち上がって来た。

互いの体は互いの刺によりボロボロの血まみれである。

「痛い……じゃない……刺の回転攻撃だなんて……私のよりヒドイじゃない」

ボウツ!!!と再び雲雀がリングに炎を灯した。

「なら私も見せてあげるわ、下リリコーネ・ティ・ピオッジャ雨龍！！」

「！！！！」

雲雀の前に立ちはだかる雨の龍、しかも完全体のそれである。その龍を見上げ、雲雀がつぶやいた。

「今の僕には、その龍は止められそうにもないようだね」

「オホホホホ、さすがのあなたも怖じけづいちゃったかしら」

「でも、負けを認めたとは一言も言っていないよ」

ロールが雲雀の前に降りて来た。

「倒せないならば、倒さなければいいんだから」

目の前のロールに、巨大かつ高純度の炎を与え始めた。雲雀はいつまで経っても雲雀恭弥である。10年後の自分が使っていた技だろうと、使えないはずはない！！！！

「君をかつて味わったことのない世界で、咬み殺してあげる！！」

標的86 デイノ VS ヘリオス

「跳ね馬乱舞!!!」

「その程度では当たらんぞ!」

リングを持つが匣を持たないデイノ、リングと匣を持つが白蘭にやられ、ボロボロのヘリオス。互いの攻撃は未だまともに当たっていない。

「次はこっちの番だぜ、太陽弾たいようだま!!!」

ドゴオオオオン!!!

「くっ」

なんとか逃げ切ろうとしたが、肩を少しかすった。しかし、攻撃力はそこまであるわけではなかった。

(こつなっ たら早目に決めた方がいいな)

ヒュヒュヒュヒュヒュ!!!

「ん?」

パァン!!!

大きな音と共に土が舞い上がる。その土はヘリオスの視界をふさぎ、怯ませた。

「行くぞヘリオス、跳ね馬乱舞・乱れ咲き!!!」

シパパパパパパパパパパパパパパパパ!!!

「ぐっ!!!炎の使い方がなっちゃいねえ」

「何!?!」

「太陽弾たいやうだま!!!」

ドゴオオオオン!!!

今度はまともに太陽弾がディーノに当たる。

「ハア、ハア、さあトドメを・・・なっ!?!」

ディーノにトドメを刺そうとした瞬間、ガクツとヘリオスが膝をついた。

(バカな、先程の攻撃ごときでダメージを・・・!?!?)

「見る、ちゃんとダメージを受けているじゃないか」

立ち上がったディーノの一言、この状況ではおそらく次が互いの最後の攻撃となるだろう。

2人の息もだいぶ上がっている。

ボウツと2人のリングに炎が灯った。

ディーノは鞭に、ヘリオスは手にそれぞれ纏わせ、互いに睨み合う。

「
.....
.....」

この攻撃ですべてが決まる、2人の脳裏にはそれがあつたため、ほんの一瞬ですら隙を見せない。動きを止めてから数分が経過した。そしてディーノが先に動いた。

迷いのない目でヘリオスに突っ込んで行く。

「うおおおおお、光速天翔（サルト・ヴォランテ・ヴェローチエ・コメ・ルーチエ）！！！」

10年後の自分が使った奥義、対するヘリオスは周りに小さい晴の炎を纏った太陽弾を出現させた。

「たいようまじし太陽嵐！！」

ヘリオスはそれらすべてをディーノに向かって放つ。

ディーノも臆することなく突っ込み、太陽嵐を打ち落として行く。ヘリオスの太陽嵐がディーノを下すか、ディーノが太陽嵐を抜けるか。

「裏球針態！」
うしろきゅうしんたい

ホルコスビートノ・ヌーヴォアラ
炎を浴びた雲針鼠はほとんど巨大化していく。

「巨大化させてどうするつもり！？そんなの私が壊してあげるわ、
ドラムーネ・ディ・ピオッジャ
雨龍！」

バチッ！！

「なっ！？」

雨龍が裏球針態に弾かれ、静香のみが飲み込まれた。

「戦う者以外を遮断する空間、それが裏球針態、さあ、決着をつけ
ようよ」

（この子、あくまで私とガチンコ勝負をしたいのね、おまけにここ、
空気が薄い）

ホルコスビートノ・ヌーヴォアラ
裏球針態、雲針鼠を巨大化させ、戦う者以外を跳ね除ける絶対遮断
空間。また、球針態を保つために酸素は著しく減っていく。

「互いに持つ時間はわずか、酸素が切れる時間がリミット」

「いいわ、勝負よ！！」

2人が同時に地面を蹴った。

「薔刺の舞い！！」
ばいばい

静香の刺鞭が生きているように動き回っている。

雲雀は向かって来るそれを次々に弾き、静香との間合いを詰めて行く。

「やるわね、これならどう、鞭竜巻むちたつまき!!」

静香は鞭を引き戻し、今度は鞭が竜巻のように回転させ放つ。しかし、雲雀はいとも簡単に避け、さらに距離は近づく。

「避けただけじゃ防げないわよ」

「だろうね」

「!!」

雲雀は再び鞭が自分に向かうことはわかっていた。膨大な雲の炎を灯したトンファーで迎え撃つ。

ガガガガガガガガガガガガガガ!!

「!!」

バキッ!!

鞭竜巻がトンファーを砕き、雲雀の体をえぐった。

「ぐっ……」

「回転攻撃よ、そんなトンファーごときで耐えられるわけないわ」

(ハア、ハア、そろそろ空気も体も限界ね)

裏球針態の前にすでに互いの体は血まみれだった。ここまで動くのもまたおかしい。

「トドメよ雲雀恭弥!!」

膝をついて動かない雲雀に容赦なく静香の鞭が襲う。そして鞭が雲雀の寸前まで来たその時 -

「これ以上僕を・・・怒らせないでくれる!?!」

ゴオオオオオオオオオ!!

「うっ」

雲雀に当たる直前で鞭が止まった。いや、静香が止めたのだ。

(な、何今の!? 畏怖の波動!?! それにしては強力すぎる)

静香が考えている内に雲雀が立ち上がる。

「さあ、終わるよ」

「くっ、ただの偶然よ、あんなガキに気圧されるわけないわ、それに終わるのはあなたよ、武器もないのに・・・なっ」

静香は自分の目を疑った。壊したはずのトンファーを2本とも雲雀が握っていた。しかもよく見るとトンファーではない。『トンファーの形をした雲の炎』だった。

「げ、幻覚よ、殺してあげるわ」

鞭を後ろに振り上げ、再び攻撃を放つ。

バチッ！！

「ふふっ……あっ！！」

弾かれたのはトンファーではなく、静香の鞭だった。

「こんな……いとも簡単に……」

「終焉の炎・クラウドエンド！！！！！！」

「うおおおおお！！！！」

（ひるまねえ、どこにこんな力が……）

太陽嵐をすべて打ち消し、ディーノが最後の一撃を放つ！！

「いくぜヘリオス、光速天翔（サルト・ヴォランテ・ヴェローチエ・
コメ・ルーチエ）！！！！」

シユパパパパパパパパパパパパパパ！！！！

標的87 風・マーモン VS ウィンディ

雲雀は静香を、ディーノはヘリオスを見事に倒した。

しかし、参加メンバー全員を倒さなければ勝ちにはならない。しかし、今の2人には歩くことすらままらない状態である。

雲雀はその場に座り込んだ。静香との戦いで血を流しすぎたようだ。同じくディーノもその場に腰をついた。

そして、もうひとつの戦場では -

「ハア・・・ハア・・・」

「・・・・・・・・」

「マフィア界最強と謳われるアルコバレーノといえど、我が力をもつてすれば捻り潰すことなど造作もない」

気絶しているマーモンと苦しそうに膝をつく風。雷の炎でコーティングされた地面にも数カ所砕けている。

（一体どうなっているんだ！？こちらの攻撃は少しも当たらないし、あの位置から動いた形跡もない）

「ふふ、何故そこまでなったのか不思議だろう」

「！..！」

「教えようではないか、私の持つ力は時空を越えるものや時渡りだけではない、ここではただ敗北のみを知るがいい」

今までその位置を動かなかったウィンディがゆっくりと風に近づいてくる。

スツと手を構え、ウィンディは風とマーモンにトドメを刺した。

「だあ………、何も見えねえじゃねえか!」

「これじゃ今どうなってるのか全然わかんねえな」

待機室のモニターがすべて破壊されていた。遡ることチョイス4回戦スタート時・

4回戦メンバーである雲雀、ディーノ、マーモン、風が行った後、ウィンディがモニター越しに挑発してきたのだ。

「たった4回戦ごときで私が参加するとは思わなかったな」

「んだと、このヤロー」

「なんと生意気な」

もちろんこの獄寺とレビイの言葉はウィンディには届いていない。

「まあ私の実力を1人知っているものはそこにいるがな」

その言葉に反応したのはもちろんXANXUS。なんせ彼は10年前の状態でウィンディと対峙したからである。

「XANXUS、10年前のお前は私の力は知っていよう、といってもすぐ気を失った貴様は覚えていないのかもしれないがな、ハハハハハハハハ「るせえ!!!」」

ドゴオオオオン!!!

「うわ」

「んな!？」

ウィンディの発言にキレたXANXUSは銃でモニターをすべて壊してしまっただ。ゆえに状況がまったくわからない。

そしてその3分後にマーモンと風が、5分後にディーノが、10分後に雲雀が戦闘不能で待機室に戻された。

「4回戦は私達の勝ちだ」

再び新たなモニターが現れた。

「そんな、雲雀さん、ディーノさん、風、マーモン!」

しかし、ツナの言葉は4人は届いていなかった。

(まさか雲雀まで負けちまうとはな)

(ウィンディ、やっぱりこいつは・・・)

結局4回戦の状況をウィンディはボンゴレ側全員に見せた。

誰1人口を開けない状態でいた。ウィンディは傷ひとつつかず、そして『現れた位置から一歩も動かずに』アルコバレーノ2人に勝利し、その後傷だらけのディーノと雲雀を一蹴、4回戦に勝利していた。

「雲雀恭弥だったか、さすがはボンゴレ最強の守護者というだけはある、あれほどの傷である戦闘力はすばらしい、私の前では意味を成さなかったがな」

ウィンディは高笑いの後、5回戦の幕を切らせた。

標的88 ラバーチョイス

勝負はついに5回戦へと突入。4回戦はいとも簡単に決着がつき、映像を見ただけではウィンディのさらなる能力はわからなかった。ただひとつだけ確かなことはウィンディは万全状態のアルコバレイノ2人、ボロボロではあったがキャバツローネの若きボス・ディーノ、そしてボンゴレ?世と同じ『終焉の炎』を使った最強の守護者である雲雀を負かせたことである。

現在2勝2敗、この5回戦で流れが決まりそうである。
そしてルーレットの結果は -

「5回戦はラバーチョイス、その名の通り奪い合いの対決だ」

「う、奪うって・・・一体何を!？」

「これだ!!!」

ウィンディがツナ達に見せたのは羽根の生えた小さな妖精のような生き物だった。

「こいつを先に捕まえた方が勝ちだ、先に言うておくがこいつはスピードがとても速い、頭も使わないと捕まえられないぞ」

そしてルーレット結果 -

ボンゴレ：リボン、ツナ、コロネロ

フィルマーレ：ケルベロス、ジェラート、ガイア

フィールド：雲

という結果になった。

「ツナ、コロネロ、オレは空を飛べねえから捕まえるのはお前達にまかせる」

「わかった」

「まかせとけ、コラ！！」

「ここはケルベロスとガイアにまかせたぜ、オレは沢田綱吉と闘ければそれでいいからな」

「ジェラート、お前・・・」

「いいではないですかガイア様、ジェラート様が沢田綱吉を倒してくれればボンゴレの戦力は落ちます」

「くっ、わかった」

ガイアはケルベロスの提案にしぶしぶ承諾した。

「ただしジェラート、負けたらただではすまんぞ」

その言葉にジェラートの表情が一変した。目つきは標的を睨み殺すほどに。

ガッ！！

「うぐっ」

「てめえ、誰に言っただ！？このオレが・・・『負ける』だと！
！てめえこそ次言っただただじゃすまさねえぞ！！！」

ガイアの首を掴んでいるジェラートの手は、今にも殺してしまうほどの力が入っていた。

（10代目！！）

（ツナ）

（ボス）

（沢田）

守護者達はツナに心でのエールを送った。何も言わなかったのはそれだけ互いに信頼し合っている何よりの証拠だった。

リボンとコロネロもそれを察知したのか、誰とも言葉を交わさずに扉へと向かった。

雲フィールド、その名の通りまわりには雲が存在し、その場所は・

「えっ、どこって……上空……!?!?」

「うるせーぞツナ!」

バキッ!!

「そんなことでいちいち騒ぐな、コラ!」

ドゴッ!!

2人の攻撃が一瞬でツナをボロボロにした。

「ててて、殴んなくてもいいだろ!?!」

「ムカついたからな!?!」

(ハモった……)

「さあ、ルール説明といこうか」

「「「!?!?!」」」

「見ての通り周りは雲でいっぱいの上空だ、まあソリッドビジョンなので地面付近に雲が存在すると考えればいい」

ウィンディの言う通り空に浮かんでいるというより、空に立っている感じである。

「もちろん勝利条件はこの妖精を捕まえた方の勝ちだ、そこは雲フィールド、まわりの雲は死ぬ気の炎で生成してあるが触れてもダメージはなく、炎で攻撃すると消滅していく。ただし雲属性の特徴はお前達の知っての通り『増殖』なので次々と増えていく」

「つまり目の前を遮る雲を利用し、妖精を捕まえるってことか」

「それに加え敵が潜んでいる可能性もある、先程も言ったように炎で攻撃すれば雲は消えるが次々と増殖してくる」

「直感と運、頭脳も必要になってくるわけだな、コラ」

「それでは超^{ハイパー}チヨイス第5回戦・ラバーチヨイス、開始!!!!」

標的89 沢田綱吉 VS ジェラート？

「コロネロ、ツナ、お前ら2人は二手にわかれて空を飛べ」

「リボーンは？」

「オレは地上でお前達の援護をする」

ツナとコロネロの2人は互いにコクツと頷き、空へと飛んだ。

「武運を祈るぜ、コラー！」

「ああ！」

そしてツナはある程度距離を飛ぶと、ある位置で止まり、下の雲をジツと見つめていた。

至る所に目をやり、かすかな動きにも反応できるように集中力を高める。

そして数分後、雲に一瞬の動きがあった。ツナは高速でそこに向かい、向かう途中でナッツを形態変化カンビオ・フォルマさせた。

(?世のガントレット) (ミテーナ・デイ・ボンゴレ・プリーモ) !
!!--)

「ビッグバンアクセル!!!」

放たれた炎エネルギーの塊は雲を次々と粉碎していった。そして広範囲の雲が消えた。

(いない・・・)

辺りを見回しても敵の姿はなかった。しかし次の瞬間再び雲が動くのを感じた。

(いる・・・この近くに・・・)

高鳴る心臓の音、増す集中力、ツナは空へ上がり、少しでも視野を広げようとした。

「!!!!」

(影が・・・)

ツナの影が一瞬ブレた。そのコンマ秒の瞬間をツナは見逃さなかった。

そのまま体制を180度旋回させると、自分の上からひとりの青年が刀を振り下ろす姿が目に入った。

ガキッ!!!!!!

「よく受け止めたな、影も重ね、そのまま刀でブスリといくつもりだったんだが・・・ほんの一瞬ズレたのを見逃さないとは・・・」

「前のオレとは一味違っぜジュエラート……！」

「……！！！」

リボーンはコロネロかツナ、コロネロはツナかりボーンが誰かと交戦しているのを空気の流れで感じ取っていた。

「ツナかりボーンが誰かと出会ったか、コラ……！オレも待ってるだけじゃラチがあかねえ」

と背中中のライフルを構え、雲に向かって放った。

「マキシマムバースト……！！！」

ドゴオオオオン……！！

雲は次々消えていき、そこから感じた気配にライフルを止めた。

「やれやれ、野蛮な赤ん坊だな」

「……！！！」

吹き飛ばした雲の中から赤髪の青年が現れた。

「お前は確か・・・ガイア!?!」

「お初に、アルコバレーノ・コロネロ」

「お前がオレの相手か、コラ!?!」

そしてさらにコロネロの前に突如霧が発生した。

「いやいや、私もここに・・・」

「2人が、いいぜ、かかって来い、コラ!?!」

「さすが10代目!?!」

「やるなあツナ」

先程のツナの防御パフォーマンスは見事さに皆驚きを隠せないようだった。

「一味違っ?、どう違っか見せてもらおう」

ガキン!?!

2人は反動で距離を作り、地面へ降りた。

ツナはすかさずジェラートに攻撃を仕掛けた。

迷いなき真つ直ぐな拳をジェラートに向けて放った。

(一直線か、こんなもの・・・いや、フェイントか)

ジェラートに届いたのは拳と見せかけた蹴り、見事によけられその攻撃は空を切った。

しかしツナはその勢いのまま再び拳をジェラートに向けて放つ。

ドゴッ！！！

「ぐっ！！」

(入った！！)

「なんてね」

「！！！！」

ツナの拳はジェラートの腹の前にあつた手の平で止められていた。そのままジェラートはツナの手を掴み、引き寄せた。

「捕まえたぜ、死ね！！」

自由な右手に持つ刀を振り落とした。

「10代目!!」

「ツナ危ねえ!!」

しかし、腕を掴まれているため、逃げ場はなかった。

「てめえはこんなんじゃやられねえだろ、ドカスが!!!」

顔の前にもうひとつのツナが手がかざす。さすがのジエライトもとっさに出した手で攻撃を防ぐなんてできないと思ったため、迷わず攻撃を続けた。しかし、それはツナの思惑通りだった。その手は攻撃を防ぐものではなく、ジエライトの刀の軌道をずらすためのものだった。

「な、何!!?」

やわらかな手つきで綺麗に軌道をずらした手は、再びジエライトに向かつて戻って来る。

バキッ!!

「ぐあああ!!!!」

「白^{しろ}刃^{はな}返^{かえ}し!」!

標的90 飛ぶ斬撃

ツナの新技、白刃返しが見事に決まった。

しかし、ジェラートにとってはこれだけではただのウォーミングアップくらいにすぎない。

「やるなあ、やはりてめーと戦うのはおもしれえ、どんどん来い！
！！」

「言われなくても、やってやるぜ！！！！」

ツナVSジェラートの戦いはますますヒートアップしていった！！！！

「うおおおお、マキシマムバースト！！！！！」

ドゴオオオオン！！

「それは幻覚だ！」

「くっ」

コロネロVSガイア・ケルベロスの戦い、霧の幻覚に惑わされ、コロネロの攻撃は一切当たっていない。

そして再びケルベロスは霧状になり、姿を消した。

（奇襲攻撃か、ならば・・・）

「ファルコ！！！」

鳥のファルコはコロネロを掴んだまま回転し始めた。

ドンドンドンドンドンドンドンドン!!!

アルコバレーノの試練で見せた、獄寺の晴のフレイムアローを落と
した技だ。全方位に手当たり次第攻撃を飛ばした。

「ぐお!!!」

(見つけた!!!)

「はあああああ」

バキッ!!!

「くっ、こんなチビなど、幻覚を使わずとも勝てる!!!」

すかさずコロネロに襲い掛かるケルベロス、しかし自信満々に放つ
た拳はいとも簡単に小さい手によって止められた。そして -

ドゴッ!!!

「ぐあ!!!」

瞬時に腹に蹴りを入れられたケルベロスは吹き飛んだ。小さくても
戦闘能力は昔のままである。

(くっ、あんな体のどこに力パワーがあるというのだ)

ジャキッ!!

「!!!」

「マキシマムバースト!!!」

「しまった!!」

体制が崩れた所への容赦なき的確な一撃を放った。この状態からではケルベロスといえどよける方法はなかった。『ケルベロスだけ』なら……。

ズドオオオオン!!!

「やったか!?!?!いや」

コロネロの目の前に現れた紫色の龍、マキシマムバーストを遮り、隙をついた一撃が下る。

「董龍破きんりゅうは！……！」

「おもしろいな、ボンゴレよ……！」

「くっ」

楽しそうにツナと戦闘をするジェラート、ツナを殺すのではなく心の底から戦いを望んでいるようにしか見えなかった。

「どういうつもりだジェラート!?!」

「ん?」

「お前のはただ戦いを楽しんでいるようにしか見えない」

「………」

ジェラートは何も答えなかった。そのまま刀を構えた。

「飛斬ひざん！……！」

ビュビュッ……!

「?」

ツナにはただその場で刀を振り回したようにしか見えなかった。し

かし次の瞬間 -

ズバツ!!!!!!

「ぐつ!!」

突然体に来た苦痛、先程のジェラートの斬撃が飛んで来たのだ。

(斬撃が・・・飛んで来た!?)

「くくく、大丈夫か沢田綱吉!?!こいつはオレの奥義・飛斬だ!!」

(飛斬!?)

刀を振り回すだけで斬撃を飛ばす技、斬撃ゆえ目には見えない、それに直感で感じようにも気づいた時には回避は間に合わない。

「そんなに言うんだつたらすぐに決着つけてやるぜ」

「その必要は・・・ねえ」

「何?」

立ち上がったツナのその目は、起死回生の策があるという目だった。

「お前が飛ぶ斬撃なら、今度はオレが飛ぶ攻撃を・・・見せてやるぜ!!!!!!」

標的 9 1 飛ぶ攻撃

「うっ」

(油断・・・したぜ・・・コラ)

ガイアの董龍破きんりゆうはを喰らったコロネロ、なんとか直撃は避けたものの、大ダメージを受けたのは間違いないなさそうだ。

ケルベロスとガイアはその状況を楽しそうにしていた。

「アルコバレーノといえど龍の力の前では無力か」

「千本ナイフ(ミツレ・コルテツロ)と共に死ぬがいい」

そして霧の炎が纏った千本のナイフがコロネロへと襲い掛かる!!!

「飛ぶ攻撃だと!?!まさか貴様、オレと同じことができるんでもい
うのか」

「ああ」

ツナは短く答え、ポケットから死ぬ気丸を取り出した。そしてそれを手に取り、口へと運んだ。
するとツナの体を大空の炎が纏い出した。

「な、なんだあれは!?!」

「超死ぬ気モード2（セカンド）ステップだ!?!」

「やる気だな、ツナの奴」

「だが、何分まで10代目の体が持つか・・・だ」

モニターで見ているツナのファミリー達、あの時の戦いは再び彼等の記憶へと戻っている。2（セカンド）ステップのことは皆知っている。あとは、ツナを信じるだけ。

「ジハットGETTO・・・」

ジェラートから少し離れた位置で攻撃体制に入る。

（もしオレと同じ飛ぶ力を持つならば・・・）

「アタッコATTACCO!?!?!」

ズドオオオオオン!!

「がはっ!?!?!」

た。

そしてコロネロは自分のおしゃぶりが光っているのに気づいた。

「リ、リボーン」

「だらしねえなコロネロ、こんな奴らに参るお前じゃねえだろ」

「ちっ、誰が参ったって言ったよ、コラ！！まだ負けてねえぜ！！」

リボーンの激励で立ち上がったコロネロは満面の笑みだった。

「アルコバレーノが2人、相手にとって不足はない」

「ですな」

フィルマール側も同じく戦闘体制に入った。

「いくぞコロネロ！！」

「おう！！！！」

ついにリボーンとコロネロの2人が揃った。勝敗はいかに！？

標的92 激化する戦い

「GETTO!!!」
ジエラート

(何度も喰らうかよ!!)

「飛斬ひざん 乱らん!!!」

ドゴオオオオン!!!

再びツナとジエラートの飛ぶ攻斬撃が激突する。
その衝撃は2人の視界を完全に遮っていた。

ヒュン!!という音と共にツナが超高速でジエラートの裏に回った。

「!!!!!!」

(やはりそう来たか、だが無駄だ!!!)

ズバツ!!!

「ぐあっ」

攻撃を仕掛けようとしたツナの方が声を上げ、その場に落ちた。

「お前が超スピードで裏に回って来るのは想像がついていた。飛斬ひざん

乱は全方向に放つ技。貴様がどこへ移動しようと思破れなければ今のようになる」

ジェラートは余裕そうにツナを見下ろす。対するツナは傷を押さえながらジェラートを見上げていた。だが思ったよりダメージが大きかったらしい。

「ふっ」

ジェラートは鼻で笑い、刀に炎を灯した。しかし、いつもと炎の状態が違った。それにはツナも気づいたようだが……。

「マ、マズイぞ」「えっ、何がマズイんだスクアアロ!？」

「奴の刀を見てみるお」

スクアアロがそう指摘すると、皆の視線がジェラートの刀に注目した。すると……。

「あれは……」

「波動を纏ってる」

言葉通り、ジェラートの刀に炎破の波動が纏っていた。死ぬ気の炎を破る波動を直接喰らえばダメージは計り知れないはず。

ブウンー!!!

「くっ」

ジェラートが軽く振った刀をなんとか避けたが、視線をジェラートに戻すとすでに目の前まで迫っていた。

「逃がさないぜ」

ビュッ!!!

「????」

ジェラートは刀を振ったが、ツナには届いていなかった。届かなかったというよりわざと外したようにも見えた。

ズバツツツツツ!!!

「うあああああ!!!」

次の瞬間、ツナの体から血しぶきが飛び散った。

「あの龍、一筋縄の攻撃じゃあ倒せないだろうな、コラ」

「ああ、だったらやるしかねえな」

「アレを・・・か？」

「ああ、何かマズイことでもあるのかコロネロ!?」

「いいや、久しぶりだからな」

コロネロは苦しい表情から余裕の表情に一変した。もはや先程までの嘘のように思えた。その余裕さにさすがのケルベロスとガイアも真剣な表情へ変わった。

「アルコバレーノ共よ、見せてみるがいい、ケルベロス!!」

「ハッ!!」

ガイアは再び雲龍を解き放った。

ケルベロスは龍の周りに纏うように千本ナイフを浮かせた。

「いくぞ、きんりゅうは董龍破!!!!」

「こっちもいくぞ!!」

「おう!!」

そしてリボンとコロネロのおしゃぶりが強烈な光を放ち始めた。

「マキシマム・・・」

「カオス・・・」

「な、何！？」

「炎破えんぱの波動は超高密度である死ぬ気の炎を破る力、それを体に放つたら一瞬で粉々さ」

「それなら……」

「ん？」

「喰らわなければいい！！！！GETTOジエット……」

「な、何！？動けたか！？」

一瞬の隙ができたジェラートに、ツナは全身全霊の攻撃を放った。

「ATTACKアタック！！！！」

標的93 敗北

「がはっ」

「もう喰らいはしない」

再び高速でジェラートへと攻撃を仕掛けた。今度は真っ直ぐ飛ぶのではなく、飛斬ひきざんを喰らわないため瞬時に方向を変え、デタラメな移動でジェラートを翻弄する作戦だった。

「ちっ、ござかしい、飛斬ひきざん 乱らん!!!」

再び全方向に斬撃を飛ばすジェラート。そしてジェラートは全身全霊を目に集中させた。

チッ!!!

（見えた!!!）

ジェラートの見たもの、それは飛斬ひきざんが一瞬でもツナを触れる瞬間だった。

（見つけたぞ!!!ボンゴレ!!!）

その時を待っていたかのように、ジェラートの刀には巨大な炎が纏っていた。

「終わりだ、紅の超刃オウヤイハ!!!」

ジェラートの刀から放たれた炎は真っ直ぐツナに向かって迫る。

(な、何だこの炎は!?)

「まだツナは戦ってるようだな」

「ああ、相手はジェラートだ、早く妖精を捕まえて終わりにしようぜ」

「ああ、そうだな」

ヒュン!!!

「!!!!!!」

リボンとコロネロの耳に聞こえた移動音。見上げるとそこには話していた妖精が。

「よし、オレが追っせ、コラー!!!」

片が残っていただけ。

「跡形もなく、消滅したか」

ゾクッ！！！！！

「！！！！」

謎の悪寒がジェラートを襲い、思わず振り返った。そこには……

「覚悟しろジェラート！！！！」

「何！？」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
お！！！！」

ジェラートの目に写ったのは、雄叫びを上げ、超巨大な炎を纏う沢田綱吉。

（バ、バカな……直撃したはず……直撃？）

「そうか、零地点突破……改！？」

何をしてもしも上回られた、どのような技も、テクニックも、スピードもパワーも……。

「ふっ、オレの負けだ」

標的94 予想外の結果

硝煙に視界を奪われたコロネロとリポーン。

今はどうしようもないと、収まるのをジッと待っていた。

ツナVSジェラート戦、ついに決着。倒れたまま動かないジェラート、完全に勝負があつた感じだ。

しかし、ツナも気力の限界かガクツと足から碎けるように地面に座つた。

そしてリポーン達の前から煙りが去つた。そして2人の前に驚くべき光景が目に入ったのだ。

「あれは・・・」

「マジかよ、コラ」

モニター組からは何がなんだかよくわからなかった。倒れていた2人は倒れたまま何も変わってはいない。

「いや、あれをこらんなさい」

骸が倒れていたガイアの手を指差した。みんなもそれに注目した。

「なっ」

「マジか」

「そんな」

「ハーハツハツハ、天はフィルムマーレに味方したようだな」

ガイアの手には、リボーンの打ち落とされた妖精の姿があった。おそらく硝煙の中で偶然ガイアの手の上に落ちたのだろう。

「どういふ状況であれ、ルールはルール。よってこの勝負、我々フィルムマーレファミリーの勝ちだ」

ウィンディの声が響き渡る。誰もこの結果は想像ができなかっただろう。

「みんな、すまねえな、コラ」

「そんな、別にコロネ口達のせいじゃ・・・」

「だが、これで奴らにリーチがかかった」

リボーンの手は強くグツと握られていた、その悔しさは全員が理解した。

そしてリボーンの言う通りこれでボンゴレは5戦2勝3敗、次に負ければボンゴレはそのまま敗北の道に・・・。

「ふふっ、ずいぶんと焦っているようだな」

「ウィンディ!!!!」

「このまま6戦目に入っても構わないんだが、少し休息时间といこう」

「!!!!」

「次のチヨイスはチームチヨイス、5人チームだからよく考えておくんだな」

そのままプチッと画面が消えた。

傷ついた者達をヒーリングカプセルに入れ、全員が完全回復した。

457

そしてチームチヨイスで誰が出るかの話し合いが行われていた。

この勝負が運命を決める、慎重にえらばなければならぬ。

「どうすんだツナ、ボスのお前が決める」

「ええ、そんなこと言ったって……」

「うう、お、お、お、い、さっさと決めやがれえ、決まんねえならオレ達がヴァリアーが出てや……」
ドカツ!!

「ぐお!!」

どこからともなく飛んで来たイスがスクアーロにクリーンヒットした。

「てめ・・・」

「うるせーカス鯨、沢田、てめえがさっさと決めねえなら・・・！」

「もう少し待ちやがれ、ボスである10代目が決めるに決まってるーが！！！」

「しししっ、やるか」

「望むところだぜ」

ズガンツ！！！！

獄寺とベルの間を銃弾が通った。

「いいかげんにしやがれ、争ってる場合じゃねえ」

リボーンの圧倒的威圧感に全員身震いした。

「オレが決めてやる」

「えっ、リボーン！？」

そしてリボーンが決めたメンバーとは！？

標的95 チームチョイス

「ついにリーチとなったなボンゴレ諸君、次はチームチョイスだ、メンバーは決まったか!？」

「いつでもOKだ」

「ほう、自信满满だなアルコバレーノ、期待通りになるといいな」

チームチョイス、互いのチームから5人のメンバーを選び出し、先鋒、次鋒、中堅、副将、大将を決める。

戦いは5つ同時に別空間で行われる。その中で最速3勝をした方の勝ちとなる。

ボンゴレは先鋒から順に沢田綱吉、XANXUS（10年後）、雲雀恭弥、六道骸、白蘭。

リボーンが選んだ自信满满の一手だった。確かに誰がみても最強のメンバーに相違ない。

ボンゴレの5人の戦士達はそれぞれの戦場へと進んだ。

【先鋒戦】

「ここが、戦いの場所・・・」

「待っていたぞ、ボンゴレ」

「き、君は……」

【次鋒戦】

「……」

「貴様が私の相手か」

「てめーか」

【中堅戦】

「君が相手？ケガはもういいのかい、ハンデあげようか」

「ナメてんじゃねえぞ、てめえらと同じように完璧に回復してる、お前みたいなクソガキごときにてこずりもしねえな」

「それはよかった、ちょうど本気で咬み殺したいと思っけていてね」

【副将戦】

「クフフフ、真6神官の力、見せてもらいますよ」

「来な」

【大将戦】

「僕の相手になれるかどうか楽しみだよ」

「一瞬で勝負が決まらなければいいがな」

先鋒戦・沢田綱吉 VS デイアナ

次鋒戦・XANXUS VS ホルス

中堅戦・雲雀恭弥 VS ジェラート

副将戦・六道骸 VS ガイア

大将戦・白蘭 VS インドラ

5戦同時開幕！！！！

「デイ、デイアナ・・・」

「ボンゴレ、抹殺する」

ジュジュジュッ……!

「うわ」

（くっ、本気だ）

雲の炎を帯びたナイフを避け、超モードとなるツナ。もはやこの戦いは避けられない。

（行くしかない……!）

フッ……!

一瞬でディアナの後ろに瞬間移動したツナ、骸と戦った時と同じように神経を麻痺させようとしたが……。

ガッ……!

（読まれてるか）

「……!」

ズバッ……!

「ぐっ」

先手を取ったのはツナではなくディアナの匣兵器の爪だった。

「くっ、だったら・・・」

ボウッ!!!

再び超高速での移動、しかし今度は真っ直ぐにディアナに向かって飛んだ。

「真っ向か、よかろう」

対するディアナもツナに真っ向から向かって行った。

そしてついに2人が交錯した!!!

標的X 詳細

〈序章編〉

10年後から戻ってきたボンゴレファミリー転覆をたくらむファミリーが動き出す。リングと匣兵器を使用し、ツナ達に襲い掛かる。

〈メンバー集結・修行編〉

ボンゴレ独立暗殺部隊・ヴァリアーをも倒され、打つ手もなくなってきたところにリボンが10年後の彼らをつれてくることを提案した。リングと匣兵器を持つ10年後ヴァリアーがいれば、強力な戦力になる。そして、最強の赤ん坊達も姿を現す。

〈ハイパー
超チヨイス編〉

フィルマーレファミリーにチヨイス戦を挑まれたツナ達は10年後ヴァリアー、アルコバレーノ達と修行し、ついに決戦を迎えた。

〈あの時の未来編〉

ウィンディが自分の能力を発動し、未来で自分が見た映像をツナ達に見せる。その目的は……。

〈怒涛のチヨイス編〉

ウィンディの策略により、ツナの憎しみの心はしだいに増加していく。そして、未来での最強の敵が味方として戦場に現れる……。

波動

特殊なオーラを放つような技で様々な種類があり、属性の特徴に係あるものもないものがあるらしい。

畏怖の波動

強力な威圧感で相手を気圧することができる。

調和の波動

大空属性特有の波動、詳細は不明。

無我の波動

晴属性特有の波動。自分の攻撃、防御、スピードを何倍にもすることが出来る。おそらく活性によるものと思われる。ただし、活性させた反動が返ってくる。

雷霆らいていの波動

雷属性特有の波動、詳細は不明。

炎破えんぱの波動

嵐属性特有の波動。その名の通り炎を打ち消す波動。

静止の波動

雨属性特有の波動。その波動で相手の動きを止めることができる。

夢幻の波動

霧属性特有の波動。実体と幻覚を見分けなくすることができる。

考陰こういんの波動

雲属性特有の波動、詳細は不明。

虹龍にじりゅう

大空、晴、雷、嵐、雨、霧、雲の属性の龍の総称。

ドラムーンネ・デル・セレーノ
晴龍

晴属性の龍。

ドラムーンネ・テンベスタ
嵐龍

嵐属性の龍。

ドラムーンネ・ディ・ピオツジヤ
雨龍

雨属性の龍。

ドラムーンネ・ディ・ネツピア
霧龍

霧属性の龍。

ソウルフレイム
死ぬ気の炎を龍の形に具現化させ、相手に攻撃する技。本人の属性
の波動によっては純度・大きさは異なる。

せんりゅうは
茜龍破

大空の炎のソウルフレイム。

おうりゅうは
黄龍破

晴の炎のソウルフレイム。

こうりゅうは
紅龍破

嵐の炎のソウルフレイム。

そうりゅうは
蒼龍破

雨の炎のソウルフレイム。

紺龍破
こんりゅうは

霧の炎のソウルフレイム。

ハイパー
超チヨイス

ウインディによって開催された世界の命運を賭けた戦い。ルールを決めるルーレットは未来で使用されたものと同じ。全部で7戦行い、先に4勝した方の勝利となる。

第1回戦・3 on 3 フィールド：霧

3対3の戦い。霧フィールドは上から見ると、縦50メートル、横75メートルの長方形の形をしていて、その空間内を6等分してある。一人縦横25メートルの部屋にいるのと同じ。この空間はどこへ歩いていても同じ景色しかなく、6等分してあるところに見えない境界線があり、それを見つけ、破らなければ敵とも味方とも会うことはできない、というフィールド。

ボンゴレ（勝）：山本、骸、10年後スクアード

フィルムマール（負）：ケルベロス、ウーラノス、ディアナ

第2回戦・Due attractio フィールド：嵐

2属性VS2属性の戦い。砂嵐吹き荒れる砂漠がフィールド。フィールドに入った瞬間属性ごとにバラバラになり、獄寺、10年後ベルフェゴールはホルス、了平、10年後ルツスーリアはリベル、インドラと対峙。

ボンゴレ（負）：獄寺、10年後ベルフェゴール、了平、10年後ルツスーリア

フィルムマール（勝）：ホルス、リベル、インドラ

第3回戦・チヨイス フィールド：雨

ツナ達が未来で真6弔花と対決した時のチヨイス。場所は森で、未

来の時と似ている。そこで降る雨はすべて鎮静の効果を持っているのであたるだけで作用する。しかし、早々に決着が着いたので参加メンバーのほとんどがその効果を受けていない。

ボンゴレ（勝）：ツナ、レイア（白蘭）、クローム

フィルマーレ（負）：ヘリオス、ペガサス、ウーラノス

第4回戦・ロットチョイス フィールド：雷

フィールドとメンバーの数をジャイロルーレットで決定し、メンバーはくじ引きによって選ばれる。

ボンゴレ（負）：ディーノ、雲雀、マーモン、風

フィルマーレ（勝）：静香、ヘリオス、ウインディ

第5回戦・ラバーチョイス フィールド：雲

羽根の生えた小さな妖精のような生き物をに捕まえた方が勝ち。スピードがとても速く、頭も使わないと捕まえられない。周りは雲でいっぱいの上空のソリッドビジョンの中での戦い。まわりの雲は死ぬ気の炎で生成してあるが触れてもダメージはなく、炎で攻撃すると消滅していく。ただし雲属性の特徴・『増殖』に次々と増えている。

ボンゴレ（負）：リボーン、ツナ、コロネロ

フィルマーレ（勝）：ケルベロス、ジェラート、ガイア

第6回戦・チームチョイス フィールド：晴

互いのファミリーより5人ずつを選び出し、先鋒、次鋒、中堅、副将、大将に振り分け、それぞれ対決し、先に3勝した方が勝利。

ボンゴレ：先鋒・沢田綱吉、次鋒・XANXUS、中堅・雲雀恭弥、

副将・六道骸、大将・白蘭

フィルマーレ：先鋒・ディアナ、次鋒・ホルス、中堅・ジェラート、副将・ガイア、大将・インドラ

標的XX 登場人物

フィルマーレファミリー

突如ツナ達の前に現れた謎のファミリー。リングに死ぬ気の炎を灯し、匣兵器をも使用してくる。

ウィンディをボスとして部下である最高幹部『真6神官』、それらを補佐をする『6神官』が存在する。

ウィンディ

炎の属性：大空 匣：不明

フィルマーレファミリーのボス。年齢は100を越える。かつて初代ボンゴレファミリーと対決した未敗れ、零地点突破で凍らされたが、時を経て復活。ヴァリア-のボス・XANXUSを軽くあしらう実力者だが実力は不明。ボンゴレ?世の零地点突破で眠っている時に、自分に『自由自在の幽体離脱』という能力があることに気づく。復活した時、復讐を果たすために沢田綱吉達に出会った。六道骸との戦い、ボンゴレ独立暗殺部隊・ヴァリアーとのリング争奪戦、未来での戦いで常にツナ達のそばにいたため、チョイスのことや匣、リングからの死ぬ気の炎のことを知っている。また、時空を超える『時渡り』という能力も持っている。また万全状態のアルコバレーノ2人を一撃も喰らわずに勝利しているので、まだまだ隠された能力を秘めている様子。名前の由来は神獣より。

真6神官

精製度Aのリングと匣を使用するウィンディ直属の部下。ヴァリアー隊を超える人間離れした能力を持っている。それぞれ晴、雷、嵐、

雨、霧、雲の守護者が存在する。

晴属性：ヘリオス

雷属性：インドラ

嵐属性：ジェラート

雨属性：静香

霧属性：ペガサス

雲属性：ガイア

ヘリオス

炎の属性：晴 匣：晴チーター、晴龍

全身白スーツで覆ったような服装で、言葉はだらしない。超チヨイス3回戦でレイアと対決。初めは優勢であったものの、正体を現した白蘭に圧倒的な力の差で敗北。リングを光らせ相手の目をくらませたり、炎エネルギーの塊を放つ太陽弾たいようだまなどがある。白蘭にやられた傷が癒えていない状況で4回戦に登場。デイーノと交戦中。名前の由来はギリシャ神話の太陽神。

インドラ

炎の属性：雷 匣：不明

雲に乗って、まさに雷様のような男、超チヨイスの2回戦に選ばれた。了平、ルツスーリアと対峙。了平の超強力な一撃・ビックバンマキシムムキャノン極限太陽を喰らったが平気だった。ベルフェゴールを助けに行こうとしたルツスーリアを雷の一撃・サンダーボルトで一蹴した。名前の由来はバラモン教・ヒンドゥー教の神。

ジェラート

炎の属性：嵐 匣：不明

やや長い金髪の青年。2つの剣を使用する。超死ぬ気ツナと対決をし、本気を出していない状態で互角。そしてチヨイス5回戦でツナとの念願の再戦を果たす。第2章でツナ、霸王が見せたGETTOシエッタ攻撃にそっくりな飛ぶ斬撃を見せ、ツナを追い込む。名前の由来はイタリア語で「凍った」の意味。

ペガサス

炎の属性：霧 匣：霧龍（真）

超チヨイス3回戦でツナと対決。霧の幻覚を駆使して京子やハルの幻覚を作り出し、翻弄している。ツナが霸王となり、押されるも真の霧龍と合体し、逆に霸王を追い詰めた。名前の由来はギリシャ・ローマ神話の天馬。

静香

炎の属性：雨 匣：雨龍（真）

リベルをにツナ達を奇襲しろと命令した張本人。超チヨイス4回戦にて登場し、雲雀と交戦、互いにボロボロになり、最後は雲雀の終焉の炎に敗れる。

ガイア

炎の属性：雲 匣：雲龍

建物の屋上でツナ達を監視していた赤髪の男。5回戦にて出場。リボン、コロネロと交戦。

6神官

精製度Bのリングと武器を収納している匣を使用してくる。真6神官の部下であり、同じく晴、雷、嵐、雨、霧、雲の守護者が存在する。ウインディや真6神官の部下ではあるが現段階で忠誠心が見え

るのはリベル、ケルベロス、ディアナの3名。

晴属性：ウーラノス

雷属性：リベル

嵐属性：ホルス

雨属性：アトラス

霧属性：ケルベロス

雲属性：ディアナ

ウーラノス

炎の属性：晴、匣：ハンマー、晴龍

ほとんど仲間意識がなく、リベルやホルスとよく喧嘩をする。真6
神官やウィンディにも忠誠を誓っているようには見えない謎の男。
晴属性特有の波動・無我の波動を使える。また、晴龍の匣を使用し、
スクアアロを倒したと思ったが、晴龍の体を突き破られ鮫土砂降り
(デイルヴィオ・デイ・スクアアロ)で倒される。しかし、晴の活
性で復活して3回戦に出場。クロームのイリユージョンに苦戦する
も、龍との合体で優位に立つ。現れた本物の霸王と白蘭相手に黄龍
破で応戦する。名前の由来はギリシャ神話に登場する天空神より。

リベル

炎の属性：雷、匣：長刀

『静香』という人物から命令され、部下を従えてツナ達を襲撃した。
口調は丁寧だが冷静さを失うと悪くなる、白髪で悪魔の顔をした少
年。雷の如く光速で移動することができる。雲雀恭弥と対決をし、
完敗、ジェラートに連れていかれる。超チヨイス第2回戦に選ばれ、
インドラと共に了平、ルツスーリアと対峙。了平の超活性、無我の
波動、そして死ぬ気の一点集中のコンボ攻撃で一撃で倒される。名

前の由来はイタリアのベネツィアにある橋の名前。

ホルス

炎の属性：嵐、匣：妖刀、嵐龍

物静かでちよいちよいかいをかけてくるウーラノスをほとんど無視している。しかし、戦いを仕掛けて来ると応戦する仕草を見せる。超チヨイス第2回戦に選ばれ、獄寺、ベルと戦闘中。二人の怒涛の攻撃にも一切喰らったそぶりを見せない。武器である妖刀は一度でも喰らうと傷口から嵐の炎が侵入し、体の至る所で分解作用が発動する。獄寺との真剣勝負で引き分けとなった。ウィンディ曰く6神官最強。名前の由来はエジプト神話に登場する天空と太陽の神。

アトラス

炎の属性：雨、匣：刀

ボンゴレ本部イタリア支部を襲撃した張本人。ヴァリア-隊をほぼ全滅させ、XANXUSと直接対決し、敗北、その後ウィンディに処刑された。炎を龍の形に具現化させる技・ソウルフレイムを使うことができるため、持ち匣は雨龍と思われる。また雨の鎮静の炎を纏った槍を放つ『無雨槍破』を使える。名前の由来はギリシャ神話の神。

ケルベロス

炎の属性：霧、匣：ナイフ

ツナ・クロームと対決をしたジェラートを補佐した人物。ミルフィオーレ真6甲花・トリカブトの弟で見た目が同じ。武器であるナイフを霧の構築で千本にして襲う。夢幻の波動を扱える。1回戦に出

場。波動を知らない山本に油断し、敗北。その後5回戦にてガイアと共にアルコバレーノと激突する。名前の由来はギリシャ神話の冥界の番犬。

ディアナ

炎の属性：雲、匣：ツメ

表向きはお嬢様、金髪で空色の瞳をした少女、とても優しい性格である。しかし幼いときフィルマーレに両親を目の前で殺されたとき、もうひとつの人格が現れた。そこで連れ去られ、6神官の一人となった。元の優しいディアナに戻るときがある。1回戦で骸と戦い、時間切れで中断した。名前の由来はローマ神話の女神。

リースファミリー

昔からボンゴレと仲のいいファミリーであり、フィルマーレの標的の1つとされる。

フィオラ

リースファミリーの先代ボス。孫娘と共に日本へ来た。名前の由来はイタリア共和国ロンバルディア州ローディ県という場所の共同体の1つ。

レイア

炎の属性：大空 匣：不明

フィオラの孫で現・ボス。とても優しそうな美少女。リースファミリーの幹部がフィルマーレファミリーによって暗殺され、状況を知ろうと日本へ来た。超チヨイス3回戦に大空として参戦。しかしその正体は未来で戦った最強の敵・白蘭だった。マーモンの幻覚と夢幻の波動により、ツナ達は気づくことができなかった。名前の由来

はウェールス神話に登場する人物。

白蘭

炎の属性：大空 匣：白龍（2体）、GHOST

元ミルファイオーレファミリーの総大将。レイアをマーモンの幻覚と夢幻の波動で覆っていたがヘリオスと対戦中、レイアの姿では勝てなかったため姿を現した。ユニが未来での出来事をこの世界（未来で戦いを経験したツナ達が存在している世界）の白蘭にも知らせており、そのことを知っているボンゴレ9代目が連れて行った。まだボンゴレに忠誠を誓ったという証拠がないため、右足にボンゴレの紋章がついた枷がつけられている。また9代目にマーレリングの封印を解いてもらい、所持している。姿・年齢はこの時代のものである（今のツナ達と同じ年くらい）。実力は未来戦の時と同等のよう
で、真6神官のヘリオスを圧倒した。GHOSTを匣化させ、所持している。霸王と共にクロームの元へ駆けつけ、合体技を放ち、勝利する。

霸王^{はおう}

炎の属性：闇 匣：不明

ツナの体を媒介に突然現れた謎の人物。ボンゴレの味方であるようだがその経緯は不明。ツナよりも戦闘力は遥かに上で、ペガサスを圧倒。しかし、真の龍と合体したペガサスには苦戦中である。最後には奥義・^{ダブルイクス}XXX^{バーナー} BURNERで勝利。白蘭と共にクロームの元へ駆けつける。

ヴァリアー

ボンゴレが誇る独立暗殺部隊。謹慎中だったがフィルマーレファミリーにボンゴレ本部が襲われたため、特別解放。しかし、死ぬ気の炎を使う相手だったため、アトラス一人に敗北。XANXUSは憤怒の炎で応戦し、倒すことができた。後にチョイス参戦のため日本

へと来る。

10年後ヴァリアー

ツナ達に敗れ、特殊10年バズーカで呼ばれたヴァリアー。説明を聞き超チヨイスに参戦。

アルコバレーノ

マフィア界最強の7人。ボンゴレファミリーを修行すべく現れた。

ラヴィーナ

獄寺の実の母親。イタリア人と日本人のハーフで、駆け出しのピアニストだった。獄寺が3歳の時に事故死しているが、獄寺の父親の部下に殺されたという噂もある。自分が母親と名乗れずに苦しい思いをしていた。彼女の使用していたピアノは10年後にはボンゴレ基地に置かれている。

標的96 沢田綱吉 VS ディアナ

ガッ!!!

「……………」

「どっちら今のは引き分けのようね」

「それはどうかな？」

「何!? なっ、これは……」

ツナとディアナが交錯、互いに外傷はなかったが、ディアナがふと自分の手を見ると、爪ごと腕が凍り付きにされていたのだ。

「零地点突破・初代エディション!!!」
ファースト

「くっ」

「すげえな」

「さすが10代目、一瞬であのまじりできるとは」

困惑するディアナだったがボンゴレ達と戦う前に会議でのウィンディの言葉を思い出した。

(確かボスは凍らす零地点突破は炎で溶けると・・・なら)

ボウツ!!

「!!」

一緒に凍り付けにされている雲のリングに炎を灯した。予想通り氷が溶け始めていった。

しかし、氷の純度が高いせいか、なかなか溶けない。そしてそれをゆっくり待つほどツナはジツとはしていない。

「行くぞ」

「くっ」

再び真っ向から向かうツナ、そして再び真後ろへ。

ガッ!!

「・・・」

「ふふ、炎は使えなくても、防御くらいできるわ」

バキッ！

「なっ」

攻撃を防御されたツナは一瞬でディアナの両足を蹴り、地面に尻餅をつかせた。そして再びディアナの表情が曇る。

「そ、そんな・・・」

腕だけでなく、今の一瞬で足までも凍り付けにされていた。

「これで終わりだ」

ツナはそう言って一定の距離を置いた。

「オペレーションX」

ポウッ！！！！

（炎の逆噴射！？これもボスが言っていた危険な技・・・）

逃げようにも手足が凍っていては身動きが取れない。

その間もX BURNER発射の用意は進んでいく。

(こうなったら、最後の手段)

「綱……吉……君」

「!!!!」

(この声、優しい時の……本物のディアナ)

「助……けて」

「ディアナ!!!!」

(ふふ、元のディアナを声を真似るなんて造作もないわ、これで打てないでしょ……)

しかしその直後、ディアナの顔面に激痛が走った。

「あああああ」

その突然の叫びにツナも驚く。

「綱吉君、騙されちゃダメ」

「デイ、ディアナ？」

「今のはこいつが私の声に似せて綱吉君の攻撃をためらわせようとしただけ、私のことはいいから、こいつごと私を消滅させて」

「なっ」

（そ、そんなバカな、元のディアナが外に感情を出すなどできるわけ・・・）

「だ、だけど・・・」

「！……！」

（そうか、今の声が私の偽物だろうと本物のディアナの声だとしても関係ない、どのみちボンゴレは攻撃できない）

ディアナの思惑通りだった。ツナ表情は焦り始め、攻撃をためらっている。

（どうすれば・・・）

「綱吉君」

「！……！」

「打って、このままだと私は救われない」

「で、でも……」

「あなたには大空の力がある、それで私を……」

その言葉でツナはハツとなった。

(そうか、その手があったんだ)

ツナの目には活気が戻り、再び後ろへ炎の逆噴射。

(打、打つというのか)

「いいのか、お前の仲間のディアナが死んでもいいのか」

「死なせはしない、お前も……ディアナも」

「何!?!」

両手の炎圧が揃った。あとはそれをディアナに向けて放つだけ。

「ま、待て」

(くっ、くっとなれば……)

ドクンッ!!!!

最後の賭けでディアナがツナに静止の波動を放った……しかし、今のツナの力はディアナの波動は効かなかった。

(必ず……助ける!!)

「いくぞディアナ、X BURNER!!!!」

ドウッ!!!!

標的97 XANXUS VS ホルス

「飛斬^{ひざん}!!!」

ビュビュビュッ!!

「!!!」

(奴も飛ぶ斬撃か、だが・・・)

ズガガガガ!!!

「軌道がわかってればこんなものなんでもねえ」

「さすが、とだけ言っておこう。しかし、軌道は見えていても避けられなければ意味はないぞXANXUS」

そう言っつて刀を振り上げ、構えを取った。一呼吸置き、刀に嵐の炎が灯る。

「飛斬^{ひざん} 爆^{ばく}!!!」

(巨大な炎での攻撃か、ならば同じようにすればいいだけだ)

「コルポ・ダッディオ!!!」

ドゴオオオオン！！！！

相殺される互いの炎。XANXUSはまだまだ余裕な感じだった。

バキッ！！

「いつまでこんな攻撃続けるつもりだカスが」

「ただの挨拶さ」

ポウツとリングに炎を灯し、紅蓮の龍を降臨させる。

「嵐龍らんりゅう！！！！」

「フンッ」

「嵐龍、XANXUSを飲み込め！！」

巨大な龍はXANXUSに向かってその体を突っ込ませる。
しかし、XANXUSは避けるそぶりを見せない。

「ボス？」

「避けないのか」

「……ドカスが……」

ギロツ!!!

XANXUSの一睨みで嵐龍が動きがピタツと止まった。

「こ、これは……畏怖の波動!?!」

さらにもうそこからもうひと睨み。その瞬間、龍の体が石化していった。

「こ、これは……」

「やるのか、ボス」

固まった龍を目の当たりにしたホルスの顔も少し濁った。

「これは……大空の波動……!?!」

(やはり……大空の波動は炎の調和と同じ効果か)

コオオオオ!!!

「!!!!」

ドゴオオオオン!!!

「くっ」

固まった龍を憤怒の炎で一撃粉碎。炎でできた龍は他の匣兵器と違い、破壊されても匣に戻る。

「破壊されても、何度でも」

ボウツ!!!!

「!!!!」

先程までとは打って変わるような炎を発するホルス。そして再び嵐の龍が姿を現す。その直後、ホルスのリングがパリッと割れた。

「!!!!、強い波動らしいな、カスにしては」

「ふっ」

「だがリングがねんじゃカスがドカスになっただけだ」

「だからボスはそのために私専用のリングを用意してくれた」

「何!？」

「精製度A以上のリングをな」

ボウツ!!!!!!

(精製度A以上だと)

「バ、バカな、精製度A以上のリングはトゥリニセツテだけのはずだ」

「まあ待て、奴の言葉を聞いてみよう」

「精製度A以上のリング、これだけならばボンゴレリングとマーレリング、アルコバレーノのおしゃぶりだけが頭に浮かぶだろう、だが世の中には細かく見れば様々な精製度が存在する」

「何!？」

「今現在確認されているのはE、^{ダブルイー}EE、^{トリプルイー}EEE、このうちEEEとEEを精製度E以上と呼ぶ。同じようにD、C、Bもそれぞれ存在する。しかし未だAからのリングはA、そして私の持つ^{ダブルイー}AAランクのリングまでしか確認されていない。また^{トリプルイー}AAAからは見つからない。トゥリニセツテはAAAなのか、はたまたそれ以上の力を持つのかもわからない。ただ言えることはAから上のリングは一つランクが上がるごとに10ランク以上の差がある。つまり貴様の持つAランクのリングと私の持つAAランクとは・・・」

(来るか)

「力の差がありすぎるのだ!!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7574j/>

新たなる戦い～第1章～

2011年11月21日18時57分発行